
異世界に迷い込んだと思ったら少女になってた

アオノア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界に迷い込んだと思ったら少女になってた

【コード】

N5020U

【作者名】

アオノア

【あらすじ】

異世界に不本意な形で迷い込んだ青年が段々エキサイトしていくお話、になる予定。

講義中に居眠りしていた多分そこらの大学生、
気がつくくと女の子になっていて、しかもそこは魔法学校だった。
あれやこれやと騒動に巻き込まれる主人公に幸あれ…

- 昔話かもしれない童話的な何か（前書き）

あまり意味は無いかもしれませんが。

・ 昔話かもしれない童話的な何か

昔あるところに二人の男の子がいました。

名前は“ネイロ”と“ノウア”

どうしてかなんて誰も分かりません。

まだこの世に“魔法”という言葉が無かった時代にあつて、二人は他の誰もが持たない“万能の力”を操れたのです。

それは、今の時代の魔法なんて目じゃなくらいずっとずっと強力なものでした。

ネイロとノウアは小さい頃からとても仲がよく、色んなことで競争して、時には喧嘩して、また時には助け合つて、万能の力と共にぐんぐん成長していきました。

そうして大人になった二人に敵う人などどこにもいません。

ネイロとノウアは世界を二手に分け、それぞれ大きな国を作つてその王様になりました。

王様になつても二人の仲が良いのは変わりませんでした。

国こそ分かれていましたが、争うことの無い平和な時代が長く続きました。

しかし何処からか、万能の力を持つ3人目の人が現われました。

それはとっても綺麗な“ナオラ”という名前の女の人でした。

彼女の万能の力はネイロとノウアに遠く及びませんでした。彼女は狡賢い女でした。

唯一三人目の万能の力を使える者として、絶世の美女として、何れ度も二人に近づき誘惑します。

二人は最初はナオラのことを無視していましたが、側近である大

臣達は大慌てでした。

ネイロとノウアにはずっとお嫁さんがいなかったの、大臣達はなんとしてもナオラを王様の嫁に迎えて国を安泰にしたい、あわよくばもつと強い万能の力を持った子供を作らせて、相手の国を倒してしまおうと考えたのです。

ナオラの欲深い心は、双方の大臣達の協力も重なって混沌の渦を巻き、二人を仲違いさせ、最後には大喧嘩に発展してしまいました。

後に“終末の戦い”“ラグナロク”と歴史に刻まれる出来事です。

ネイロとノウアは自分の国の人達の力を借りる事はしませんでした。

そんなことをしても意味がありませんでした。

全知全能では無いにしても、万能の力を持つ二人の喧嘩に割り込む事が出来た人はいませんでした。

そう、ナオラを除いては…

でもナオラは、二人の喧嘩をただ見ているだけでした。

ネイロとノウアのうち、勝った方のお嫁さんになろうと考えたのです。

二人の喧嘩は一週間で終わったとも、一年続いたとも言われています。

戦いが終わった後に残されたのは、かつて二つの国があったとき

れる荒れ果てた大陸。

水が乾きマグマの川が流れる、生き物が皆等しく息絶えた世界。

ナオラはネイロとノウアが、二人仲良く手をつないで死んでいるのを見つめます。

そこで初めて彼女は自分の行いが間違っていたことを知り、後悔に涙を流します。

彼女の涙は万能の力を伴って、大地の怒りと荒廃を沈めました。

彼女の後悔は歌となって、静まった世界に命の息吹として響き渡りました。

涙が枯れ、喉が潰れるまで歌ったナオラ。

彼女は最後に自分の力の全てを使い、ネイロとノウアの体を小さく小さく分解し、天に蒔きました。

こうして万能の力は世界中に薄く広く散らばって、今私達が“魔法”と呼び親しむ力となったのです。

新しくなった世界は“エリヌエ”と呼ばれ、新たな再生と破壊を繰り返す。

二人の魔法使いは全能を目指していた。ただし純粹に競い合う事で崩壊は、決してそれを求めた結果ではない。

1 居眠りの絆（前書き）

初投稿、不定期更新、大筋に影響無い程度に無報告でしょっちゅう推敲するかもしれません。

それでも誰か一人の目でも留まってくれたら、このお話が暇つぶしにでもなれたら幸いです。

独りよがりな文章にならないように精進していきたくと思いますので、ご意見ご感想など一言でもありましたらお気軽に書いて頂きたいです。よろしくお願ひします。

1 居眠りの絆

「魔法をうまく使うには、自分自身への意味付けと使う魔法そのものの掘り下げが重要です」

…ん？なんだか聞き慣れない言葉

あと頭がすごく重たい

「一つの魔法でも、そこらへんに転がってる石ころのように使うか、宝石のように大事に扱うかで千差万別、十人十色のチカラを生み出すのです」

ああ、（講義中に）昼寝してたんだっけ

昨日は遅くまでネット小説読んでたから寝足りないんだ。

「魔法を石ころとして敵に投げつける分には大した威力はありませんが、たくさん投げられますし色んな応用が効きます」

…妙な胸騒ぎがして眠いのこれ以上眠れない

仕方ないので、さっきから俺を嘲笑っている睡魔を撃退しようと奮闘する脳を思いやりながら、机に突っ伏していた顔を上げて無意識に口から垂れていた涎よだれを服の裾で拭う。

「そして宝石のように大切な魔法をぶつける場合、それはそれは大事なものでたくさん投げることなんて出来ませんが、皆さんが思いを込めた分だけそのチカラは強くなって、思った通りの効果を与えることができます」

教師と思しき格好をした大人の女性が教壇でこっちに向かって話

をしている。

なんでマント、いやローブか。

説法を続ける女性は教師であると同時に三角帽子被ったメルヘン童話に出てきそうな少し若づくりな魔女に見えなくも無い。

「石ころが純粹な力だとしたら、宝石は皆さんが染め上げた皆さんだけの力です。これから様々な系統の魔法を習うでしょうが、一番強い力を持つのは皆さん自身の心に基づいた力です。それを忘れないでください」

魔法：マホウ？って、ファンタジーなんかで良く出てくる何でもありな感じのアレ？

そんなものを大学の講義で真面目に語るって…

俺が受講してたのってオカルトの歴史とか文化人類学を辿る講義だったっけ？

出席してもこうしてほとんど寝てたし、レポートも親切な友人任せだったから講義の内容なんて頭に入ってたがしかし…

「以上で“魔法使い初心者の心得”授業を終わります…最初の授業で少し緊張したかもしれないですが皆良く頑張りました。解散」

女教師の号令で、俺の周りの少年少女達は次々に席を立ち、わいわい話しながら教室から出ていく。

…少年少女？

ちゃんと自分の大学キャンパスまで辿りついてから寝た自信が無くなってくる。

「ユメルさん、良く眠れましたか？」

未だ強大な睡魔に夢心地な頭をどうにか回転させようと俺は頑張

って余計にぼくっとなっていたら、さっきまで教壇にいた女教師が目の前に居た。

剣呑な顔つきだ。頬をぴくぴくひきつらせている。

俺の顔に机とよだれの跡がついてたらそりゃ怒られるかと覚悟していたら、

「ユメルさん、お昼休みに職員室へ…」

…俺ってそんな外国の女につけられるようなあだ名で呼ばれてたっけ？しかも教員に

「ユメルさんって俺？えっと…ん？」

寝起きで声が裏返ってるのか、なんだか異様に…しかも俺の口から自然に出た言葉は日本語じゃない？

先生も新たに何か気付いたようで、

「…いや、これはもしかや貴方…まあ様子を見ましょう。放課後に校長室まで来なさい」

カッカツとヒール音を立てながら去っていく女教師。

教室にポツンと一人残され座っている俺。

今のやりとりでようやく目が覚めてきた気がする。

椅子から立ち上がって、頭の上で手を組んで思いつきり背伸びした。

「ん〜〜っつっ、んんん〜！?…て声がなんか…高くない？」

10分くらい経っただろうか。

子供たちも、俺に注意したあの女教師も戻ってくる気配は無い。俺が夢から覚める気配もない。

恐らく夢じゃないことは睡魔を払った時点で理解していた…認めたくはないけれど。

暇を持て余して周りを観察してみる。

四角い部屋

綺麗に並んだ椅子と机

どこか哀愁漂う黒板と教卓

デザインはあまり日本っぽくないが、どこかの学校であろうことは想像出来る。

どうやら講義の合間に休み時間が30分もあるらしい。しかも次の講義は別教室のようだ。

「日本語じゃない…けど、読める」

黒板の脇に張ってある時間割にそう書いてあった。

だんだんと頭が冴えてきたようだ。

俺は大学で講義を受けながら居眠りしてたと思ったら、(周囲の生徒の年齢的に)小学校で魔術?の授業を受けながら居眠りしてた。そこまでは大差ないさ…きっと…多分。

いや、俺ならよだれは垂らさないで寝る。

「俺は…私はユメルと呼ばれているらしい」

声に出して言ってみた。
かなり高い。

声変わり前、甲高くも余すことなく可愛らしさを伝えきる純粹なソプラノ。

ふと髪の毛に触れてみると長い、といっても肩に届くかどうかで毛先がまるで揃ってないのが恐ろしいにくらい目立つストレートの銀系…

「銀髪！？すごいさらさらでキラキラでツヤツヤ！」

つい夢中になって髪を何度も手櫛で通す。

クセ毛が嫌で常に黒髪短髪だったはずの俺とは大違いだ。

服は髪に似合わず地味な茶色で昔の貴族が着てたようなぴったりとした、でも現代っ子の俺から見てもカッコ悪くは無いデザイン。上着としてあの女教師が纏ってたのと同じような黒っぽいローブを覆っている。

自分の身長は150センチくらいだろうか。視線が大分下がったけどなんだか新鮮だ。

顔は後でトイレに行った時にじっくり観察してみたいな…ってトイレ？

「女子トイレ、使った方がいいんだよね？」

今置かれている夢みたいないな状況からすればどこか場違いな思考だが、しかし俺には確かめておくべき問題だ。

「胸は…ぺたんこ」

確信を求めるべく穿いていたハーフパンツ越しにそこに触れてみると

「やっぱり…ない!？」

…体のことは気になるが、取り敢えずは後回しだ。
このまま待つても何も進展しそうにない。

なんだか大学の講義を受けるよりちょっとだけわくわくしている
自分がいる。

まずは現状把握から始めようと俺は好奇心を奮い立たせた。

2 必然の出会い

とりあえず次の授業教室に向かってみることにした。

まずは今の俺と同じくらいの年の同級生達から話を訊こう。

小学生くらいの子供達じゃ大した情報は引き出せないかもしれないけれど、そのぶん警戒もされないはず。

あの女教師を追いかけってみることも考えたが、放課後に校長室まで来いと言っていたのだから多分何か意味があつて俺を放置したんだろう。

それにもう結構時間が経ってる。今から追いかけても迷子になるのが目に見えてるし、

「でも、次の教室に行こうとしても迷子になりそうだ」

…しばらく独り言が増えそうだな。この声に違和感無くなるくらい…

14

時間割に書いてあつた次の教室名は“大地地下室”

第一地下室…とかの間違いじゃないよね？

自分の持ち物は何か無いかなと思ひ…実は魔法の杖とか持ってるのかもと期待して探してみたけど俺が座っていた机には何もなかった。

一応他の生徒が座っていた机とか教卓も漁ってみた（空き巣よりは他人の家で平然と物漁りするゲームの勇者を思い出した）けれど収獲無し。

…この授業は教科書やノートいらんのだろうか？

教室の出入り口にしては頑丈そうな扉を開いて廊下に出る。

俺の革靴が踏みしめているのは綺麗に舗装された石畳。

俺はコツ、コツと自分の足音だけを聴きながら、アーケード通りみたいな不思議な感覚の廊下を歩き始めた。

静寂に包まれた広い廊下。

普通の教室にしてはかなり距離を稼いで時々見られる1枚扉。

あの扉一つ一つの向こう側で変わった授業が行われているかと思うと少しわくわくするようなどうでもいいような。

でももし魔法が俺の思ってるような安易な超能力みたいな力ではなかったら…

今は何を考えても推測にしかないけれど…

今更“いつそ夢オチなら…”と自分で自分の頬をつねってみた。

「いひゃいつ」

眠りからは完全に覚めていた。

この体の感覚を確かめようと思いつりやりすぎて泣きそうになった。

最近の夢は痛覚も実装してる可能性を考慮しよう…なんて負け惜しみする俺は馬鹿丸出した。

誰も見てないのが余計虚しかった

「自分の言動すら訳がわからなくなってきた…」

例えばまともな可能性として考察すると、どこか別の世界の別の

誰かの体に入ってしまった可能性は？

幽体離脱でもなんでもどうにかして“魔法が普通に存在する世界”の“どこか”の“誰か”と“入れ替わり”？

しかもなんの取り柄も無いままそろそろ大人の階段登ろうかという日本男児の俺が、わざわざ女の子の体に、年端もいかない少女の体に…

「バカバカしい」

本物の魔法でも見せつけられれば、少しはこの現状を受け入れられるんだろっな。

「とりあえず地下室を探そう。あれ第一地下室だっけ？地下室っていうんだから、まずは地下への階段を見つければいいんだよな」

- - - - -

…20分くらいは歩いただろうか。

道は途中で二手、三手に分かれたりしたが道程を忘れるほどじゃない。だけど…

「廊下が長すぎるー！」

声が僅かに木霊するが、もちろんどこからも反応は帰ってこない。授業の合間が30分あるのも納得出来る。

「これがゲームなら、とっくに積んでるのにな…はあ」

現実ならリセットボタンは存在しない。
電源オフ…自殺など考えるにも値しない。

暇つぶしに静寂の廊下からガラスの窓越しに見る景色は、自然たつぷりというより“森”の一言で表現できてしまう程の深緑一色。
恐らくまだ昼前なんだろうが薄暗くて季節感も薄い。
雪が積もって無いから冬ではないのだろうけど

「雪の無い冬なんて俺しょっちゅう経験してるじゃん…こっちじゃどうなんだろう？」

そもそも四季という概念があるのかどうか。
そんな細かいこと考え出すとキリがない。

「なんだか静か過ぎるし誰とも会わないし、独り言も恥ずかしさを乗り越えて虚しい…けどあんまり静かだとやっぱり落ち着かないなあ」

本当に異様な静けさだ。
他に人はいないんだろうか？
どうにも気になって近くの教室の窓を覗いてみたけれど

「マジックミラー？…それにしても全く中が見えないし…防音も完璧だわこれ」

コンコンと窓を叩いてみる…何の反応もない。
流石にあの扉を開けて教室の中まで踏み込む勇氣はなかったのだから廊下で誰かと会えないかと思いつながら諦めず地下への階段を探すことにする。

「心なし疲れたようなお腹が減ってきたようなまだ寝足りないような」

もう既に次の授業は始まっているだろう。

だが俺に出来るのは歩くことだけ…

魔法で空飛んだり瞬間移動って出来ないかな？

「もう疲れたためんどくさい誰か助けて…なんて、誰もいるわけないのにも」

刹那の間があつたかどうか…

「お嬢ちゃん呼んだ？迷子かい？良かったら送ってあげるけど」

「えっ？」

瞬間…移動？

さっきまで誰の気配もなかったはずなのに、今俺の正面には堂々と人が立っていた。

見た目は生徒でも先生でもなく警備員みたいな服と変わったツバ付き帽を装備した、得体の知れない大柄の人。

声と体格から恐らく男だろうが、帽子のツバと影で顔が半分以上隠れている。

「…おじさん、誰？」

今の俺じゃ簡単に組伏せられちゃうなあ、

少女趣味のアブナイ人だったら最悪な状況かもしれない…
なんて他人事に思いながらも警戒しつつ尋ねてみる。

「ぬっ、おじさんとは辛らつな。だがまあ私のことを知らないとはお嬢ちゃん、新入生だね？よかろうよかろうまずは自己紹介からだ。」

私の名はライトロード・グレンフォード。ライトさんと気軽に呼んでくれたまえ」

喋り方も帽子をくいっと上げる仕草もなんだかタラシっぽい。

顔が少し見え、そこから覗いた皺から俺の父親くらいの歳だと判断する。

「ライトおじさんですか。俺…いや私は（多分）ユメルといいます。それで、おじさんは何をしてるんですか？」

「だからおじさんは余計だつて…ユメルちゃん？…ユメル…ああ！校長のところの。ついに入學したのか。これは楽しみだ」

そう言いながらも俺を見つめるライトさんの顔は中々険しい。

俺のこと…恐らくこの体の本当の持ち主（この学校の校長の関係者？）がちゃんとして、その人のことを何か知ってるんだろう。でもライトさんの険しそうな顔を見た感じだとまだ下手なことを言わない方がいいかもしれない。

「校長から君の噂は色々聞いてるよ。でも話に聞くほどお転婆ではなさそうだね…っとこれは失礼。初対面のレディに悪口はいけないよな」

ライトさんは帽子をとって軽く会釈してくれた。

短めに整えた綺麗な茶髪にうつすら白いモノが混じっている。顔の皺もくつきりはつきりしていて外人の映画俳優さんみたいに渋くてカッコイイけれど…やっぱりおじさんじゃないか。

「私はこの学校の警備員…なんだけど、実際は道案内と渉外と風紀委員といったところかな。」

それで、ユメルちゃんはこんなところで何をしてるのかな？」

ライトさんどうやらそんなに悪い人ではないらしい（少なくとも肩書は）。

自分が今どういう存在なのかもわかっていない俺がこれ以上ライトさんを疑っても仕方ない。

「えと、実は迷ってしまつて…：地下室？に行きたいんですけど」

本当はもっと色々訊きたいところだけどなんとなくこの人にボロは出したくない。

そうなんとなくだ、男のプライドがそうさせる…：ああ俺今は女じゃない。

別に相手がイケメンだから拗ねてるわけじゃない。

「ああ、“大地”地下室か…：あの教室はついこの前出来たばかりだね。名前も場所も紛らわしくて最近によく案内させられるよ」

そう言つてライトさんは右手を差し出してくる。

手を繋ごうつてことなのかな？小さなお子様扱いしてるのか？

仕草が本物の執事みたいに決まつてるのが少し癪に障る。

断るのも悪いかなと仕方なくちよつと緊張しながら自分の右手を持ち上げると、予想外の力で掴まれ顔と顔が急激に近づく。

「えっ？」

ライトさんの顔が近い。

俺は自分の顔が赤くなってるのか青くなってるのかわからない。
多分紫色だ。

俺の中で完全に時が止まっていた。いや魔法ではなく比喩的な意味で

ライトさんが声色を一段下げて耳元で囁く。

「ここでは“一応は”犯罪と認定されるような事件は起きたことないけれど、気をつけた方がいい。君みたいな子は特に、才能に飢えた上級生達から狙われるだろうから」

……俺はあなたに誘拐されるか、そうでなければ口説き文句にブラスしてキスでもされるかと、本気で焦りましたよ。

そんなこと恥ずかしくてとても口には出せず、引き攣った笑みで俺は応えた。

.....

「そいじゃ行きますか、大地地下室だったね」

ライトさんは数瞬前のキザな調子に戻って俺に近付けていた顔を上げて、

パチンッ

「…嘘!？」

指パチンしたなと思ったら、周りの景色が一変していた。

目の前に“大地地下室”と書かれた大きな扉
なんだか土臭い香りがさっきまでいた所とは全く別の場所である
ことを強く意識させる。

「凄い！これが…」

初めて体験した魔法

あまりに一瞬で瞬きの間もなく正直よくわからなかった。

けれど、俺の心に…体にウチ震えるモノがあった。

未知なるものへの単純で複雑な驚き、不安と希望…無限の可能性

“自分のいた世界”と違う法則に触れた瞬間

ソレに重なった瞬間を確かにこの身で感じた…しかし何故か懐かしさ漂うスパイスも薫る。

魔法ってファンタジーとかではポンポン安易に出てくるけど…こうして体感すると語れないもんだなあ

俺が感動に悶えていると、

「おや？“転移を初めて体験しました”って顔してるね。校長の話

ではユメルちゃんは自前の転移魔法も朝飯前だった」

えー!?俺もう既に魔法使いちゃうの？

まてまてそうではなくてつまりこの体の持ち主は既に魔法使いということで…ならやっぱ俺も？

どちらにしろここは誤魔化しておいた方が無難だろう。

「そそそそうですよ、ててて転移の魔法なんて私にとって朝飯前どころか今は昼御飯前ですけど何か？」

「…まあいいや。時間のある時に校長も呼んで一緒にお茶でもしよう。また道に迷ってくれれば、校内だったら呼んでくれれば駆けつけるぜ」

帽子をきつちりかつちり被り直すライトさん。

やっぱりキザっぱいけど素直に嬉しいと思っておこう。決して胸キュンみたいなことにはならないけれど…絶対にならないけど。

今後校内で迷う心配（正確には迷っても心配）しなくていいし文字通りに右も左もわからないところだから、知り合いは一人でも多く（実質一人目だけ）いた方がありがたい。

こうして思うと改めて自分の現状を、孤独を認識したかもしれない。少し涙腺ゆるんだのを俺は必死で隠した。

「ライトさんちょっとワザとらしくカッコつけてるみたいだけど実際もまあそこそこ渋くてカッコよくて優しいそうな人だから問題ないです。ありがとございました。今後も困ったら頼りにします」

あと出来ればまた今度魔法を見せて下さい教えて下さい…いやや

っぱり遠慮しておきます（ちょっとだけ男のプライドにかけて）
これから授業で習う…かもしれないので。

「あいよ。“願わくば貴方の神がその手を離しませんように”」

「…それ、おまじないか何かですか？」

大地地下室と彫つてある大きな扉を前にして、ライトさんはキザ
つたらしくも意味深な笑み、それと指パツチンの音を残して消えて
しまった。

3 初めての情報源…じゃなくてお友達

俺は大きくて頑丈そうな“大地地下室”（日本語じゃないけど何故か読めたり喋ったり出来るのはもう気にしないことにした）の文字が刻まれた扉を開けて叫んだ。

「遅れてすみません！」

先手必勝、まずは声高らかに自身を持って。

明らかかな遅刻宣言を堂々とした態度で、さも「自分は遅刻なんかしてませんよ」といった雰囲気纏いずしずし歩みを進める。

小さな教室の講義だったり気の小さな教授相手にはこれで出欠確認を乗り切ってきた。

だが、大地地下室はデカかった。

体育館3つは入るだろうか。入ってすぐのところは野外教室みたいに椅子と黒板があつて、その奥は菜園、というか小さな森が教室狭しとひしめいていた。

上を見上げると天井はガラス張りで、光が調整されて入ってくるようだ。そのせいで気がつかなかったが俺たちの周りは土の壁。

この教室は、大地を掘って作られた地下室だった。

そして先生もデカかった。

外人だとかそんなレベルじゃない。縦横共に大人2人分はある。これで教えてる授業が魔法生物学だったりしたら…とある魔法使いのベストセラー小説を彷彿させる。

そんなわけで俺の声は高らかに、されど威圧感ゼロで教室に響きわたった。

先生の太くゆったりした声が響く。

「ユメル・バーティシアさんですね、メリー先生と校長、それに警備のライトさんからも話は伺っています。入学早々3人もの先生に目をつけられるとは中々見所がある。席につきいなさい。授業を続けますよ」

巨人おじさん先生の野太い声に圧倒的敗北感を味わいながらも、まあ予想外に予想通りというか減点も罰則も無く（そもそも魔法学校ってどんな校則があるんだ？）あっさり授業への参加は許可されたので、俺は適当な空席を見つけて腰を下ろした。

「はあ…なんだかどっと疲れたよう」

溜め息とともに疲労感がどっと押し寄せてくる。

こんな世界でも雰囲気は変わらずな教室と教師の声、それに机と椅子のセットは俺の眠気を誘う。

お腹も空いているが今はどうしようもない。

段々と自分の置かれているおかしな状況なんてどうでもよくなってきた。

とりあえずお腹いっぱい食べて寝たいです。

.....

先ほどまでの孤独と緊張の反動からか、うとうとしながら巨体先

生の話を流し聴きしていると、いつからか俺に興味を持っていたのである。右隣の生徒がわずかに緊張を隠しながらも威勢よく話しかけてきた。

「あんたユメルっていうんだ？最初の授業が始まる前からずっと寝てて誰とも話そうとしないし、でも先生は知らんぷりだし…何かの特待生？」

最初の授業中とか俺先生にずっと無視されてたんだ…大学の講義なんか大抵視界にも入らない事が多いから、意識的に無視される分少しはマシなのかも。

「ごめんね、でも寝る子は育つって言うし。ちなみに君は少し睡眠が足りてないかもしれない」

俺に話しかけてきた女の子は、今の俺より頭半分くらい座高が小さい…胸は言わずもがな。

「身長なんてこれからいくらでも伸ばすんだから大きなお世話よ。それよりこんなにくわくすることないでしょ。魔法よ魔法、魔法の授業！世界の心理をこの手で体現するまでの極めて重要な過程よ！あとアタシの名前はフラメージュ・インディソフィア。フラメって呼んでくれていいわ。よろしくしてあげないこともないから」

見た目の割に小難しいことを勝手に語りそうな子だ。

「お…私はさつき先生に呼ばれたばかりだけどユメルって言うんだ、よろしく。」

えっとフラメちゃん？君って歳いくつ？」

「11歳よ。アンタも似たようなもんじゃないの？でもそんだけよく眠るんだから、まだまだお子様なのかもね」

小馬鹿にしたような笑みで俺を睨みつけるフラメ。

やや色素の薄い金髪がさらりと揺れる。

日本人を思い出させる茶色がかったキツめの瞳

健康を体現したような、まだまだ十分に好ましいと思える程度に肉付きのいい顔と体軀をしている。

彼女や周りの生徒が俺と似たような格好をしていることから、これがきつと制服なんだろうと推測させる。

フラメの言動は、いじわるっ子が仲良くなりたと思った相手に素直になれず、照れ隠しにちよっかい出すあの感じ。

うっん微笑ましくて顔がにやけてくる。

「そうかもしれない…私は一体何歳なんだろうね？というか何者なんだろう？」

「なによそれ？自分のことでしょうか」

「寝過ぎてちよっとした記憶喪失になってるのかもしれない。まるで今も夢をみてるような」

本当にそうだったらよかつたんだけど…

「わけわかんない。アタシをからかっている？でもまあいいわ。びっくりするくらい整った顔だし、心の奥まで見透かされそうな真っ青な眼とかちよつと怖いくらいだったけど、声かけて正解だったみたい。思ったよりずっと人間臭くて…よだれの跡が目立ち過ぎるわその顔」

「嘘！？まだ残ってた？」

フラメちゃんは声を殺して笑った。

「その二人、私のお話ちゃんと聴いてますか？」

「すみません」

巨人先生の大きくも威圧感を感じさせない注意に声を重ねて謝罪をする。

俺もフラメにつられて軽く笑いながら、この授業終わったら絶対顔を洗おうと思った。

巨人（フラメに訊いたところガブローという名前らしい）先生の話は要約すると

“命を大切にね！”

って感じた…電気じゃないけど似たようなもんか。

付け加えるなら自分や身近で大切な人の命を、他人の命と分けて考えるのは間違ってるって、巨人先生はひたすら説いてた。

…それには同意しかねる。

先生の話に飽きてきたので、俺はフラメに色々と訊いてみることに

にした。

多分彼女の性格なら、俺のおかしな質問にも呆れながら答えてくれるだろうと読んで。

「ところでさフラメちゃん、魔法ってどうやって使うの？」

「はあ？初歩的過ぎてバカバカしい問いただけど…答え辛いわね。ア
ンタ“通神の儀”は済ませたんでしょ？でなきゃここにいられるは
ずないもんね」

“ツウシンノギ”？

「アンタが儀式で何の媒体を魔道具にしたか訊かないけど、“ソレ”
に訊けばいいじゃない」

魔道具？やつぱり杖とか振って使うもんなのか、魔法って
でもライトさんは指パッチンしかしてなかったはず。

「ちなみにアタシの魔道具はこのルビーの指輪。指輪は割とメジャ
ーな選択だけど、決闘の時でも小さくて狙われにくいし、肌身離さ
ず付けていられるから取られる心配もないし、カモフラージュする
必要もなく堂々と魅せつけられる」

フラメの右手中指には小さな赤い宝石が1つ埋め込まれた金色の
リング

彼女が宝石を撫でるように触れると、怪しく発光した。

「その指輪が無くなるとフラメは困るの？」

「困るなんてレベルじゃないわ。これが無いとアタシは“アタシの

魔法”が使えなくなる。だから大抵の魔法使いは魔道具を常に身に
着けていて、あと直接持たなくても発動できる魔道具なんかは絶対
に見つからない場所に隠したり…アタシだってやるうと思えば指輪
をたくさん嵌めて、どれが本命かわからなくすることが出来るでし
よ？」

指輪をちらつかせながら怪しく言い放つフラメは魔性の女…には
年齢も外見も程遠いけど愛らしい。

ん〜

今の俺は制服とローブ以外目立つ物は身につけていない。
服の下とか…自身の身体検査とか今の俺にはレベルが高すぎる！
アクセサリーとか何かをつけてる違和感も無いからきつと違う！

だったら、

この体の持ち主の魔道具は身につけてなくてもいいものが、今は
魔道具を手放して置いて魔法を使えない状態か…そんな廻りくどいこ
とをするか？…俺が“入っている”から？

少しでも情報を得るために話を進めよう。

「…で、その魔道具に訊けば魔法の使い方がわかると」

「正確には発動キー、きつかけだけど。

“通神の儀”で媒体にしたモノには命が宿ると言われているわ。確
かなのは意思を持って術者を導いてくれるってこと。どんな魔法を
使うかは自分で学んでいかなきゃいけないけど…それにしてもアン
タ自分以外のことも全然知らないのね」

「フラメちゃんは何んでも知ってるんだね。こんなにちっちゃいの

に偉いや」

「ちっちゃいは余計よ！直ぐにおっきくなってユメルなんか踏みつぶしてやるんだから」

「それは大きくなりすぎじゃない？でも期待して待ってるよ」

小さな胸を張り腕を組みながら、フラメは偉そうに勝ち誇っている。

性格はガキ大将な優等生っぽいけど、純粋な子ども心…いいなあ

発動キー…これもまるで見当がつかない

こりや放課後、俺のことを知ってるらしい校長先生に会うまで魔法はお預けか。

「…あー、こうして話しているだけというのもつまらんでしょう。私にとっても貴方がたにとっても初めての、本格的な魔法授業なのだから楽しく学んでいただきたいしね。そろそろ生命を操る魔法の実践といきましょうか。付いてきなさい。大丈夫。この森に危険な生物はいません…今のところは」

おしゃべりを続ける俺とフラメのことを気していたのか、話を打ち切ったガブロー先生が教室の奥の森に俺たちを先導してくれた。

4 授業そっちのけm y授業(前書き)

ちよつとだけ痛い表現が出てくるかもしれないです。

4 授業そっちのけmy授業

「皆さんは魔道に目覚めてまだ日が浅いでしょうから過度の魔力放出は控えるように何故なら云々…」

大地地下教室

その森の奥地へとゆったり歩を進めながら、ガブロー巨人先生の（段々説教臭くなってきた）講義は続く。

魔法を使える機会は当分もしくは永遠に来ないだろうから、今の俺にとって先生の講釈など単位稼ぎのらくちん講義と同義だ。のったりと耳によく残る声ではあるが、その内容は新幹線からぼんやり眺める風景と同じように俺の耳と脳をすっ飛んでいく。

後で「ちゃんと聴いておけばよかった」と後悔する羽目になるよ
うな気がしなくもない…

代わりにフラメとの会話、世間話と言う名の情報収集は続いた。

「フラメちゃんはどこの出身なの？」

「生まれはヴェニスって田舎町。だけど…」

“水の都”…ではないんだろうな。

「だけど？」

「アタシに強い魔法の素養があるってわかった途端、英才教育の為に王都まで引つ張られてきちゃった。両親も一緒に引つ越しさせてもらえたから、そんなに不満はなかったけどね」

そういうフレームの横顔は少し不満そうに見えなくもない。

「へえ…じゃあ王都からこんなところまでわざわざ通ってるんだ？」

そんなに間違ったことは言っていないだろう。

俺が廊下を延々歩いた時に窓から眺めた深い緑の風景

明らかにこの学校は“王都”などと呼ばれるような都会からは隔絶された地域にあるはず。

「ユメル何言ってるの？王立魔道研究所から“ドリームゲート”を使ったでしょ」

…夢の“ゲート”？また新しい魔法用語か？

親切にも俺が想像しやすいRPGゲームみたいな語彙ばかり出てくる。

「とか言っちゃって、アタシも“ドリームゲート”なんて便利な移動手段があるのは王都に来てから知ったのよね。

少々の魔力さえあれば誰でも何度でも安定して使える、正に移動魔法の極致！

その分作るの大変らしいし場所も選ぶみただけど、どこにでもゲートが設置されちゃったらそれはそれで便利過ぎて色々不便というか、手紙とか地域名物のありがたみが無くなっちゃうから」

思考が随分と成熟しちゃって…フレームって本当に11歳？

俺だったら喜んでゲート使っちゃうけど。

通学時に味わうことのできる圧殺されそうな満員電車、人間の様々な悪意悪臭が絶妙にミックスされた異次元空間をフレームは知らないんだろうな。

「…そういえば、じゃあこの学校はどこにあるか」

「アタシはよく知らない。地図上で正確に示せる人は校長含めて五指も無い…とか噂されてるわ」

「フラメちゃんでも知らないことあるんだね」

「ふん！この学校卒業したら世界を隅から隅まで旅して魔法学校の10や20見つけてみせるわよ！」

その時は山手線周回ツアー（通勤ラッシュユフルコース）も忘れずにね。

「ドリームゲート」だって、いつか“夢”が無くなるくらいアタシが量産してやるんだから」

あはは、なんていうか…

「魔法学校ってそんなにあるのかな…？というかゲートたくさん作っちゃったらフラメちゃんがさっき言ってたありがたみも無くなっちゃうよ」

「その頃にはアタシが別の“ありがたみ”とやらを生み出してあげるから安心なさい」

物理的にも社会貢献度的にも、無い胸を勇ましく張る彼女は見ていて眩しいくらい。

…やっぱりフラメは子供だと思う。

将来の夢は“勇者”だとか“宇宙ヒーロー”なんて言ってる、羨

ましいくらい傲慢な子ども達とそう変わらない。

でもまあ、楽しいかな。

魔法への興味も一塩だけど、こんなところで初めて出来た（肉体的に）同年代の友達と会話するっていうのは、目的なんて関係無しに…二十歳過ぎた大人モドキの俺にとって新鮮な気分だ。

.....

突然の異変は、当り前のように唐突に…

「ユメル、アンタはどっから来たの？ 一体どんな人種から生まれたらそんな透き通った髪と目になるのよ？」

「…ああ、うん、そうだね…外見はわからないけど、中身はきつと遠い遠い空の彼方から来たんじゃないかな」

「よくわからないけど言いたくないことなの？ 無理して話せなんて言わないわよ」

「いや、そついうことじゃないんだ。話しても信じてもらえるかどうか…」

「さて皆さん、いよいよ生命の魔法の実践に入るんだが…何だ貴様

!？」

まだ話し足りない様子のガブロー先生が驚いて立ち止まった先には、先生が育てたのであろう鉢植えに変わった植物、人の子の形をしている木が植わっていた。

ファンタジー小説等でたまに登場するマンドラゴラとかいうやつだろうか？

植物の子どもは苦痛に悲鳴を上げながら泣いていた。

悲鳴の原因は植物の上部、人間の子どもで言えば頭部の辺りに食らいつき樹液を貪っている。

黒い妖精とでも表現すれば綺麗な感じだろうか…

全身黒づくめのヒヨロヒヨロした小人

耳は動物のそれというには鋭角に尖り過ぎた角のようで

コウモリの羽をそのまま大きくしたような美しくも禍々しいデザインの翼

うねうね動いている尻尾の先端は矢尻のように尖っている

こちらを振り返った顔は人間のそれだが、大きく発達した犬歯と滴り落ちる樹液がより一層醜悪な顔つきを脳裏に焼き付ける。

…要するにベタな感じの小悪魔だ。

「あんまり遅えからついつまみ食いしちゃったじゃねえか。え？」

小悪魔が喋った。

その外見に変わらず聴くに堪えないだみ声だったが、確かに喋った。

初めて出会う“異世界”を確信させる生き物の登場（しかも気持ち悪い2トップ）に、俺は吐き気と感動が半々の奇妙な気分になっていると

「ガーゴイル亜種か！より人間に近い外見と相応の思考能力が付与されているようだ、しかし何故こんなところに…？」

ガブロー先生は警戒心を抱きながらも学者としての興味を幾分刺激された様子だ。

先生の手ぶらの両手が白衣？のポケットに突っこまれている。

「なんなのあの生き物？あっちの黒いのは先生が用意したんじゃないのよね…今すぐ灰にしてやるうかしら。見るに堪えない醜悪さね」

右手の指輪に左手の人差し指をかざして俄然やる気のフラメ。

彼女にとつても、あと周りで怯えたり慌てている他の生徒にも見覚えの無い存在のようだ。

「おっと、ここで何かやらかす気はねえぜ」

いやお前マンドラゴラ食ってんじゃん。

小悪魔は先生とフラメの殺気や魔力の流れを感じ取ったのか、獲物の頭を掴んでいた両手を上げ降参の姿勢を示した。

「お前ら如きにこのギエス様をどうこう出来る訳無えが…まあそう睨むなつて。実験動物扱いされんのもこりこりだ」

一呼吸置いて戦意の喪失を示した小悪魔は、万歳した手の片方を下ろしながら、尖り曲がった爪を持つ細長い4本指の内3指を握つて…

迷うことなく俺を指名した。

なんだかわからないが俺をこんな状態にした張本人らしい。
…入れ替わりたてはやほやで録音した音声？

『どうしてこうなった！？私と波長の合う存在が何故異性なのだそもそも何歳だよお前男ならもつと筋肉付けとけひよるもやし小僧がぎゃーぎゃー猫を飼うな猫をこの毛玉お化けがその忌まわしい毛を全部毛ってくれるわ』

ドタンバタンと暴れる音がする。

…ウチの猫大丈夫かな

『はあ、はあ…ま、まあいいわ…オホン。まあいいだろう、私としても多少のリスクは承知していた。…うん、そこまで歳でもないみたいだし、あんまムキムキしてない方が中性的な感じで違和感も少ないか。顔も…許容範囲だ』

なんの許容範囲だよ？

自分のこと言われてるんだと思うと恥ずかしくなる。

『うむ、残り時間も少ないから手短に言う。私は世界征服…もとい好学的ために遠く離れた世界…といってもあくまで今お前がいる世界の住人達とだが…心を入れ替えては様々な事柄を学ばせてもらってきた。』

しかしまさか異次元の境界をも飛び越えてしまつとは…我ながら恐ろしい才能だ』

一人で勝手にうんうん自分を褒め称えていやがる。

頼むから人前ではやめて下さい。俺そんなにナルシストじゃないから

『おつと失礼。そんなわけではらくお前の世界を堪能させてもらう。お前…ユメル君もそのつもりでそっちの魔法使いライフをエンジョイしてくれ。異性なのに波長が合うってことは魔道相性も相当良いはずだ。もちろん拒否権は無い』

…ああそんなことだろうと思つたよ。

色んな疑問が一気に解けた。

こんな世界が存在することさえ謎だが、認めてしまえばあとは楽しむだけ…本物のユメルさんの言うとおりだ。

『私だつて元に戻る術が見つからないんだから仕方ない。この際覚悟はしてるし私も弁えてるつもりだが…オイタは程々にしておいてくれよ（笑）』

…何!?

それは困る。大いに困る。

俺も嫌だがあんだだつて男の俺に自分の体を好き勝手されたくはないだろうが！

『これから帰る方法も含めて色々模索してみるが…なにしろこっちは魔力の通りが悪す…ゲートみた…に魔力の…ライン…でも…ってみ…』

おい待ってくれ、俺はこれから一体どうしたら

『ああ最後…、校長とその側…とはあまり信用し…い方がいい…ワタ…里親みた…だが同時に…』

それ…タシの魔…具…く…自分の身…自…で守…』

ノイズがいつそう濃くなった録音がプツンと、完全に途切れた。

- - - - -

「ねえ、ユメル！ユメル大丈夫？なんか耳がキーンとするんだけど」

俺は倒れかけていたらしい。

ガブロー先生に後ろから支えられ、フレームが真正面から俺の顔を覗きこんでいる。

「ユメルさん…もう大丈夫だ。ガーゴイルの超音波に少し強くあてられたんだろう。ヤツは天井を破って逃げおった」

「ユメル、何かあったの？黒いあいつが変な音出すから耳が痛いし、アンタは急に青い顔して倒れそうになるし」

心配そうに俺を見つめるフレームの顔を見て、なんだか少し安心した。

「ごめ…ちょっと休ませ…頭の整理…が」

俺の意識は、今度は俺の意思で完全に途切れた。

5 お昼休みの憂うつに沁みる優しさ

「目は覚めたかしら？」

気がつくくと、俺はベッドに寝かされていた。

清潔そうな真っ白いカーテンが微かに揺れる。

恐らく保健室のような場所であろう、独特の匂いが覚醒を早める。

「だから学校に行かせるのは反対したのに」

「そうは言っても本人の希望だ。しかしあの子の考えていることは全くわからん。もう5年も一緒にいるのに…」

今度は突然『学校へ行きたい』などと言いだしておいてこの始末か」

俺は自分の名前を思い出そうとする。

『ユメル・バーティシア』

…それはこの体の名前だ。

俺の名前…

「…だめだ。思い出せない」

そもそも自分の名前を思い出そうとすることさえ忘れてしまっていたことに、今更気付いて恐怖する。

「俺は…私は…誰なの？」

「無理に頭を働かせてはいかんぞ」

優しく力強い声とともに、変な香りのする液体が入ったカップを差し出してくれたのは、初老のおじさん。ライトさんが“おじさん”ならこの人は“おじいさん”と呼んでも問題ないかもしれぬ。しかしそのオーラというか存在感は年老いたら益々強くなってゆくのではないかと思わせるほど力に溢れている。

「…あなたが校長先生ですか？」

起きあがってカップを受け取り、少し飲んでみる。

渋めのホットレモンティーといった感じで気付けにはよさそうだ

「いかにも…私がこの魔法学校の学長を務めておるガイン・バーテ
イシアだ。」

…ああ、養子とはいえ娘に初対面の反応をされるのもこれが3度
目…ワシ心折れそう」

「あなた…気を確かに。」

でも、ユメルさんのことはもう諦めましょう。1人立ちした娘、
いや孫とも思っただけからそつと見守ってあげましょうよ」

「メリーよ、お前までユメル“さん”だなんてワシは…」

たとえ子でなく孫だとしても…たとえユメルに“おじいさま”と
呼ばれようと…ワシだけはユメルちゃんの味方じゃ！化けて出ても
ユメルちゃんの傍におるぞ！」

「…」

厳格なオーラがぐにやりと歪んだのを感じた。

校長は親バカ、もしくは孫バカ。どちらにしるユメルには甘いよ
うだ。

校長と夫婦のような会話をしているのは、俺が一番最初に受けた
授業（ずっと寝ていたからロクに受けてないけど）を勤めていた女
教師。メリー先生だっけ？そこかしこで名前を聞いたような。

メリー先生は校長とそういう関係なのか。随分と歳が離れている
ような気がしなくもないけれど、それはおいといて。

「いやあ、すまんのお。ユメルがまさかあんなハタ迷惑な形で自分
の体に接触するなど初めてだったんじゃないか？大丈夫かのお？」

「はい、今はもう平気です」

「あの子から多少の事情は聞いておろう。早速で悪いんじゃないが、お
主はどこ誰さんかの？今後の振る舞いの為にも、ゆっくりでええ
から出来るだけ詳しく教えてほしいんじゃないか」

「あなた、もう少し様子を見ましようよ。まだ記憶が混濁してるよ
うだから」

「そう言っ放課後まで待とうとしたら、ユメル自身の使い魔とは
いえガーゴイルに襲われることになったんじゃないか。最低限身を
守る術を考えなきゃならん！」

「あの、実は俺…」

「…オレ？」

「いや私…」

不味い…メリー先生はともかく、ユメルを溺愛してそんな校長にもし中に入ってるのが男だって知れたら…

「実はユメルさんに記憶を盗られちゃってるみたいで…自分のことあんまり覚えてないんです」

「なんと!」「まあ!」

嘘は言ってない。覚えてないのは自分の本名とか親とか友達のこととで、向こうの世界の一般常識なんかはそこそこ頭の隅にこびりついている。

違う世界の人間と繋がったから記憶を欲したのか、今回は体だけじゃなく記憶も盗む実験を兼ねていたのか…

どちらにしろ、ユメルは盗む記憶を少し間違っただと思う。日常生活でおかしな真似をしてなければいいけど…

「ユメルはそんな細かい記憶操作まで出来るようになっておったんか」

「今までの子らは自分のことをはっきり覚えてたから、その子の両親に話をつけたり、あっちに行ったユメルさんの守護もしやすかったのだけれど…」

困った顔で見合う二人。

俺としてはせっかくだから開き直ってこの世界を、魔法の世界を楽しみたいと思えるようになってきた。

だから、

「あの、自分の身くらい自分で守れます…多分今度は」

ガーゴイルのメッセージが俺に教えてくれたユメルの魔法の使い方
の一端。

言葉は途切れ途切れだったが、イメージとして一度乗れるようになった
自転車のごとく魂と体に焼き付いていることを理解した。

あとは実践あるのみ。

「しかし、この学校内に限っても安全とは言い難いものがある…今
回の件はユメルがこの場所を知っていたからとはいえ、外部からの
侵入者を完全に防げるとはワシは思わん。お主が何者が分からの
では先手も打てんしの」

「なにより今年は最上級生が…ますます増長して手に負えなくなっ
てきています。今はまだ教師陣だけでなんとか収めています。彼
らが卒業するまでにその所業が公に出まわることになるのは時間の
問題です」

渋い顔の夫婦。

それだけ心配してくれるのはありがたいが、俺にとってはマイナ
ス要因にもなりうる。

沈黙を破ったのは俺にとって最初の…

「大丈夫です！ユメルはアタシが守ります！！」

大きな音をたてて保健室の扉を開け放った女の子。

心当たりは一人しかいない。

「フラメ！どうしてここに？」

「友達が倒れたら介抱するのは当り前でしょ！ガブロー先生と二人で（ほとんど付いてきたただけだったけど）アンタをここまで運んだから。さっきまでは校長夫妻に譲ってやってたけど、元気になるならもういいよね？こんな湿った所にいたらキノコが生えてきちゃうわ」

小さな体でこちらへ真っ直ぐのっしのっし行軍する小さな女の子。

「こら、まだ話はおわつとらん」

フラメは校長の声などまるでそよ風のように受け流して俺の手を握る。

ここは、大人の空気に吞まれないフラメの度胸に感謝しよう
俺も強行突破に乗ることにした。

勢いよくベッドを飛び出して靴をはき、

「それじゃお父さんお母さん、また後で！」

俺が茶目つ気たつぷりにウィンクすると、保健室の窓が大きく開き強い風がなだれ込んだ。

カーテンが床と並行にまで持ちあがってバサバサ暴れる。

「！？」

校長夫婦が突風、よりは俺の言葉に驚いて顔を見合わせてる内に、俺たちは風に乗っかる勢いで保健室から廊下へ飛び出した。

言い知れぬ不安と僅かな期待を胸に抱えて、フラメの手をしっかりと握りしめながら。

あれだけ長い授業2つ（1つは寝てたけど…）に長い休み時間

きつと現在は昼休みだろう

元気よく親元？を飛び出してきたはいいけど、

「さて、どうしようか？」

二人並んで石造りの廊下を歩きながら、妙に爽やかな笑顔を振りまきフラメが俺に問う。

「フラメちゃんが連れだしたんだから、フラメちゃんが決めて…」

さっきまでの元気も、しばらく二人きりになって落ち着くと、何度も膨らませて使い込んだ風船のようによれよれと萎んでしまった。

俺には今後の予定が無い。

色んな事がわかったのはいいけど、状況はそれほど変わらない。これからどう行動していくのか、俺がどうしたいかを考えないと

いけない。

しばらくはこのまま状況に流されて学校の授業を受けることになるんだろうか？

「なんだかんだで、こつちに来てまだ数時間しか経ってないんだ…」

「そうよ、入学して2個目の授業から人間ベースの高知能ガーゴイルに会うなんてびっくり。『あんなの研究所でも作ったことない。本当にヒトを素体にしてるなら国家レベルで取り締まるべき問題だ』ってガブロー先生言ってたんだから」

フラメは平気そうに、むしろ楽しそうにおしゃべりをする。
恐いもの知らずで無邪気な子どものように

「…結構危ない状況だったのかもね」

ユメルは…俺が思ってるより危険な存在なのかもしれない。

だったら俺が今この体に入っていてなすべきことは…

いや、まだそんなに暗い考えを持つ段階じゃないというか…

「大丈夫よ！レアモノではあったに違いはないけど、あの程度のヤツ何体襲いかかってきたって、アタシなら一瞬で消し炭に出来るから」

そう言って明るい笑顔をまき散らすフラメ。

それでも…巻き込んで悪いと思った。

同時に、少しだけフラメを怖いと感じている。

せっかく友達が出来たと思ったのに…

ガーゴイルのメッセージは俺にしか聞こえなかったようだけど、さっきの校長の話を聞かれていたのだとしたら…

例え男とバレてなくても、外見と中身が根本的に違う俺のことを、彼女は嫌悪するのもかもしれない。

俺はそのことを…フラメに“嫌われているかもしれないこと”を恐れているんだと自覚する。

「でも、仕方ないよね…フラメちゃん、無理して私についてこなくていいよ」

だから、どうせ嫌われるなら、俺は自分から彼女を拒絶しようとして俺は繋いでいた手を離れた。

「はあ？アンタ何またおかしなこと言ってるの？ついてきてるのはユメルの方でしょうが。それにアタシは自分に無理とか我慢なんて絶対しない性格よ」

「…私が校長先生と話してた内容、聞いてたんでしょ？」

「…」

「私のこと、嫌いにな…」

くきゅー

「…」

きゅーじゅー

「…」

くきゅー

「アハハハッ、アンタやつぱ面白いわ！見た目とのギャップが特に！お昼にしましょう！ユメルは“もちろんお腹が鳴くほど”空いてるわよね！話は食べながらだっついていいでしょ。お腹減ってるというイラするし、いいアイデアも浮かばないものだわ」

腹は口ほどにもの申す…か。

笑いをこらえようともしないフラメに俺は精一杯の笑顔を返す。

これで彼女に醜態を晒すのは2度目だ。

自分が思ってる以上に、俺はフラメに気を許してるのかもしれない。

「そうだね！…でも私お金持って無い」

「アンタまた何言ってるの！…って、これユメル相手の口癖になっちゃいそうだわ。大丈夫よ。このカフェテリアは学校関係者だけが利用することが前提でタダだから。説明会で聞かなかった？…ああユメルは…まあいいわ、お話はカフェで」

再び手を繋ぎ、笑顔と共に歩きだす。

魔法のある世界は、一体どんな料理があるのだろうか？

…ああそうか。

考えていて楽しいこと、どうしようもないこと、絶望することがある。

でもユメルが俺の体で好き勝手やってるんだったら、俺だってこの世界を楽しんでやるうじやないか。

ユメルがそう言っていた。

しかも、今は俺がそのユメル自身なんだから。

あいつみたいに、他人の青春の1ページを自分勝手に盗んでいく

よしなやっ…にはなりたくないけど、

今この時くらい好き勝手させてもらおうじゃないか！

6 ランチタイムでの色々

「食堂まではどうやって行くの？」

二人仲良く散歩するのはいいが、また廊下を延々歩かされるのは勘弁願いたい。

「すっかり忘れてた。“ローカルゲートホルダー”持ってたんだわ」

そう言うとフラメはポケットから一枚のカードを取り出した。

“王立魔法学校”と銘打っており、フラメの名前、顔写真その他本人情報等が記載されているようで、学生カードみたいだ。

「アンタにまた『それなあに？』とか訊かれる前に説明しとくわ。

“ドリームゲート”については話したわよね？」

この学校と研究所を繋いでるワープポイントみたいなものだったっけ？

「それと似たようなものだけど、ローカルゲートホルダーは“本人限定使用”で場所も許可制かつ登録制、使用時間帯なんかも制限されるわ。例えば今アタシが行けるところは保健室、職員室、食堂、それと更衣室…緊急利用トイレなんてのもあるわね。

まあこのバカでかい校内を移動する為の救済措置ってところかしら。

ドリームゲートと同じくココや一部の機関限定で試験運用されてるって話よ」

どつりでいくら廊下を歩いても誰とも遭遇しないわけだ。

便利な世の中になったなあ…いや、俺の世界にもそういうものがあればなあ。

「でもさ、ゲートとかホルダーとか、そんなものがあるってことは…自分のチカラだけで転移するような魔法って難しいものなの？」

「何言ってるん…自分の大事な体に魔法を掛けると思ってる。だから工程が恐ろしく精密で多段階なの。」

まず自分が今いる場所と目的地の相対座標の認識、次に転移するにあたり障害となる存在の判定、最後に転移させる範囲を判断…自分の頭からつま先まで過不足無くでも無駄も無く把握しないと重大な事故が起きちゃうし…その他にも細かく注意しないといけないところがいくつも…

完璧な精神状態で全てを完璧に成功させなきゃいけない…むしろまともな状態なら遠回りでも確実にに行ける方法を選ぶ。

もう、喋ってるだけで嫌になってくるわ」

「…難しいってことは理解したよ」

魔法って結構“科学”に沿ってるのかも知れない。

勉強嫌いな（好きな人なんているのか？）俺に扱いこなせるだろうか？

「そういうプロセスを少しでも効率良く行う為の手段を学ぶのが学校なんだろうが。単に何かしたいと思ったら、そう願いながら魔法を唱えれば…転移魔法と同じよ。その分別の努力をした方がマシと思えるくらい無限の時と膨大な魔力をかけて祈れば大抵の望みは叶う…んじゃないかしら」

やっぱり魔法って物理法則無視してなんでもありなのか。

科学と矛盾してるようだけど、要するに“何でも出来ちゃう限られたエネルギー”をいかにうまく使うかってことなんだろう。“何でも出来る”けど“限られる”というのもおかしいな…

「純粋な力として魔力を使う分には話が変わるわ。例えばただ相手を倒すことを目的にするなら余計な思考をするより周囲を全部破壊するつもりで全力で…いえ…やり方にもよるわね…と、話が半分逸れちゃった。アタシもかなりお腹空いたし、さっさと行くわよ」

「でも、私そのローカルななんとかも持ってない…と思う」

俺はどこまでもすっぴん装備なユメルに呆れていた。

まだ幼いとはいえ、ここまで手ぶらな人間ってそういないだろう。男の俺だって常に財布と携帯は身につけ…でもそんなもんか。携帯はこの世界に無いだろうし。

フラメの言うとおり（誰かと入れ替わるために）手荷物すらも校長に預けた…のだろうか？

「…なんとなく予想はしてたわ。詳しい事情は後でアンタにじっくり聞かせてもらうけど、多分魔道具とか貴重品は全部校長が預かってるんじゃないかしら？」

いや、多分俺の魔道具は…それはとりあえずおいておこう。

「だから、今回はアタシのカードをちょこっといじって…先生には内緒よ？」

フラメが彼女の魔道具である指輪にカードをかざすと、カードが指輪に近い赤色に染まった。

「さ、このまま手を握っててね……コードナンバー03“ロンデリア”へ」

転移はまたも一瞬で、ありがたみ無いなあなんて思う間もなく俺たちは小洒落た看板の前にいた。

- - - - -

カフェ“ロンデリア”

そういえば最近外食してなかったと過去の自分の食生活を振り返りながら、俺から見てもありふれた感がある西洋風の店造りの店を見渡す。

内壁のレンガをツタがびっしり緑で覆っているのが特徴といえは特徴か。蟻や羽付きの虫なんかは全く見当たらないので不潔感はない。

「この学校って…こんなに人いたんだね」

三桁は超えてるかな。

こっちに来てから見た事も無いような数の人でこつた返している。フラメみたく外人っぽい髪の色や顔つきの人が多いけど、控え目に言っても俺の容姿ほど目立つ人もいない。

俺たちくらいの歳が最年少だとして、明らかに服装が違う先生みたいな人達を除けば、本来の俺より年長はいないみたいだ。

「丁度昼時だから…毎回こんなもんよ」

「フラメちゃんは前に来たことあるんだ？でも私たちって新入生…
なんだよね？」

「なんでそこ疑問形なのよ？アタシの場合はお姉ちゃんが研究所に
勤めてて、それで入学前に何回かタダ飯に連れてってもらって…ね」

モーニングとランチはバイキングらしい。

俺たちもちよつとした行列に並び、トレイと小皿をいくつか抱え
好きな食べ物を乗せていく。

魔法世界の料理はどんなものがあるか楽しみだったけど…

穀類を発酵させて焼いたパンのようなもの、というかパン。

茹でたパスタっぽい細麺を、油と塩と胡椒で軽く炒めた簡単パス
タはどんなおかずとも相性良さそうに見える。

あとはサニーレタス、ロメインレタスなんかの葉っぱ類やトマト、
にんじんなど見覚えのある野菜類。

原型がどんな生き物かはわからないがゲテモノには見えない肉料
理。

ドリンクはコーヒーや紅茶の香りが少しきつく感じたので、これ
また何が入ってるかわからない青紫色のジュースを味見してみた…
オレンジジュース？

総じて言えばご飯や魚が無いのが俺にはちよつと寂しいくらいで、
普通のレストランに食べに来た感覚だ。

無事に席を確保した俺たちは周りの忙し気な空気に急かされるか
の如く、いただきますの挨拶もそこにナイフ（かなり鋭くてギ
ザギザ）とフォーク（よくある感じだがこれまた凄く尖った3股）
と素手（俺の手…小さくなったな）を巧みに使い分けながら食べた

した。

「何の違和感も無く美味しいね」

「それどんな褒め言葉よ？」

「…そういえばさ、フラメちゃんはどっかに入信とかしてないの？
食事の時の特別な挨拶とか」

ライトさんの去り際にも聞きなれない別れの言葉を聞いたような
気がする。

「いえ、王立魔法学校は研究者の養成機関を兼ねてる部分もあるか
ら…代表的なので言えばエノシン教…自然崇拜を教義としているよう
な人達はこの学校も研究所と同様に嫌ってるわ。多分、ココにいる
ほとんどの人の本質は無神論でしょうね」

フラメは動かしていた手を止めて、少し考えるように言った。
意外だな。

魔法なんてものがあるから、そこから生まれた神様とか精霊とか
迷信？がたくさんあるかと…単なる“偶像”では済まない根深い信
仰があるものだと思ってた。

やっぱり俺が思ってる魔法とは根幹からして違うものらしい。

「それでさユメル、アンタのことなんだけど。

アタシはアンタの言うとおり校長の話盗み聴いてて…つまりそ
の、魂と体？が別モノ…入れ替わってるってホント？」

世間話をするように軽い言葉で話すフラメだが、俺は少し緊張し
てしまった。

今更『大っ嫌い!!』とか『キモイです』なんて言われはしないだろうけど、ちょっとドキドキする。

「フラメちゃんの言うとおり…だと思う。正確には一部記憶喪失だから曖昧なんだけど」

「凄いいじゃない!完璧な魂の置換、保存に成功した事例なんてこの研究所にも無いわ!勲章にアンタの名前が使われるくらいの成果かも!…なんで校長は黙ってるのかしら?」

俺の両手を勢い良く掴みながらフラメの言葉は続く。

「それにアンタが何を気にしてるのかわかんないけど、アタシは今のユメル好きだよ。可愛いし、アタシと普通に話してくれるし、色んなところ抜けてて面白いし!」

「最後の言葉は余計だけど、そう言ってくれて嬉しいよ…ありがとう」

背は小さいけど、知識の豊富さは俺相手じゃなくても大人顔負けレベルだろう。

そんなフラメの素直で子どもっぽい言葉に、俺の心芯はほんのり温かくなった。

.....

食事を終えて一息つくくと、フラメは少しだけ自分のことを話してくれた。

「アタシさ、お姉ちゃんの推薦でこの学校に入ったんだ。別に仲が悪かったり恨んでるわけじゃないんだけど…」

お姉ちゃんは研究所トップの補佐官、実質ナンバー2で実力も相
当なもんだから、他の子も親から色々聞かされてたんでしようね…
まだまだ子どもだったのに精一杯媚び売る訓練ばかり受けてきたの
か、素でアタシと会話してくれた人は一人もいなかった。アンタを
除いてね」

「なんだ、フラメちゃんもぼっちだったんだ？」

「ぼっち言うな！ヴェニスに帰れば子分がたくさん」

「フラメちゃんガキ大将だったんだ？」

「だって皆弱いんだもん！アタシが導いてあげなきゃなんにも出来
ないヘタレばかり…まあ猿山の大将も悪くなかったと言っておく
わ。ウチの近くの森に凶暴な人食い熊が出るって情報が入った時と
かね…」

その後も他愛無いおしゃべりを続けていたのだが、青紫オレンジ
ジューズが効いたのか、純粹に満腹感と安心感のせいかな、俺はトイ
レに行きたくなった。

…トイレ…トイレね。

「フラメちゃん、私ちよっとお手洗いに行ってくる」

「うんわかった。アタシは食後のもう一服を堪能してるわ」

オヤジ臭く椅子に碎けた座り方でカッコつけながら飲み物を口へ

運ぶフレームを背に、俺は異世界の中の異世界へと第一歩を踏み出した。

.....

「トイレはいつから男女別になったんだろう？」

明確な男女のシンボルマークの下、二手に分かれたトイレの入口。俺は険しい顔をしながら益体無い思索で現実から逃げていた。だが差し迫った問題に体は素直だ。いつまでも逃げてはいられない。

「今の私はユメル、可愛い少女…立派なレディ…心を保つんだ。平常心だ」

普通に男として男子トイレを利用する感覚と同じように女子が女子トイレを当り前のように利用する。

それでいいんだ！

…ああでも他の女の子とかいたら緊張しちゃうなあ。女子トイレはみんな個室だろうから籠っちゃえば関係ないか？

ここまでできて我慢の限界で醜悪な姿を晒すよりは…

俺は決心して秘密の花園へと足を踏み入れた。

.....

用を済ませ、無言でトイレから帰還した。

俺には語る言葉が無い。

いや、語る価値を持たない。

皆してることだから。言葉にする必要なんてないし、誰も得しない。

「なんか生々しい…俺ここまで現実女子に免疫なかったっけ？」

女の裸を見るとかそういう次元じゃないんだ。

絶対に自分の体じゃないけど現実問題として自分の体のように動かしてるんだから感じ方も特殊なんだよだから気にするな…

「うん、終わってみればなんてことはない…ってことにしよう」

男として自分の体に劣情を催すとか、最低な感情が湧いてこない分だけマシだろう。

それどころか段々とこの体に心も馴染んでいるような…

もし…生理なんてきたら、俺どうなっちゃうんだろう

俺にとっては最重要課題であった曇り空的思考も、

トイレから出た視線の先、フラメが5〜6人の青年に囲まれてる風景に凍りついた。

7 決闘：初めての实战

「アンタ達、アタシが誰だか知ってて鬪ろってどういうの？」

見上げるフラメに見降ろす青年たち。

「もちろんだ。俺らのアニキの仇！憎き“凍土の魔女”ミリユード・インデイソフィアの“妹”…だろ？」

そのうちの一人が売り文句を投げつける。

フラメを取り囲んでいるのは全員この学校の上級生だろう。

メリー先生やライトさんがタチの悪い上級生がいて言っていたから、それが多分こいつらだ。

「分かって無いじゃないの。アタシの名前は“フラメージュ”。フラメ様と泣き叫びながら跪いてくれていいわよ？そしたら見逃してあげるから」

本当に怖いもの知らずだと、俺は呆れながらもちよっと安堵する。

強がりですらないことがはっきり分かるフラメの態度に、彼女を囲む上級生達もいらだちを隠せない。

俺はといえば、少々臆病風に吹かれながらも彼女の元へ駆け寄る。

「フラメちゃん！大丈夫？」

「全然平気。丁度いい薪がわざわざ向こうからやって来たから…ユメルにアタシの魔法見せてあげる！」

そう言って指輪に反対の中指を添える。
そこに嵌められたルビーが赤く輝き、俺と上級生達の顔を赤く染める。

「お姉ちゃんと一緒にされるなんてアタシも見下されたものね。
かかってきなさい！相手になってあげるわ」

生徒や先生らしき人が誰も止めに入らず遠巻きに見守る中、上級生の中でリーダー格らしきインテリ眼鏡イケメン崩れ（以下テリメン）が静かに言った。

「…場所を替える。こんなところで決闘なんてしたら何人死人が出るかわからないからな」

テリメンは、フレームの指輪に負けず劣らず青空色に輝く学生カード（ローカルゲートキー…だっけ？）を掲げて叫ぶ。

「コードナンバー10演習場“クローズド・ドーム”へ！」

青空色の光が俺たちを包み込む…

…

「ねえ、なんで私も一緒に転移してるの？」

「君には人質になってもらう。彼女が決闘に負けるまで延々戦い続けるためのね」

いつのまにか俺はフラメから遠ざかり、後ろからテリメンにがちり肩を掴まれていた。

周囲にはテリメンの配下が少なくとも30人は待ち構えている。明らかにカフェでフラメを囲んでいた数より多い。どうやらあらかじめ準備、予定された作戦のようだ。

「クローズド・ドーム」は東京ドームといえばしっくりくるだろうか。

観客席がバームクーヘンのようにぐるりと円周を占め、俺たちのいる中心部は全く障害物が無い広々した空間。

そこにヒステリックに高い男の声が響き渡る。

「フラメージュちゃんだっけ？。君には僕ら全員と決闘してもらおう。もちろん1対1で構わない！君が勝ち抜き続ける限りね。君がもし負けちゃったらその時は…フッフッフ。逃げても構わないさ。その時は僕たちがこの子をどうするかわからないけれど…ハッハッハ！」

俺を見降ろしフラメを見下し…典型的な悪役っぷりでイカれた笑い顔を晒すテリメンに、俺は恐怖を忘れて呆れかえった。

「そつえば、お姉ちゃんからこの学校に推薦された理由の一つに“生意気なガキ共がいるから黙らせといで”ってというのがあったわね」

顔は下を向いたまま、普段より声のトーンを抑えたフラメの言葉。テリメン達は圧倒的優位からか、既に彼女を低劣、下劣な眼差しで眺めている。

…お前らまだ11歳の少女に何するつもりだよ？

「この程度の人数でアタシをどうにかしようって？

全員同時に来なさいよ…来なくてもこっちから行くけどね」

フラメは顔を上げた。

満面笑顔にピシりとヒビの入りそうな怒りがのっかっている。

「こんなところまで飛ばしておいてどんなものかと期待していたけれど…」

指輪をしている片腕を、頭上へ持ち上げる。

「本当に…舐められたものね！“ファイアドラゴン”！！」

彼女の声を聞いた指輪から目が眩むほどの閃光が放たれる。

俺を含めて上級生たちが空に向かうその光を唾然と眺めていると、閃光はやがて大質量の竜形、ドラゴンの姿をとり…その身を上空に具現化させた。

「凄い…これぞ魔法の世界って感じ…」

言葉が続かない。

赤銅色の鱗と銀色に輝く角、爪、むき出しの牙。

全身が赤白い炎に包まれ、鼻先からは青い炎の吐息が漏れる。

赤竜の翼は静かに佇み、尻尾は徐々に外に出られた嬉しさからかブンブン振られている。

…お前は犬か？

「カフェじゃこんなデカイの出せないから、一人ずつ相手してあげてたのに…全く馬鹿よねえ」

馬鹿みたいに上空を見上げる俺たちに、上機嫌になったフラメが

言う。

視線が自分に集まってるって自覚したのか、

「グルアアアアアアア」

と赤竜も一声サービスのつもりか。

空の王者に相応しい堂々たる風格。

その姿を見て、恐怖以上に感動を覚えたのは俺だけではない。

「これが…具現化された伝説のファイアドラゴン！ファハハハ！君たち姉妹は素晴らしいよ！これが本当の天才と言うヤツか！だが残念ながらそれは読んでいた。“妹”ちゃんの魔法は分析済みなんだよ」

ビビリを隠そうとするかのようにヒステリックに笑って、テリメんと配下達は素早く陣形を組んだ。

そして思い思いの発動キーで、しかし一斉に2つの魔法を同時に発動させた。

「ウオータープール！」「プリズンスクウェアウォール！」「」

動画を16倍…いやそれ以上の速度で再生した時の映像が現実にあるという不思議な感覚だ。

ドームの端から、どうやって湧いた？という疑問も押し流す勢いの洪水が発生し、フラメの四方にドームの天井まで届く巨大で分厚い水の壁を作った。

水壁はやがて傾き大きな波の板となり、彼女を頭上の赤竜ごと呑み込もうと襲いかかる。

「だから…舐めてるって言うてんのよ」

俺には水の壁に阻まれてフラメと竜を直接視認することは敵わな
い…

しかしあの竜は本物ではなく彼女が具現化した膨大な魔力の結晶
体なのだろう、その存在は俺にも容易に感知する事が出来、水壁の
内側の光景を映し出す。

彼女の声に呼応して、赤竜は回転しながら翼を畳み落下…そして

「ブチ破れ!!!」

フラメの銃撃のような叫びと共に、竜自身が軸となって洗濯機の
如く逆回転、同時に翼を拡げ急上昇。

翼から放射状に広がった白色の炎が水に触れた瞬間、ジュツとい
う効果音すら生ぬるい…原理は逆?だが水蒸気爆発が起こった。

後には何も残らない。

「…馬鹿な!!!これだけの人数で作った大質量の水壁をこつもあつ
さりと…しかしまだだ!エンハンスピアだ!女を直接狙え!」

水壁の9割が蒸気すら残らなかった。

しかも爆発の風圧から身を守るためにテリメン側は半数が防御
シールドのようなものを展開、残り半数が1割の水を無数の槍へと
変化させて術者であるフラメ自身を狙う。

すると今度は、赤竜がフラメに向かってプレスを吐いた。

青く煌めく炎は彼女を水刃から守るように包み込む。

それに触れた水の槍はやはりというか、跡形も残さず消え去った。

「…もう終わり？期待ハズレね。どうしてこんな奴らにお姉ちゃんや先生方が手を妬くのかしら？」

フラメは青い炎を纏いながら悠然と佇んでいる。

「…クソツ！クソクソクソクソつたれが！！なんで才能つてのはこうも不公平なんだ？…アニキ…アニキ…アニキ、アニキがいてくれればお前なんか！こんな卑怯な手を使わなくなつて」

不良青年らは既に圧倒的な敗北感に包まれている。

諦めが早いと思うか…？あの竜を前にすれば誰だつて戦意喪失だろつ。

テリメンは良くやった方かもしれない…悔しそうな顔で悪態をついている。

上級生の中にはすすり泣いてるヤツもいる。

たった一人の女の子相手に随分卑怯なと思つていたけど…ちょっと同情しなくもない。

「…あの魔女があんな風にアニキを騙さなきゃ！…俺達だつてこんな風には…」

「ああ、お姉ちゃんがアタマ潰しちゃったからこんなに弱っちくなつたんだ。おいしいとこだけ摘み取ってアタシに残党狩りをさせるなんて…お姉ちゃんはいつもそう！帰ったらタダじゃおかないんだから！」

俺には基準が無いから分からないが、テリメン達もそんなに弱くはないんじゃないかな。

あの竜を見ただけでフラメが規格外なことはなんとなくわかる。

「クソツクソ！…だが、この娘はまだこちらの手にある。大切な友達なんだろう？」

テリメンが俺の肩を掴む手を離し、代わりに首に腕を巻きつけて言い放った。

…コイツにちょっと同情してたのは無しの方向で。

フラメはワザゆっくり俺たちに近づきながら言った。

「好きな焼き加減はレア？ミディアム？それとも…ウェルダン？」

後方にいる赤竜も同調して再び雄たけびを上げる。

この戦いの中で最も凶悪になったフラメの微笑みは、それだけでテリメンの精神を焼いてしまったようだ。

テリメンが俺の首に掛ける力が弱まる。

今なら自力で抜け出すことも出来ただろうけど…俺が魔法を使うなら、今が最良の時だと思った。

感情が程良く高まっている。

フラメの特大竜召喚魔法を見たせいか、魔力が体中で激しく脈動するのを感じる…

後で思えば、加減が効かなくてテリメン達を殺しかねない危険な行動だったと反省。

瞳を閉じて集中

私を中心に強い風が吹く…嵐のイメージ

テリメンには若干お仕置きのもりで

魔力を解放するため、全身の力を抜き

そして、私は目を大きく見開き叫んだ。

「テラビートストーム…ブレイク!!!」

7 決闘：初めての实战（後書き）

ようやく主人公が魔法を…どうにも厨二臭いです。

戦闘描写は難しいです。まだ剣術とか体術使わないだけ楽かもしれませんが。

ちよつとした幕間：舞台裏

「おいお前！起きろ！！田中だったか？…いい加減にしないと単位やらんぞ」

「んん…？」

決して教師の脅しに気づいて目覚めたわけではない。

たまたま“彼女”の覚醒の時間が重なっただけだったが、少なくとも田中利樹^{たなかとしき}“本人”にとってそれは幸運なことであっただろう。

某国立大学キャンパスの一室。

2 限目となる講義が始まってまだ数分、午前10時半を少し回ったところだ。

1 限目から講義があつた者でもそろそろ頭が回転してくる頃合い、まして田中にとって今日はこれが最初の講義である。真面目に受講する気があればまだ十分起きていられる時間帯であるはずだが…

昼寝というにはまだ少し早い時間、教室には100名近く学生がいるのに対し居眠りしていたのは彼一人だった。

前回も、前々回も、その前の週の講義でも同じ状況が続いたことを今の田中は知らない。

大学にもなると教師は学生の名前をいちいち覚ええない。もちろんゼミや研究室に所属すれば話は別だが、田中の顔と名前は特別枠“居眠り学生”として、その教師にインプットされてしまっていた。ひとえに日頃の行いと運が無かつたということ、目覚めたばかりの田中は教師のおかんむりにポカンとした表情を向けていた。

「もし今度私が来た時に寝ていたら、出欠表からお前の名前を消し

ておくからそのつもりで」

田中は急に立ち上がった、教師の顔を直視する。

「な、なんだお前…文句でもあるのか？…え？」

教師には田中の鷲色の瞳がゆらぎ…一瞬青くなったように見えた。何かの間違いだと思い、しかし田中に対して少し怯えを感じながら、教師は意味の無い瞬きを繰り返し現実から目を背けた。

田中の方はというと教師の言葉の意味をなんとなくは理解していたが、現在の状況としてはさして重要視する問題でないと判断、瞳を閉じた。

瞬きにしてはほんの少しだけ永い空白の時間

次に田中が目を開いた時、目の前の光景はキャンパスの黒板と教壇と五月蠅い教師の姿ではなく、よく見慣れた（と記憶されている）自分の部屋だった。ここなら邪魔は入らないと考えたようだった。きつと教師たちの目には、正に瞬きしてる間に田中が消えてしまったように見えただろう。

覚醒直後の転移にしては上出来だと思いつながら、魔力を消費した後特有の迷亭感が予想以上に大きく気分の悪さを拭いきれないまま、田中はまた直ぐに目を閉じた。

そして、まるで頭の中だけで言葉を発するかのようにな話を開始した。

『ギエス、聞こえてるなら返事なさい…ギエス？』

『ヘイヘイ、こちら平和過ぎて呆れかえりふんぞり返り暇潰しに耳クソとついでに鼻クソもほじってフツ…とか嘖いてるギエス様だ。何も問題ありませんぜ』

周りには誰もいないが、田中の脳には何処からかダミ声が返ってくる。

『くだらない状況説明はよして。私の体の方も大丈夫？』

『ええ、ユメル様本人かと見間違えるくらいの熟睡っぷりですぜ。』

傍目からは立ったまま眠っているようにも見える程の自然体を保つ田中の中で、二人のやりとりは続く。

『眠っているのに大きな変化があったら逆に怖いわよ。』

メッセを起動させて、これから話す事を録音して“私”に伝えなさい。出来るだけ早くお願い…本当はこっちからも魔力流して映像と一緒に送りたいんだけど（その方が驚くだろうし現実を認めさせやすいから）…こっちで魔法使うと思った以上に気分が悪くなるの。世界の歪みをこの身一つで受けてしまっているからかしら…』

『そっちは魔力要素が薄そうだからそのせいもあるかもしれないやせんね。了解…準備オーケーでっせ。そちらさんの肉声をどうぞ』

田中はコホンと一つ咳払いして、今度は実際に声に出して喋り出した。

「あ、あーと…私はユメル・バーティシア…いえ、今その名前はあなたのものね。あなたは自分のこと、特に人間関係をあまり詳細

には思いだせないはず。それは私があるから素敵な名前と記憶を
借り受けてるから………って、

お前男か――――！！」

本当に元は10歳前後の少女なのだろうか？

なんの躊躇も恥じらいもなく自分の体をまさぐり、事実を確認し
て愕然としつつも直ぐに調子を取り戻し話を続ける田中だった……が
しかし、

一難？去つてまた一難。

いつのまにか開いていた自室のドアから、シマウマ模様の太り気
味な猫が顔を出して一声鳴いた。

「ぎゃ――――猫を飼うな猫を……」

彼女本来の体は猫アレルギーのようだ。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

なんとか無事に説明を終えた田中だったが（シマウマ猫には逃げられた）

“ やっぱ今の録音NGにしようかしら？”
なんて思うかどうかの間もなく今度は、

「なんだ利樹帰ってたの？…って、アンタなんで部屋で靴履いてるの！？」

田中の声とシマウマ猫の悲鳴を聞いて母親が登場。
またひと悶着あるのだがそれは割愛。

ちなみに目の前で転移を見せつけられた教師は気味が悪くなりその日の講義を中止、早退。

後で一緒に講義を受けていた友人に、転移魔法のことで散々ネタにされたり中身がばれたり…

こちらも色々と今後が大変そうだ。

8 真の親分登場

時間を無限に拡張して大空を自由に駆ける少女の姿

俺の目線は純粹無垢な彼女の青い瞳に重なっている。

彼方に広がる青空も、この少女の時と翼の前には有限と定義され
たちっぽけな小部屋かもしれない。

そんな詩的な思いを抱きながら少女と共に空の世界を堪能してい
ると、下方に小さな光を見つけた。

少女と同じく純粹で悪意の無い波長の光

俺にはなんだか綺麗過ぎて逆に恐怖を感じる程であった。

『ここに至ってはいけない』

何の根拠もない俺の考えに同調する声が、光自身から聞こえた気
がした。

しかし少女は構わず光へ向かって落ちていく。

“どうする事も出来ない”

“どうしたいのか分からない?”

俺は少女の瞳という一人称から第三者としてそれを傍観していた。

『今なら、今この時のあなたならば…まだ間にあつ』

“簡単なこと。あなたに出来ることをあなたがすればいいのよ”

.....

「こつちの世界に来て早や2度目の気絶…向こうじゃこんなこと一度も無かったのにな」

目覚めるとちよつと前に見た白い光景。

お昼休みに寝ていた保健室のベッドに俺はまた寝かされていた。

「気がついた？…入学早々2度も保健室に運び込まれるなんて前代未聞…でもないけど中々いないわ」

フラメの決闘の終幕間際、俺が魔法を放ったところまでは覚えてる。

その後直ぐに気絶してしまつたのか、この場所で目覚めるまでの記憶がさっぱり抜け落ちている。

まだ聞いたことの無い声がする方へ顔を向けると、俺を見て微笑む妙齢の女性がいた。

「初めまして。保健室の先生やってますアレックス・リードといいます。さっきは校長先生に任せちゃつたけれど私がこの保健室の主です。ココの新たな常連になりそうな新入生さんよろしくね」

病院職に向いてそんな物腰柔らかく優しい音色…黒髪長髪日本人顔白衣の女医？の美声（と控えめな美貌）に、俺は一瞬で警戒心を融かされてしまったかもしれない。

「あの、どうして私はまたココにいるんですか？」

ゆっくり起きあがってみた。

今度は体も頭にも異常は無いようだ。

「倒れた原因は、急激な魔力消費に“体はともかく精神がついていかなかった”ようだけど…なんでそんなに魔力使ったのかこっちは聞きたいくらいよ。お友達は報告に行かなきゃいけないらしくて、ライトさんと一緒にあなたをココに置いた後直ぐ校長室へ向かったわ。」

今は少し休みなさい。ユメルさん今日の授業は全部欠席にしておくって言ってたから」

役目は終わったと言わんばかりに、リード先生は身支度を始める。取り敢えずユメルは無事そうなので俺はホッと一息。

上級生たちはどうなったのか…知らなくていいや。

「明日はあなた達新入生の健康診断と身体測定だから、まだ色々と準備が残っていて…そうそう、この部屋は放課後まで好きに使っていいわ。あなたくらいの歳なら、まだ男を連れ込んだりはしないわね？」

「男を連れ込む？…私が！？」

いたずらっぽい大人の笑みを残してリード先生は颯爽と出て行った。

優しげな趣きの割にきびきびと働く人のようだ。

「暇を持て余す魔法少女は、一体何をして暇を潰すのであろうか？」
この体は休憩要らずかつ我慢強く無いようだ。
先生が去ってまだ10分と経たないのにベッドから出たくて体が
うずうずしてくる。

「暇だ：フラメも直ぐに帰って来なさそうだし、魔法に慣れる練習
でもしようかな」

少し心を静かにしてからウイंकすると、今は締め切つてある保
健室のカーテンが軽く舞つた。

大丈夫だ。このくらいなら普通に使えそう。

「…もつと他の事つて出来ないのかな？ライトさんが、私は転移な
んて軽々やってたつて聞いてたらしいけれど」

フラメの難しい説明を簡単にすると、転移魔法は今いる場所、行
きたい場所、そこに転移した場合自分の体と重なつてしまう障害物
を把握して…その後はどうするんだ？何か特殊な詠唱が必要なのだ
ろうか？

試しに近くにあつたボールペンのようなモノを動かそうとしてみ
た。

目を閉じ、まずはボールペンが空に浮かぶ様子を思い浮かべ…目
を開く。

「…随分間接的な浮かび方だなあ」

ボールペンはちゃんと浮いていた。どこからか湧きだす風に乗ってフワフワと。

今度は浮かび上がったボールペンが手元に瞬間移動するように念じてみる。

2、3度瞬きすると、ボールペンは確かに一瞬で手元に来た。極端に局地的な突風に運ばれて。

俺が今やってる方法では風、というか空気を通してモノを動かすのが関の山みたいだ。

「やっぱりだめか」

これじゃ行きたい場所にある障害物どころか、そこに行くまで直線距離上の邪魔な物を全部排除しないと自分の体が壊れてしまう。

「フラメちゃんに聞くのが一番早いだろうけど…遅いな。ライトさんは呼べば来てくれるのかもしれないけど、なんとなく教えを乞いたい人ではないし…」

校長…ユメルの父さんは過保護そうだから、今の俺の魔法使いレベルを素直に教えたなら『もう学校なんて危険なところ行かなくていいから、ワシとずっと一緒にいなさい!』とか言われて軟禁されそうだ。

「知識のある人、モノ、場所か…ここが学校なら図書室くらいあるかな?」

でもどこにあるか分からないし、あんまり遠かったら行くの辛いし…

俺は暇潰しも兼ねて保健室の物漁りを開始する。
ちなみに最初に見つけたものは…

「生理用品か？これはまあ女子の為に必要だろうけど…！？避妊具とか一体何種類常備してあるんだよ！！？」

魔法学校で保健の授業とか？でも絶対こんなに種類はいらないはず。

リード先生：まあ生徒想いなのかもしいけれど…冗談で言っただんじやないんだな。

- - - - -

魔法に関する興味深い品は無かったが、こんなもの出てきたらいいなと思っていた校内地図が見つかった。

長期間使われてなかったのか、全体が色褪せてところどころが黄ばんでいた。

まるで宝の地図みたいだ。

「この学校ってそんなに歴史長いのかな？この地図今も有効ならいいな」

王立魔法学校は、2つのL字の片方を90度回転して先端同士をくっつけた、卍の片割れのような構造をしていた。

「校内は一本道…？廊下を歩いた時は分かれ道があったんだけど」

地図には現在地である保健室が赤丸で誰かにマークされており、

俺が行ったことのある食堂は3階の端に大きく、最初に授業を受けた教室は名前がわからないが、フレームと上級生たちが決闘をしたドームは校舎の離れにさらにでかでかと載っていた。

「大地地下室は…載って無い。そういえば最近出来たって誰かが言ってたよな」

フレームが行っているはずの校長室はここから随分遠そうだ。保健室は1階の端にあつて校長室はなんと6階の丁度反対側に位置している。この学校最上階の一室だ。

「遠いけど、校長室に行ってみるか？でもあの校長にはあんまり会いたくないなあ」

図書室はあるのかなと探してみる。

校舎内には見当たらない…と思った矢先、ドーム反対側の校外の四角い建物が目に入った。

「王立研究所第一図書館。そっか、研究者も利用してる図書館が校外にあるのか」

.....

目標が見つかり、早速向かおうと保健室を飛び出すが、

「この学校出口ってあつたっけ？」

まず第一の関門と言ったところか。

大地地下室を探して長々歩いたのは1階だったはずだ。そのとき学校の出口は1つでもあったか？いや無い。そういえば地図にもそんなものは書いてなかった。

仕方ない保健室の窓から飛び出そうかと視線を返すと、長い廊下の少し先に車椅子に乗った青年がチラリと見えた。こちらへ向かって真っ直ぐ車輪を転がしてくる。せっかくだからあの人に色々訊いてみようか。

この時、俺は何故だか青年に全く警戒心を抱かなかった。その違和感にすら気付けなかったことを後の俺は後悔する…のだらうか？

俺はコチラから積極的に車椅子の青年に声を掛けた。

「こんにちは。保健室に用事ですか？」

「こんにちは、可愛いお嬢さん。随分特徴的な髪と瞳だね。見覚えが無いから新生かな？」

俺はまあ見ての通り足が不自由になってしまっただね。検査もかねて週に何回かリドリー先生に診てもらってるんだ」

髪が少しだけ青っぽい感じの好青年は14、5歳くらいか。

淡い笑顔からは怪我人が発する独特の停滞感、閉塞感よりはむしろ誰にでも好かれるような、ほんのり温かいオーラを発している。

「そうなんですか。先生は明日の健康診断等の準備に出かけてしまいましたか」

「そうか…それは残念。君の用事はもう済んだのかい？」

見た目通りの優男なのだろう、自分本位でなく俺のことを忘れず気にかけてくれる。

ならばと、俺は困っている可愛い女の子を心おきなく演じて甘えることにした。

「はい、ココの用事は済んだんですけど実は…ちょっと道がわからなくて、王立第一図書館まで行きたいのですが…」

「うん、俺もたった今暇になったから行くことと思ってたんだ。それに礼儀正しき淑女には親切にしないとね」

「ありがとうございます！私はユメル・バーティシアと言います」

「バーティシア？どこかで何回か耳にしたような…ああ、もしかして校長の御息女？それとも…御孫さん？」

「いえ、その…多分娘です」

余計な詮索されたくないから（うまく答えられないし）今度からバーティシアの性は名乗らない方がいいかもしれないと俺は学習した。

「俺はハック・ディノフィンガー。友達からはよく“アニキ”とか呼ばれてる。よろしくねユメルちゃん」

「え？アニキって…」

フラメを襲った上級生達が確かアニキと呼んでいた。でもハック

の方がテリメン達より年下に見える。

この青年がフラメに勝るとも劣らない（とテリメンが負け惜しみしてた）魔法の使い手なのだろうか？

「もしかして俺の友達に会った？アイツ等未だに俺をリーダー扱いして持ちあげてるんでしょ？最近気味く顔合わせてないなあ…根は悪い奴等じゃないんだけど、不快な悪戯とか受けちゃってたらごめんね」

そういつて車椅子の好青年は手を合わせて謝る仕草をしてくれた。

“じゃあ、もしかしてあなたのその脚はフラメのお姉さんに…”
訊こうとして躊躇した。

あの時テリメンが言ったことが本当なら、フラメの姉は騙し討ちでこの人をこんな状態にしたのだ。

フラメの友達としてはちょっと触れたくない内容だと思って胸の内に仕舞い込んだ。

「いえ、今のところ“なんとか”大丈夫です。それにアニキさんて思ってたよりずっと良い人なんですな」

「なんだよその微妙な言い回し。そんなに問題児扱いされてるのアイツ等？それにユメルちゃんにまでアニキって…せめておにいちゃ…お兄さんと呼んでくれないかなあ？」

「アニキはアニキですよ。その方がカツコイイです」

俺が『お兄ちゃん（ハートマーク）』なんて言ったら、それだけで自分の心と体に鳥肌が立ってまた気絶しそうだ。

「そうかなあ。まあ呼ばれ慣れてるからいいけどさ」

アニキは優しい笑顔を崩さず楽しそうに笑っていた。

9 本物の黒幕？

「インテリ眼鏡イケメンもどき…まるつきり“テオ”のことだな」

“魔法青年不良組”（俺が勝手に命名）自称元リーダーのアニキは爆笑しながらテリメン達仲間の事を話してくれた。

俺の事情を聞いて転移魔法を使わず、歩みに合わせて車椅子を押しながら（俺が車椅子を押すことは丁寧に断られてしまったので、階段や一直線の廊下では俺が練習も兼ねて申し訳程度に風魔法を使い車椅子のアニキと一緒に飛んだ）“ドリームゲート”まで向かった俺達。

「確かにアイツガリ勉強だし、眼鏡は度が入って無いし、変な笑い方しなければそこそこモテるから…俺も今度会ったらテリメンって呼んでやろう」

「あの、まだ私の心の中だけの呼び名なんです…」

「じゃあ俺が校内中に広めてやるよ。他の奴らにもあだ名考えてやると良いかもな。少しはアイツ等への風当たりが柔らかくなるだろ」

俺が“アニキ”と連呼するにあたって、アニキの俺に対する口調も段々砕けてきた。

昔テリメン達とつるんでた時はこんな風に喋ってたのかもしれない。

地図に載ってなかったし俺もすっかり忘れていたが、普通この学校へは研究所からドリームゲートを使っていくものだ…とフラメから教わっていた。

出入口を作る必要なんか全くなかったのだ。

図書館へはゲートで研究所を経由して別のゲートで行くのだとア
ニキが教えてくれた。

…もし保健室の窓から出て外から図書館に向かったらめっちゃくち
や怪しまれただろう。中へ入れてもらえたか不安だ。

俺の魔法を使い2人で3階への階段を一気に飛び上がり登りき
ると、ゲートのそれらしき淡い光が見えてきた。

初めて観るそれは地面に魔法陣のようなサークルが描かれ光が円
柱状に伸びていて、B級SF映画に出てくるワープゾーンを思い出
させた。

人が中に入ると自動的に転移が開始されるようだ。

と思う間にも一人、ゲートからスーツ姿の若い女性が姿を現した。

「あら…御機嫌よう。脚の調子はどうかしら」

金髪ストレートを腰まで流した白衣の女性。

髪の色と同じ金の瞳が眼鏡を通して怪しく輝いている。

大人びてはいるが髪や顔の造形がどことなく俺の友人に似て
いて、しかも開口一番アニキの脚を気にかけた。

この人がもしかして…

「…ええ、おかげさまで順調に回復していますよ。所長代理。

いやもう既に次期所長就任内定ですか？」

「何言ってるの。所長は御健在よ。ただ病院で意識が戻らない“だ
け”なんだから…」

それに研究所の所員でもないハック君にそんな肩書で呼んでほし
く無いわ。私が卒業する前みたいに、気軽に名前を呼んでくれって
いつも言ってるじゃない。

でもよかった。あなたの怪我が完治に向かって私も少しは肩の荷が下りた気がするわ」

邪気の全てを腹の内に覆い隠したような白衣の女の言動。

アニキは何かに怯えるような、同時に怒るような震えを抑えて静かに言葉を紡ぐ。

「そうですねミリユ先輩。さっさと怪我を治して俺はアンタに…」

「ところで隣の娘は？まさか彼女？また随分とロリ…可愛らしいわね」

アニキの言葉を遮って、ミリユ先輩とやらは俺をじっとりした視線で見つめてきた。

「新入生のユメルちゃんとは保健室で出会って、図書館の場所がわからないということどこまで案内していたところですよ」

「あらまあ保健室！？男女二人があんなトコで一体何をやってたのかしら？」

「保健室を“出たところ”でばったり会ったんです！アニキ…デイノ先輩とはさつき知り合っただけばかりですから！！」

「まあまあそんなに怒らないで。ちょっとからかっただけじゃない…でもそんなに強く主張するってことは…あなたも見た目の割にマセてるわね。」

…この女の人は苦手だ。

俺は一体何に対して腹を立てているのだろうか？

普段は白い（とよく言われる）顔を赤く染めながら、保健室の先生とは正反対のドス黒いオーラを放つ白衣の女を睨みつけていると、

「それじゃハック君…オトナのお嬢ちゃん、またね」

俺のことなどまるで眼中に無いようで、彼女は手をひらひらさせながら俺達を通り越していった。

と思っただけ振り返って、たった今思い出したかのようにアニキに申し出た。

「あなたの後釜の…いえ、あなたのチームの新しいリーダー眼鏡君のことではないの。あなたの代わりに教師に目をつけられるようになったあの“真つ黒”…ムカツクよね。中々尻尾を出さないし…なんとかしてくれないかしら？」

「アンタに勝てなかった俺が、どうしてアンタが手を妬いているヤツを止められると？」

「あの“真つ黒”そろそろあなたの子分や知り合いにもちよっかい出すんじゃないかしら？」

「…なんだと？」

言うだけ言っておいてこれ以上アニキの言葉なんて聞く気が無いのか、女性は金髪を靡かせ悪態と呟きながら去っていった。

「校長つたら、こつちだつて忙しいのに…全く面倒だわ。妹を推薦なんてするんじゃないか」

彼女の独り言が廊下を伝わりこちらまで長々と響く。

ヒールの音がカツカツと耳障りだ。

苦虫をかみつぶしたような顔で立ちつくすアニキ。

俺は少し情報を整理したかったのだが、アニキの苦しそうな表情に掛ける言葉が見つからずただ立ち尽くした。

.....

「ごめんユメルちゃん。こうして立ち尽くしても何も変わらないね…図書館へ行こうか」

しばし沈黙の後、俺とアニキは二人とも無言のままゲートをくぐり、その先でさらに図書館行きのゲートを使って入口に辿りついた。ゲートを初めて使った感慨も、研究所と図書館に初めて足を踏み入れた感触も、俺の気持ちを底上げしてはくれなかった。

さっきの会話からは物語の断片しか読み取れないが、フラメやアニキとこれからも関わっていくつもりなら、いずれは俺にも避けて通れなくなる問題が控えているだろう。

フラメがそのまま成長して、性格だけを悪くしたようなミリューという女。あんなのがフラメの姉だなんて信じたくも無いが…

アニキの替わりに教師の目を一手に引き受ける程の悪さをしている“真つ黒”とはどんな人物なのか…

「ちょっと一人で探検してきますね。アニキはその辺で休憩しててください」

ワザとらしくはあったろうが、アニキを励ますように明るく元気な少女を演じつつ、俺は単独行動を開始した。

なんにせよ俺がもっと魔法を使いこなせないと話にならない。

いつまでも迷子で助けられてばかり、今後も足手まといになるのは絶対に嫌だ。

俺に出来ることはきつとある。

この世界での俺だからこそやれることがあるはず

そのための学習だ：自分から勉学に励むなんて何年振りだろう？
久々に燃えてきた。

王立第一図書館

真つ赤な絨毯とたくさんの書物が入った本棚が見渡す限り続いている。

この時間帯はかなり利用者が少ないようだ。いくつか本棚の裏側も覗いてみたが、人の気配が無い。

流石に半分は研究所の所員の為にある図書館だ。俺が通ってた大学の図書館並、いやそれ以上に難しそうなタイトルの本…参考書が並んでいた。

ちなみにやはりというか相変わらず、文字は明らかに日本語でないのに普通に読める。

疑問に思う前にありがたく読書を堪能させてもらおう。

「これなんか少しは分かりやすそうだな。 “魔法初心者心得概論”」

前文

その昔、魔法は選ばれた一部の人だけが扱える万能の力だった。

しかし人は万能を超えて全能を求めた。

万能な人同士の間起きた争いは世界を混沌へと誘い

終末の時、万能の人が砕け散ったその破片は世界の理を作り替えた。

現在では“通神の儀”を通して、自らの戒めとしてたった一つの

希望を糧に固有の魔法を使うことが世界に許されている。

「なんか凄く曖昧なことしか書いてなさそうだな。もっとこう、どうしたら転移みたいな便利な魔法が使えるとか、大きな魔法使ってもいきなり気絶しなくなる方法とか…」

パラパラとページをめくっていると、背後から急に寒気を感じた。本能に従い思いきりサイドステップする形を取ったところ、たった一枚の白紙のページが人体を切り裂いてもなお余りある速さですきまで俺がいた場所を通過し、正面の本棚の一冊に刺さった。

「誰!？」

振り返ってもあるのは巨大な本棚…そこに仕舞ってあるたった数百冊の本だけ。

今度はそのたった数百冊、たった数十万ページの紙の束の全てが俺を目がけて倒れ込んできた。

10 孤独な戦い（前書き）

血の描写ありありです。

10 孤独な戦い

紙のカッターに比べれば本棚が倒れてくる速度それ自体は大したことない。

問題は面での攻撃。左右どちら側かへ走り大量の本の下敷きになるのを防いだとして、敵もそれは読んでいるはず。本気で俺をどうにかするつもりなら間髪入れず追撃を仕掛けてくるのは確実。

ならば…コンマ数秒の思考から脱した俺はその場から動かないことを選択した。

俺が一瞬の間にまばたき（そもそも一瞬だけど）すると、倒れかかった本棚は何処からか吹いた突風により仕舞ってある本ごと体勢を立て直した。

しかし俺の想定外の行動に対しても敵の攻撃は止まない。

今度は俺の左右から、人体など容易く切り裂こうと鋭利な速度の紙吹雪が舞う。

前後は本棚に挟まれ左右は紙カッター。

俺は瞬きの間にハイジャンプ。2メートル以上ある本棚の上に飛び乗って紙の嵐をやり過ごした。

本棚の上で立ったまま周囲を見渡す。

「誰も…いない？」

少なくとも俺から見える範囲に人の気配は無い。

先ほどまでと変わらない無人の静寂が俺を包む。

と、再び紙吹雪が舞い上がり今度こそ俺の四方を完全に包囲する。

「ハッ！」

体を1回転させながら気合と瞬きを合わせて、紙吹雪をチリ紙の

如く全方位に吹き飛ばす。

弄ばれている？…図書館だから派手な魔法は使えないのか？
だったらお互い様だ。俺だってココに来て数時間しか経っていないのに、手がかりになるかもしれない書物を自らの手で紙屑にしたくない。

「出てこい。来ないならこっちから…」

行くぞ、と言いたかったが俺は未だに敵の居場所がわからない。

自分の攻撃的な魔法もどこまで使えたものやら…下手すると本日三度目の気絶を覚悟しないといけない。

その場で目を閉じ、図書館全体の空気の流れを感じようとする。
またもや紙吹雪が俺を襲うが今度は俺が意識的に張った風の結界によって、紙束は俺を傷つけること無く周囲を渦巻く。

この紙吹雪…色んな本のページのようだけど…こんなに散り散りになっちゃって元に戻せるかな。

誰がどこからこんなものを操作してるんだろう。

そもそも魔法ってどのくらい遠隔操作が効くんだけ？

風を辿っても周囲で魔法を使っている人物は見つからない。

アニキに助けを求めるか？

いや、例えアニキがフラメと同じくらい強力な力を持っていたとしても、車椅子の状態では格好の的になってしまふ。

まずはどうにかして敵を認識しないと…

「僕ならここにいるよ」

紙吹雪からの声が思考に沈んだ俺を現実に取り上げた。

俺を取り巻く紙吹雪がもさもさと集まり眼前で人の形をとる。

子供が遊びで作った下手糞なミイラみたいにしが見えないから不

気味で滑稽だ。

「遊びに来たよ。お姉ちゃん」

紙人形の声はくぐもっていて男女や年齢の区別がつかないが、ただ公園の砂場で遊ぶ小さい子供のような雰囲気だ。

「あなたは誰？どうして私を狙うの？」

「お姉ちゃんを狙う？昔はこうやって鬼ごっことかかくれんぼしてよく遊んだじゃない。あとは…」

人形が両手を掲げると頭上に紙が集まり、小学校の運動会で使ったような大玉が出来上がる。ただし中身は相当詰まっっていて重たそうだ。

「キャッチボールとか！ハイパース！」

人形は振り被ると何のためらいも無くそれを俺に投げつけてきた。

「パスはこっちのセリフだよ！でもいらないから」

咄嗟に上半身を大きく捻ってかわすがしかし大玉は空中で急制動をかけ、投げられた軌道をそのままトレースするようにしてこちらへ戻ってきた。

俺は今度は避けずに右肩を引き絞り、気合と共に拳を打ち出した。

「風底一線！」

俺を覆う風の結界が、青痣の1つも作れそうにない俺のパンチの

射程と攻撃力を大幅に上げ、大玉を切り裂き爆散、元の紙吹雪に戻した。

「そんな風にしたら直ぐ壊れちゃうじゃないか」

「壊さなかったら私が壊れちゃうよ!」

「一回くらい壊れても直ぐ治せるよ。お姉ちゃんが僕をそうしてくれたように」

「人間は一回壊れたら元には戻らないの!」

「ちつとも遊びに来てくれないから、もう忘れられちゃったのかと思っただけ泣いてたんだよ」

あなたは一体…

そう問う間もなく、紙人形は今度は自分の体を一部削って一振りの剣を作りだした。

「じゃあ今度はチャンバラごっこだ」

空中を滑るように移動してこちらへ切りつけてくる。

俺はまた上半身を捻って上段からの斜め切り下ろしを回避するが、紙の剣が顔に掠った。

「痛っ! チャンバラ… “ごっこ”?」

切られた頬を指で撫でると、赤いものが付着する。

こっちに来てから初めて作った傷だ。

この体に普通の赤い血が流れていたことに安堵しつつも、加減を

知らない紙人形に少しだけ恐怖を感じた。

「昔は一度も勝てなくていつも僕が真つ二つにされてたから、頑張って練習したんだよ？」

人形は喋りながらも手を休める事は無く、切り下ろした剣を横薙ぎに繋いでくる。

本棚の上じゃ場所が悪いと判断した俺は、その場から即座に飛び降り小さく華奢な女の子の体を風で庇いながら、四つん這いになりながらもなんとか着地する。

人形も空中を蝶のように舞い、蜂のように紙の剣で突きを繰り返す。

「くっ」

避けられないと判断した俺は、せめてもの悪あがきにと着地時にたまたま右手で掴んでいた物を突きだした。

「……？」

人形の攻撃が止まった。

「そんなの、ずるいよ……もうココの本はほとんど僕の一部分なんだから。そうやって人質を取られたら僕には何も出来ないじゃないか」

「……ごめん。でも話を聞いて欲しくて」

急死に一生か。

本を盾にしながら俺は必死に話を繋ぐ。

「忘れてたことは謝るから！また遊んであげるから。今は…ちょっとだけ大人しくしてくれてくれる？ココで調べたいことがあるの」

「ホントに？わかった。約束破っちゃだめだよ？」

あつさり俺の言葉を信じた紙人形はポンつと間抜けな効果音と共に紙吹雪に戻り、図書館中いろんな方角へ散り散りになって飛んでいった。

小さな紙切れがいくつか集まって1ページ分の紙を再生しながら各所の各書へ散っていく様は圧巻だ。

「あれ、まだ本に戻っていかない紙が…これは朶？」

何か所か真つ二つになったそれをこれまた何か所もテープでくっつけてあったり、千切れた部分を他の色紙で補強してあったりと散々な状態になっている。

でも、それだけ愛され続け（千切られてるけど）長く大切に（真つ二つになっただけど）使われていたのだろう。

『もう僕を本に挟んだまま忘れないでね？』

そんな声が聞こえた気がした。

朶をよく見てみると、黒インクを落としたような丸くて黒い染みが俺の目の前ですうっと消えていく。

「あれだけ暴れて、本のページもいっぱい舞ったのに誰も来ないなんて…おかしな図書館だなあ」

俺は頃合いの良い蔵書を探して図書館を練り歩いていた。

図書館に入った時よりもさらに人とのエンカウント率が下がっている気がする。

気まぐれに本棚の角を曲がったところ、遠目に車椅子に座った人物が確認出来た。

「アニキ！なんかいきなり本のページが…栞が襲ってきて大変だったんですよ…」

声が届いてもいい距離に近づいてもアニキにはまるで反応が無い。全く微動だにしない…いや、微かに呼吸しているのか時折肩が揺れる。

「アニキ…?」

異変に気づいて俺が駆け寄ると…

車椅子は赤く濡れていた。

真っ赤なはずの絨毯は車椅子に座っている人から流れ出たモノで赤黒く染まっている。

「アニキ！…一体何が!？」

これだけの血を生で見たことなんて当然ながらアッチの世界の経験でも無い。

俺は頭が氷のように冷えていくのを感じた。

吐き気と気が遠くなるのを必死にこらえながら傷口を探す。

血はわき腹から出ているようだ。服が真っ赤な染みをどんどん拡散させている。

内臓とかどうなってるのかよくわからないけどこの出血量…早く医者にみせないとやばい。

アニキの意識は無く、止血だけでも思い自分の服の袖を風で切り裂きアニキのお腹を強く押さえ巻きつけていると、

「珍しい菜を見つけたから利用させてもらった…あまり時間稼ぎにはならなかったようだけど」

背後から暗い声が聞こえた。

「君は僕の愛しいデイノ君のなんなんだい？」

振り返ると俺が来ているのと同じデザイン、ただし墨に漬けたように真っ黒い制服、それに負けない漆黒の髪と瞳をもつ、アニキと同じくらいの歳の男の子が僕を恋敵でも見るかのように睨みつけていた。

「私はアニキの“友達”です…あなたがアニキをこんな目に？」

「間接的には…ね。僕もここまで彼を傷つけてしまうなんて思わなかった」

“アニキ”“友達”という言葉聞いて安心したのか、一言言い残して直ぐに背中を向け去ろうとする漆黒の少年。

「僕の魔法は他人の想いや力を借りて、それを増幅させて使うものだと思うたから…僕自身の想いを彼に向けたらココまで反発され

るなんて… ああでもデイノ君が悪いんだ… あんな魔性の女に騙されて… 今度はこんな娘を相手にして僕をヤキモキさせて…」

俺も黒い少年の方を見ていなかった。

見ていたのは広がり続ける血溜まりだけ。

彼の独り言を聞きながら俺は何を納得したのだろう。

中々止まらない血を見ながら何を思ったのだろう。

少年に対して怒っていたのか… 自分の無力を嘆いていたのか… 他人の体からいつまでも傍観者的な立ち位置で人を見続ける自分の心にそろそろうんざりしたのか…

ナガレテイクイノチヲミテダホホエンテイタノカ

「このままで済むと思っているのか？」

俺は少年を見ずに問うた。悔い改める気はあるのかと。

彼も多分振り向かずに答えた。

「彼は多分急げばまだ助かるさ… ああ僕？僕を裁くことは誰にも出来ない。今までもこれからもね。」

僕は他人を糧にして魔法を使うから。誰もが自分には負けないけど勝てもしない、だから僕は無敵

…でもデイノ君が生きてたら… 僕自身の想いを受け止めてしまった彼なら僕を裁けるかもしれ」

『オマエガカワリニイタミヲウケロ』

「…嘘…？」

小さな、しかし致命傷には違いない空洞が出来たお腹を信じられないような顔で見つめながら、漆黒の少年は音も無く倒れた。

穴の空いた彼の腹から血が湧水のように流れだして絨毯を濡らす。

「道に迷ったら俺を呼んでくれって言ったじゃ…ユメルちゃん！何があつた!？」

「何よ！ユメルにはアタシがついてるんだから…ユメル!？」

図書館の異変に気付いた人が報告したのか、直ぐ近くに転移してきたライトさんとフラメの声が遠くに聞こえる。

二人がみたのは血に濡れて倒れ伏す二人の少年と、それを見てひたすら高笑いを続ける俺の姿だった。

11 学校の外へ（前書き）

出来るだけユル軽いお話に戻していきたいと思います。

11 学校の外へ

「ユメルあんた…」

「私は平気。それよりアニキを診てあげて」

「彼は…大丈夫だ。貧血だが傷口は塞がっている。しかしこっちの黒い少年は急いで病院に運ばないと不味い」

「そいつは自業自得です。放っておけばいい」

ライトさんはどう反応すればいいかわからないといった顔で俺を見た後、無言のまま二人の少年を連れて消えた。

「アンタこんなところで何してたの？アイツ等は一体…」

「保健室で暇だったから図書館でも行ってみようかなって思ってたから、アニキとばったり会ってここまで案内して貰ったんだけど、そうそうアニキってあの不良青年組の…」

説明しながらさつきまでの出来事を反芻する。

未だ手に握っている継ぎはぎだらけの栞。

これに意思を与えたという黒い少年

アニキを傷つけた張本人でもあったが、その傷が自らに跳ね返りライトさんに運ばれた。

呪詛返し…

本当にヤツの自業自得だったのか？

…あの時俺はどうして笑っていた？

「あんなひよろくてアタシ達と2〜3歳しか違わないようなのが不良組の元リーダーなの？ホントに強いのかなあ？アイツの怪我が治ったら決闘申し込んでみようかしら」

「優しくて良い人だったよ。可哀そうだから、フラメちゃんはある大きなドラゴン出していじめちゃダメ」

誰が相手でもあの赤竜は反則級だと思う。

「アイツのこと庇うわねえ…好きになっちゃった？」

「うん、人として、アニキとしてね。」

「ユメルがそう言うなら…まあいいわ。アイツ等とは決着ついちゃったから、アタシの方からちよっかい出す理由も無いし。で、これからどうする？」

フラメは決闘の件で校長と…特に姉からこっぴどく説教されたらしい。

俺ことユメルを巻き込むとか、派手に暴れ過ぎだとか。

処分保留、今日のところは自宅謹慎を言い渡されている。

「私も授業全部キャンセルされてるみたいだし…じゃあ、お外に遊びに行こう。王都を案内してよフラメちゃん。私“この辺り”のことなんにも知らないから」

この辺りどころかこの世界のことまだほとんど知らないのだけれど。

「自宅謹慎って言ったばかりでしょうが！でも家に戻るまでに“ち

よつと”寄り道するだけなら…ついでに家で遊んでいけばいいのよ

俺とフラメはいたずらっ子のように笑いあった。

気持ちの悪い血の光景なんて早く忘れよう。

俺達はゲートを抜け、研究所を出て日の光を浴びながらお散歩していた。

ファンタジーの世界観は中世ヨーロッパを参考にした記述が多いというが、中世というとまだ封建的な社会情勢であり地域毎に閉鎖的で交易など盛んではなく、実際のモチーフにされるのは発展著しい中央集権化された近世ヨーロッパ時代以降だとかそんな話はまあ置いて。

俺が見たこの異世界の風景はなんと表現したらいいのだろう…観光地？

海外に行った事は無いが、観光パンフに乗ってるあの綺麗な写真がそのまま目の前に現れたと言えば少しは通じるのではないか。

車のように速度の出る乗り物は無く、行儀よく舗装された石畳を馬車や徒歩の人が行き交っている。

丸くて大きな葉を持つ街路樹が等間隔に立ち並び、その奥には茶色や黄土色の趣きある古くて四角い建物が町全体の雰囲気壊さないよう良い感じに並ぶ。

「全く、アイツ等から仕掛けてきたのに、お姉ちゃんもやれって言ったのに、教師達だって目の上のタンコブだって言うから潰してやるうとしたのに…なんでアタシが御咎め受けなきゃなんないのよ！」

俺は王都の景色に見とれながらフラメの話を聞いていた。

彼女によると、俺が気絶する前に放った魔法で大嵐が起りドームは半壊、そこへライトさんが駆け付け仲裁、フラメは校長室へ連行され事情説明とお説教。

彼女の姉はどうか知らないが、校長は間違いなく娘の俺を心配し過ぎてフラメに予先が向いたんだろう。

幸い大した怪我の無かった不良青年達は俺やフラメの魔法に越えられない壁を知ってしまったたらしくその後はひたすら従順だったそう。

「私、フラメちゃんのお姉さん苦手だな」

「『凄い銀髪のエロそうな娘がいる』ってやっぱりユメルのことだったんだ。校長室に来る途中で会っちゃったんだね、アタシも最近のお姉ちゃんあんまり好きじゃない…自分勝手にちょっかい出す癖して直ぐに飽きて冷たくなるのは前と変わらないけど…研究所に入ってから益々氷の女王みたいに近寄り辛くなってきたさ」

それでもやはり姉妹なのだろう、フラメの言葉からは姉を心配する心が見え隠れしている。

「でも“エロそうな娘”…アンタ何したの？まさかあのアニキとかいう優男と」

「フラメちゃんまで何言いだすの！？私たちまだこんなちっちゃな

子供なんだよ」

「自分からちっちゃいなんて…ああ、あんたのホント体って結構大人なんだ？ねえソツチじゃどこまで進んだことあんの？」

「い…いやそれほどのこともありませんよ、あはは…」

ニヤニヤが止まらないフラメにタジタジと言葉が返せない俺。

“もう二十歳になるしかも男でついでに何の経験もありません”なんて真実絶対に言いたくない。

噴水が涼しげに水を吐き出し、俺よりもっと小さな子供が水遊びをしていてそれを母親が近くで見守る。あとは読書している老人が一人いるくらい。

そんな平和な広場に辿り着き、少し休憩することになった。

「王都シュミレンの中央公園よ。普段は人混みや露店でごった返してるんだけど、平日でまだ学校も仕事も終わって無いこんな時間だから静かなものね。」

たまにはこういうのも優越感味わえていいわ。ほぼアタシ達の貸し切りみたいだし」

午後の講義をサボって一人芝生に寝転んでいた時間を思い出す俺。まだ一日も経っていないのに懐かしく思う。

「アタシ飲み物でも買ってくるからそのベンチで待っててね」

「うう、お小遣いすら持ってなくてごめんね」

「気にしないで、後で校長にねだってみれば？アンタに凄く甘そうだったもの」

「うん、そうしてみる」

このままだとそろそろ今夜泊まる場所とか気にしないといけなし、校長には会わないといけなし。

ベンチに腰掛け足をぶらぶらさせながら、姿の見えなくなったフラメを待ちつつ噴水で遊ぶ子供を眺めていると、ガラの悪そうな高校生くらいの3人組に絡まれた。学ランみたいな黒服を第三ボタンまであけてはだけているのが面白いと思った。

学校にいたテリメン達が見下しそうなエリート面した不良（実際は才能にコンプレックスを感じていたようだ）なら、こいつらは下級生をパシリに使いそうな頭のよくないチンピラだ。

「お嬢ちゃん魔法学校の生徒だね？」

「こんなところでサボるなんてイケナイ子だなあ、何してるの？」

「マジね言っとオレ達と遊ばない？」

この姿はそんなに人目を惹くんだらうか？

日本だったらかともかくこっちじゃ金髪とか目の色が凄いのとか珍しくないだらうに…

「…お兄さん達、ロリコンなんですか？」

「いや、けどお嬢ちゃんくらい可愛い子なら…ギリギリオツケーかな」

「お金たくさんもってそうだし」

「高く売れそうだし…いやいや人身売買なんてアブナイ橋渡ってないから安心してよ」

何がギリギリオツケーなんだよ？

あと自分でも悲しくなるくらい一銭も持ってませんが。

…本当に巻き込まれトラブル体質だなあこの体は

「私も人のこと言えませんけど、お兄さんたち学校行かなくていいんですか？」

「オレ達貧乏だからガッコいけてないのよ」

「そうそうだからこうしてお嬢ちゃんにたかりにきてるの」

「オレ達も魔法ガッコ入学させてくれない？」

胡散臭いことこの上ない。

フラメちゃん遅いなあ…

この人達で遊んじやってもいいと思う？

こいつら不良から感じるプレッシャー？みたいなものはあの紙人形や黒い少年、テリメン達から発せられるそれより遥かに劣る。

自身の身を少しも心配してない俺がいる。

魔法の訓練もしたかったし丁度いいか。
でもこんな人前でガンガン魔法使っても平気なのかな？
魔法だとバレない程度にしておけば何の問題も無いな。

公園で遊んでいた親子は危険を察知したのかいつの間にか姿を消していた。

読書中の老人はそもそもこちらに気付いていない様子。
好都合だ。

「仕方ないなあ、そこまで言うなら遊んであげろ。お兄さんたちがケンカで私に勝てたら好きにしていよいよ」

「いやいやお嬢ちゃんに暴力なんて」

「素直にオレ達に付いて来てくれれば」

「手荒なマネはしないから。きっと気持ちよくなって楽しいよ」

3人組。
そういつつ俺との距離を縮めようとじわりじわり近寄ってくる

「じゃあ…こっちから行くね」

俺は気付かれない程度の風の結界を足に張り一気に加速、不良の1人に急接近した。

12 便利な能力（前書き）

一日遅れです。

今後も一日一章ペースは難しいかもしれませんが

12 便利な能力

俺の誤算はこの世界を知らなすぎたということか。

魔法が当り前のように存在する世界で、単純に力の強い魔法使いが常に最強なんてことはありえないのだ。

「うぐえっ」

まずは一人目、太つちよの鳩尾へ拳を浅く当てる。風の結界で強化された一撃はそれでも相手をふっ飛ばし悶絶させる程度には強力だ。

俺の先制攻撃に、口を開けて馬鹿みたいにへらへら笑っていた不良二人の表情が引き締まる。

だが俺は間髪いれずに風を利用し、速攻で二人目のサングラスの背後に回り込んで軽いミドルキック、両膝を膝力ツクンの要領で折って頭が下がったところへ掌底を決め気絶させる。

「…マジかよ」

最後の一人、ひよろつとした体躯の青年は俺の素早さと身のこなしに驚愕の表情を作りながらも逃げ腰にはならず、半身を下げて戦闘態勢をとった。

「今なら土下座で許してあげるよ？」

俺の勝利宣言にも無言のまま体勢を崩さない。

「じゃあ…これで終わり！」

俺は馬鹿正直に、だが常人なら頭で分かっても体が反応しない程の速度で突っこんだ。

「…あれ？」

相手まであとほんの1メートルに迫ったところで、風を利用し滑るように進んでいた足が止まった。

同時にさっきまで軽かった体がズシンと重くなった。普段と同じかそれ以上の重力を感じる。

「いやあ、エリート様を舐めてたわ。直接魔法をぶっ放さなくてもあんなだけ動けるとはな。油断しまくってたぜ」

余裕の表情に戻った青年の半身後ろ側の手には、丸くて黒い球体が握られていた。

「なんで…いきなり魔法が切れちゃったの？」

「こいつはな、一定範囲内の魔力を分散させて使えなくしちまう優れモノなんだよ。その分起動中は使用者の魔力をガンガン吸い取ってくがな」

掌大の黒い球体をくるみのように弄びながら不良は俺の片手を掴んで締め上げる。

「…くつ。そんなものがあるなんて」

見た目以上に強い力で抑え込まれ俺は抵抗出来ない。

「まだ軍部でも試験段階らしいからな。それにしてもよ、初っ端真

っ向から相手の懐目指して攻撃してくるなんて魔術師らしくねえなあ。普通遠距離からの撃ち合いがセオリーだろうが…おいジム、ケリー！いつまで寝てんださっさと起きろ。ガキだからって油断してんじゃねーよ」

俺が昏倒させた二人を軽く足蹴にして起こす。

手首を強く掴まれてるだけなのに魔法が使えず力も湧いてこない俺は、ひよる長の青年に引きずられるようして黙って付いてゆかない。

「誰か助けて〜」

「さっきまでの覇気はどうしたよ嬢ちゃん、腰が抜けてるぜ？まあこの辺りには人避けの結界を張ってもらってるから助けを呼んでも無駄だけどな」

この一部始終にまるで気付く様子もなく読書している老人を強く睨みながら、俺は3人組のアジトまで連行されていった。

.....

「あ〜くそ騙された。まさかアンタより先に捕まっちゃうなんて」

町はずれの廃ビルらしき不良達のアジトでは、俺の唯一無二の親友が先客として迎えられていた。

ロープでがっちり締めあげられて息をするのも辛そうなのに、強

気な態度はまるで挫けることを知らないようだ。

「お前達、意外と手間取ったようだね」

「へい、可愛い顔して中々の武闘派だったもので」

フラメを見張っていたのは髪を短く刈り込みパンクな恰好をした若い…女？。見た目はともかく声から女性だと思われる。

「『お友達が先に待ってるわよ』なんて人質取ったみたいに言われなきゃ灰にしてやったのに」

「ごめんねフラメちゃん。どっちにしる捕まっちゃって」

「ユメルは悪くないよ。アンタはアタシが守るってあの渋面オジンに言ったばかりだったのに、別行動なんてとらなきゃよかった…」

「あんまり喋るなよ？変な動き見せたら女子供だって容赦しないから。インディソフィアの娘、お前は身代金と交換するための人質だ。そして銀髪のお前はこの娘が妙なことしない為の人質だ。ナット！インディソフィアの家に身代金要求の手紙を出してきな。ジムとケリーはこのお人形さんみたいな銀髪を別の部屋で見張るときな」

「…へい姉御」

アニキの次は姉御か…関係はなさそうだけど。

「…ああそうだ忘れてた。念の為お前の魔道具は預らせてもらう。友達が痛い目みるのが嫌だったら素直に出しな」

姉御とやらはフラメの魔道具であるルビーの指輪をいじりながら俺に言う。

「ダメよ！アンタまで魔法使えなくなったら為す術なくなっちゃうじゃない」

「インディソフィアの娘はちつとも大人しくならないねえ…ジム、さるぐつわでも噛ませとけ」

フラメは口を封じられてもちつとも大人しくならず、むしろ一層元気になって激しく首を横に振るが俺には他に手が無い。

俺は大人しく唯一の所持品である“継ぎはぎだらけの栞”を姉御に渡した。

「へえ、こんなんが魔道具とは珍しいな…だが確かに魔力の残滓を感じる。これなら脆い分修復も楽か、安直だがおもしろい発想だ」

姉御は栞をポケットにねじ込みながら替わりにタバコを取り出して啜える。

「ほらお前たち、さっさと自分の役割を全うしな」

「『へい姉御！』」

.....

「あゝあ、つまらないなあ。なんか面白い事無いかなあ」

もう十分面白い目に遭ってる気もする。

「こつちだつてつまんねえよ。もうちよつと育ってる娘ならお互い楽しめたのによ」

「…エツチなことして？」

俺は寒気がするのを抑えて訊いてみる。自分の言葉にすら身の毛もよだつ思いだ。

「ホントだぜ嬢ちゃんよう。脅し文句であんな事言つちまつたが、真性のロリコンはナツトだけだ。いくら可愛くたつてまだ化粧もしないシヨンベン臭えお子様相手にオレ達は欲情なんかしないぜ。安心してお昼寝でもしてな。

姉御は絶対分かつてこの役割分担命令してる…なんだかんだで子どもには優しいよ」

廃ビルの別室に連れて行かれた俺と監視役である二人の子分達。

太っちょがジムでサングラスがケリーというらしい。

二人とも見た目はアレだが誘拐なんてするような人間には見ええない。人情というか…付け入る隙もありそうだ。

俺も一応フラメと同じように二人にヒモ縛られてたが辛くは無い。むしろゆるゆるでいつでも抜け出せそう。

「ねえ、お兄さん達はなんでこんなことしてるの？フラメちゃんのお家に恨みでもあるの？」

二人は顔を見合わせ少しの間思案顔だったが、暇つぶしにと太っ

ちよの方からとつとつ話してくれた。

「いやあ昔オレ達はどうしようも無いチンピラでよう…まあ今もそんなに変わってねえが、ケンカで姉御にボロボロにされてよ。オレ達単純だから直ぐに懐いちゃまったんだ」

「姉御はつええぜ。あるとき道のと真ん中でうんこ座りしてタバコ吸ってる大の男3人に…まあオレ達のことなんだけどよ、ボロクソに言ってきてさ。それでこっちがキレたら魔法使ってもないのに変な動きで俺達3人とポンポン吹っ飛ばされてな」

「とまあ、それからしばらく姉御にくつついて色々バカやってたんだけどよ。ある時氷みたいに冷徹な顔して呆れる程手段を選ばない女に目をつけられちゃってさ。姉御共々ムシヨにぶち込まれちゃったのよ」

「ソイツのやり方が酷過ぎたせいもあって、オレ達直ぐに出所出来たはいいんだが…姉御の頭に登った血が全く降りねえの。あの女絶対に許さねえ！！」って」

「それでその氷の女の事を調べたら、インディソフィアって家の長女だとわかったんだが…」

「フラメの姉だよな…気に食わない相手だと不良にまで手を出すのか。」

「王立研究所の2番目とかなんとかでガチンコするにはガードが固くてな。姉御の怒りが収まらないんで取り敢えず情報収集だけは続けてたら、最近家族が王都に引っ越してきたっていうじゃねえか」

あとは狙いやすそうな次女をターゲットにして身代金で間接的に鬱憤を晴らす、もしくはおびき出して決闘か。

「銀髪の嬢ちゃんにはとぼっちりだったよな。まあ大人しくしてりや後で次女の嬢ちゃんと一緒にお家まで送ってやるから。緊張して喉乾いたろ、なんか飲むか？」

「今ここには酒しかねえだろ…買ってくるか」

「頼んだぜジム」

サングラスは気が効くし、太っちょは見た目の割に接待向きな性格だ。

重たい腰を躊躇なく上げると俺に背を向けた。

こうして話を聞いた後だと凄くやりにくいけれど、俺自身このまま状況に流されるのは性に合わないし、フラメの姉に誘拐の情報が入ってしまうとフラメや俺にも危害が加わる恐れがある。

「二人ともそんなに悪い人じゃないけど…ごめんなさい」

「!?!」

風により俺を縛っていた縄を断ち、二人の視線の間を即座に駆け抜ける。

俺に気づき防御姿勢を取ろうとするサングラスの脇に肘打ち、ジャンプして太っちょよの首に手刀を当て気絶させた。

「さて、うまく抜け出せたはいいけど、この後どうしようか…あの黒い球体をどうにかしないとさっきの二の舞だ」

効果範囲外からこの廃ビルごと崩してやろうか。これだけ魔法を使うことに慣れた今なら大嵐を起こしても気を失わないで済みそうなのがする。

だがフレームを巻き込んでしまいかもしれない。彼女は今魔法を使えない状態なのだからなるべく安全に救出したい。魔道具も取り返さないといけないし。

俺は千切ったロープに魔法をかけ気絶させた二人を適当に縛り上げた後、足音を立てずに部屋を出た。

13 自分の限界とは？

「ありや、なんで戻ってくんの？つーか嬢ちゃんの魔法道具は姉御が奪ったよな？あのパワーとスピードは魔法じゃなかったの？」

ふとつちよとサングラスを縛って放置した部屋

俺が部屋を出てから戻るまでには数十秒程しか経っていないのに、サングラスの方は既に目が覚めていた。

「忘れ物といつかなんといつか、貰えるものは貰っておこうと思つて…気がつくの早いですね」

問いかけにまともに答えずに、俺はせつせと二人の不良のボディチェックを始めた。

「そりやこの短時間、しかも同じ人間に二回も気絶させられりや慣れてくあひやひやはひや！やめろお嬢ちゃん…その歳で痴女に目覚めちまつひやひやひやひや」

「失礼な！男の体なんて飽きるくらい知り尽くして…いえなんでもないです。」

んつと…やつぱり持ってた」

サングラスの背広の内ポケットから黒い球体、魔法を無効化するというアイテムが見つかった。

「なんで常に使っておかなかったんですか？」

「はあはあ…“リセットボール”のことか。自分で使ってみればわ

かるさ。ま、嬢ちゃんみたいに魔法学校通える天才なら大した努力じゃないんだろ？がな。そんなアイテムいくら使おうが結局最後は魔力、実力の高いヤツがおいしいとこ全部もってくんだ」

先天的な魔法の才能で全てが決まってしまう世界か。
俺が生きてきた世界と比べたらどっちがマシだろう？

「それよか嬢ちゃん！アンタはくすぐり師、いやマッサージ師に向いてるぜ！その魅惑的な愛らしい五指で毎晩俺を楽しぐゲツ…」

サングラスを今度こそ確実に（あの世までは行かないが）飛ばす一発を当てて階下へ急ぐ。

俺は先ほどまで幽閉されていた廃ビル3階から階段を下りながら、今この手に握っている黒い球体“リセットボール”にどう対処したらいいか悩んでいた。

「やっぱり効果範囲外、遠距離からの攻撃か…でもひよろつとした不良が言うにはそういうのが本来の魔法攻撃の定石らしいから、遠くから魔法打つても当たる前に無効化されちゃうんだろうな」

モノは試しと黒球に魔力を込めるイメージで起動を促す。

「あゝ…体から何かがすっごい勢いで吸われる。これは普通に魔法使った方が効率いいんじゃないの？」

あとなんとなく感覚で分かったが、込める魔力の量に比例して効果を及ぼす範囲が増減するようだ。

これだけ燃費が悪いなら、使用されても距離を取って持久戦に持ち込めばなんとかなるだろう。

そんな風に考えながら走っていたら階段を下り切ってしまったが、周囲は拍子抜けするほど閑散としていた。

「移動しちゃったのかな？」

俺の言葉を待っていたかのように爆音と衝撃で廃ビルが震えた。外で誰かが闘っている音がする。

散発的に聞こえる強烈な爆発音にフラメの身を案じつつ、俺は廃ビルの外へと躍り出た。

「あんだ…やるじゃない！」

「貴様こそ、フラメ様を誘拐しようというだけのことではありませんな」

「はっひゃえひえひゃふ！！」

変わらずきつそうに縛られているフラメが、猿轡に負けず叫んでいる。

闘っているのは不良3人組の姉御と…先ほど公園で読書に励んでいた御老人。

老人は片手で本を開き、もう片方の掌から炎弾を連射して姉御を揺さぶって攻撃の隙を与えない。

炎弾が周囲の瓦礫に当たって時折爆発音を奏でる。

俺は二人の闘いを注意深く見守りながらフラメの下へと急ぐ。

「ふあつ！ユメル！無事だった？変なことされてないでしょうね？」

猿轡を外されたフラメの第一声は俺の心配が…うれしいけども。

「フラメちゃんよりは大丈夫だから…もうちょい自分の心配もしなよ。」

よくわかんないけど、あそこの二人がドンパチしてる今の内にさつさと逃げよう」

姉御はまだまだ余裕の表情で、笑みすら浮かべながら炎弾を回避し続けている。

恐らく持っているであろうリセットボールを使わないのは必要が無いからだろう。

掠りもしない炎弾を連射する老人の顔には疲労が色濃く見えていた。

「あのおじいさん、ウチの執事兼ボディガードなの。そんなの要らないって言ったんだけど…」

さつき公園でも監視されて物凄く嫌な感じだったから、ユメルと分かれて巻いてやるうと思っただのに全然動かないし…アタシがいずれ友達のもとに戻ってくるとわかってたから？だとしたらボディガードとしては中途半端よね」

でも、とフラメは言葉を濁す。

「少なくとも今はそのせいで…アタシのせいでアタシを守るために戦ってくれてる。このまま見捨てるなんて絶対に出来ない！例え魔道具無しの役立たずだとしても…」

大人っぽくも正確に現状を把握し無力な自分を嘆く一方で、子供らしく真っ直ぐな感情を捨て切れず足掻こうとするフラメの心。

こんな良い子の為だったら、誰だって体を張って守ってあげたいと考えるだろ？

少なくとも俺はそうだ。

今俺に出来る事は1つしかない。

「フラメちゃんは…私が捕まったと思って仕方なく指輪を渡しちゃったんだよね？だったら今回は私の責任でもある。引き受けるよ」

「引き受けるって何を？アンタが戦うっていうの？やめて！魔法使ったらまた気絶しちゃうわ。ユメルは特殊だから…体が大丈夫でも精神が魔法を使うことに慣れてないのよ。それにアンタだってヨレヨレの菜みみたいな魔道具取られてるじゃない…？」

でも…それじゃあどうやってあそこから抜け出してきたの？」

俺は無言でフラメにウィンクすると、風の力を借りて一足で姉御の下へと飛んだ。

「そろそろこっちから行かせてもらおうよ！」

「くっ、これしきのことでもう体がついていかぬとは…ボディガードの方はもう廃業かのう…せめてあと10年若ければ」

炎弾を避ける必要の無くなった姉御は、肉食獣が獲物を追うよう

な素早さで老人との距離を縮め、人間離れた速度をそのまま脚に乗せて老人へ回し蹴りを放った。

さっきまで俺がいた廃ビルすら倒壊させてしまっような姉御の破壊の一撃。

それが決まるか否か刹那の間、

老人は未来予知の如く、蹴られたら飛んでゆくであろう方角に自ら吹っ飛んでいた。

「ふう…間一髪かな？」

冷や汗をかきながら、老人を庇うように姉御の正面へ立つ俺。

老人は飛んでいった先、瓦礫にぶつかる寸前でフワフワと浮かんでいる。

「お前は銀髪の…ジムとテリーはどうした？魔道具の無いお前が一体どうやって」

「あの槩は魔道具ではなく私の弟…みたいなものです。フラメちゃん指輪と一緒に返してもらいに来ました」

俺は小指と薬指を折ってそれ以外を真っ直ぐに伸ばし遊びでよくやるような銃の形を作って、訝しげな表情の姉御へ向ける。

二人の間合いは20メートル程。

「降参するなら今のうちです」

「どっちがだよ。あたしをチンピラ3人組と同レベルだと思ってないだろうな？」

姉御は上半身を両腕が地面つかないぎりぎりの位置まで下げ、本物の獣のように俺へと狙いを定めた。

老人との戦いで身のこなし、あの回し蹴りの速さと重さ。

魔力を純粋な肉体強化に充てているのか、人間の限界は安全ピンのようにポロリと外れている。よく体が持つなあ。

直接ぶつかりあったら、風の結界の力を借りても俺の勝ち目は薄いだろう。

「あなたは頑丈そうだから…むしろ手を抜いたらこっちが殺されそうなので全力で！一発で決めます！！」

あの黒い球体使ってもいいですよ？」

俺は目を閉じ指先に集中する。

周囲の空気が圧縮され指先の一点に集束していくのを感じる。

「…すげえ魔力の塊だ！…こんなおもしれえガチンコ勝負に小細工なんて勿体ねえよ。」

あたしも本気で駆け抜けることにする」

姉御は上体をさらに落とすし両手を地面に完全に付けて、体を限界まで地に伏せる格好。

お互いに最大の一撃を決めるべく、最高のタイミングを得る為の一瞬の間…

「ジムとテリーの仇だ……ブツ潰す！！！」

仇って…ちょっと気を失ってるだけだよ

先に動いたのは姉御の方だった。

たとえ目を開いていても霞んで見えただろう、先ほど老人に向かっていった時とは比べ物にならない、一頭の獣が弾丸のような速さでこちらに突進してくる。

静かに冷静に…敵が攻撃に転じるその瞬間、姉御腕が人間の限界を超えて引き絞られるのを風で感じた。

“ならば視界の果て、無限の彼方、地平線のさらに向こう側まで…消え去れ!!!”

魔法の引き金を引く、と同時に姉御の腕が俺の指先の銃身に触れる。

拮抗は一瞬だった。

姉御は自身が駆け抜けた時の倍のスピードで駆け抜けた道を斜め30度に角度を上げて飛んでいった。

俺の視界から彼女はあっという間に豆粒のような大きさになり、アニメで敵キャラがやられ星になるように…効果音無しに消えた。音速を軽く超えていたあのスピードでも体が千切れないなら、命は助かるだろう。

何か叫んでいたような気もするが、声も風と共に飛んでいってしまっただよ形で聞きとれなかった。

.....

「ふう……今度は…大丈夫そうだ」

「あんなに密な集束風魔法使って…体がよく持つわね」

縛られたフラメを今度こそ自由にし、俺の魔法でフワフワ浮いたまま気絶している老人を介抱しつつ俺も自らの精神に休息？をとっている。

「図書館で少し魔法の練習出来たから。でもフラメちゃんのドラゴンには敵わないよ」

「アタシは特別なのよ…アンタも特別なのかもしれないけど…」

俺の体は“さらなる力を使え”と猛っているが、今は精神的な疲労で気持ちがついていかない。

もっと強く魔法を使いたいなら、もっとこの体に慣れる必要がある。

その必要があるかどうか、どんな道を進んでいくのかはこれから考えていけばいい。

…別の意味でも色々慣れなきゃいけないことがあるかもしれない。元の体に戻る日はくるんだろうか？

うまく戻れても…男の体に違和感持つちゃったらどうしよう？

「ところでさ…アタシの指輪は？」

あっ…

「……………私の栞も一緒に…地平線の彼方へ」

「あああああもう今後アンタに頼るのはダメ！絶対！！」

「はい…以後気をつけます。指輪届けてくれてありがとうね」

地平線を超えた栞の執念（怨念？）に感謝すべきか恐怖すべきか

…

13 自分の限界とは？（後書き）

似たような文章、語彙の使いまわしには気をつけたいのですが…
書き続けるとそれだけ語彙力の無さが露呈されていく。

そして続きに詰まる。アイデアはあっても納得のいく表現、描写が
出来ない。

私情のもつれもあり、今後執筆ペースがさらに遅くなっていくかも
しれませんが、お付き合いいただけたら幸いです。

14 インディソファイア家にて

「ユメル様。この度はまこと不甲斐無い様を晒してしまい申し訳ありませんでした。フラメージユ様だけでなくわたくしまでも助けをいただき誠に感謝しております。

自己紹介が遅れました。私セバスチアーノ・ウルズと申します。セバスと御呼び下さい」

昔セバスチャンという名前に興味があつて調べた事がある。確かどこか西洋の国の男児に一般的につけられる名称だつたと思う。

ようするに日本でいう太郎…まではいかないが名前のテンプレである。

日本人が描く洋風の執事の名前にその名前が好んで用いられるようになった経緯はよくわからないが、今回は“たまたま”だと思ふことにしよう。

「予め手配しておいた警察がそろそろ到着する頃でしょう。面倒事はお引き受けいたしますのでフラメージユ様をよろしく願ひします。わたくしは…ボディガードとしてはもう失格でしょうから…今後は尾行などせず執事らしく正面からお向かいに上がります」

俺はこの世界の警察というものを拝んでみたかったが、フラメに釘を刺されてしまった。

「セバスさんは元軍属らしいから平気でしょうけど、警察にちよつとでも関わると“善し悪し関係無く一ヶ月は尾行が付くと思ひなさい！”って子共の頃教えられたわ」

フラメは今だつて子共だろうに…今は俺もか。

こっちの警察官って暇なのか忙しいのかわからないなあ。

日本の警察のこともよくわかってないなと思っただけど、まあそこんところは俺が平凡で善良な市民だったということだ。

俺達はセバスさんの寂しそうな微笑みに見送られながら廃ビルを後にした。

不良達のアジトからなんと徒歩で数分、俺とフラメは豪邸と称するに相応しい大きな敷地、それを守るに相応しく巨大な鉄柵門の前にいた。

大分錆びついてはいるが、門の両脇には守護として凶暴なキメラ像が睨みを効かせていた。

「まだ半日しか経ってないのに久しぶりに帰ってきた気がするわ」

「フラメちゃんって…本当のお嬢様だったんだ」

「初めて王都に来た人がこの家を見せつけられればそう思うでしょうね…」

何十年も訳あり物件で買い手がつかなかったこの豪邸を、お姉ちゃんが貪欲に値切って買い取ったの。もう三ヶ月経つのに半分も片づけが済んでないのよ。お姉ちゃんも滅多に研究所から帰って来ないから今はアタシとお父様、お母様とそれに最近雇ったセバスさんの4人で暮らしてるんだけど…分不相応だわ」

そう言って両手に力を込めて門を押し開けるフラメ。

頑強な見た目に反して鉄柵の門はスムーズに可動し俺達に道を譲

った。

王都を少し観光しながらも思ったけど、魔法ってこういう身近な部分では活用されてないみたいだ。以前フラメが言っていた通り魔法学校が最先端の例外なんだろう。

庭は門から玄関まで10メートル程の石畳の直線を除いて、背の低い雑草が無節操に生い茂っていた。

「そのうち野菜や果物、薬草なんかを育てたいってお母様は言うんだけど…何年先のことになるやら」

フラメは片づけが済んでいない自分の部屋を見られたみたいに恥ずかしげだ。

俺は雑草を横目に自分の家の庭を思い出していた。

確かウチもこんな感じ…だったような気がする。

家族や友達の事といい、俺の記憶はこういう部分がどうしても曖昧だ。

両開きの玄関扉は、先ほどの門と同じようにフラメの小さな両手で力強く開け放たれた。

俺達を迎えたのはフラメの両親であろう、彼女に面影が見え隠れする二人の男女が扉の直ぐ向こうで待ち構えていた。

「お帰りなさいフラメ、そちらの綺麗な髪の子は学校のお友達？」

「レミューから連絡があつてセバスさんが学校まで迎えに行ったんだが…一緒じゃないのか？」

大きく吹き抜けになっている玄関に二人の心配そうな声が響く。

左右には廊下が続いていて、奥にはいくつか扉がある。2階への階段が二つ緩やかなカーブを描いていて、上がりきったところに大きな額縁の絵が掛けてある。

まるでお城の入り口みたいだ。

「ただいまお父様、お母様。ちょっと誘拐されてて・・・」

「誘拐!?!」

いくら大人びていてもフラメだつてまだ子どもだ。

学校で大人数の上級生相手に決闘し、ついさっきまで縛られ猿轡まで噛まされていたのだ。

家に帰ってホツとしたのか疲れを見せながらも両親を心配させないように取り繕う。

「話してもそんなに長くはならないでしょうけど、先に着替えてくるわ。怪我とかは全然無いから心配しないでね。それからセバスさんは少し遅くなると思うので、お母様は夕飯の支度をお願い。後でアタシも手伝うから。」

それからこの子は学校で友達になったユメルちゃん。夕飯も食べていってもらっていいよね? いきましょユメル」

俺の手を引いて階段をズンズン登ってしまうフラメ。

目を白黒させて固まる彼女の両親にすれ違いざま「お邪魔します」と忘れずに一言添えつつ、俺はフラメに引きずられながらバルコニーの階段を上がった。

「ここが“今のところ”アタシの部屋よ。適当なところに座ってて」「これが“部屋”…？」

「アタシだつて未だに広すぎて落ち着かないのよ。着替えてくるからちょっと待っててね。」

入学早々図書館に行くくらいなら、その本でも読んでもいいわ」

苦笑いしながら部屋の奥の扉の向こうへ姿を消すフラメ。

「一つの部屋にいくつも扉が…あっちが寝室？じゃあこっこの扉は…？」

一部屋が高級マンションみたいだ。

俺は部屋の中央にある8人掛けテーブル（こんなものがリビングでなく個人の部屋に置けるのか）の一席に腰を下ろして周囲を観察する。

とにかく広いの一言。自分の部屋だけでLED？とはなんとも羨ましい限りだ。

フラメ自身の持ち物は少ないのか、白い壁紙や元からあったのであろう同じく白を基調としたタンス、戸棚などが殺風景な部屋をより際立たせている。

せつかくなので、俺は触ってもよいと許可を受けた本棚に向かう。部屋の廊下側を半分占拠している本のほとんどは、かつてこの家に住んでいた人の物だったのだろうか、かなり年季が入っている。適当に一冊取ってみた。

「…全つ然読めない」

フラメが苦笑いしてた意味がわかって俺も同じ表情になる。
ここで一つ疑問が湧いた。

俺はこつちの世界に来てから言葉と文字には苦労しなかった。

何故かは解らないが明らかに日本語ではない言語が頭に馴染んで
いた。

精神と肉体の関係なんて現代科学だって解明しきれていないのだ
から、俺には分かる筈も無い。

この本の古語のように、ユメルにわからない言語は俺にも解らな
い…今のところはそういう解釈でいいか。

彼女は俺の名前やら思い出を借りていと言った。

さっき自分の家の庭を思い出せなかったのもそのせいだろう。

逆に俺はユメルの事を何も知らない。記憶に無い。

じゃあこの世界の言語を理解しているのは、ユメルのせめてもの
配慮なのだろうか？

フラメが小さい頃読んで貰ったと思われる、古書と比べれば比較
的新しい童話をペラペラ流し読みしていると、奥の扉が開いてキユ
ロットスカートの彼女が姿を現した。

「お待たせ…さっすがに古文書は読書好きなユメルにも無理だった
か。まあアタシもお姉ちゃんも全然ダメダメだったんだけどね。で
もだからって童話読む事もないでしょうに」

フラメは涼しげなワンピースにカーディガンが透けたような薄い
上着を羽織り、金髪のツインテールを解いて流すままにしている。
大人っぽいのに大人しくない快活そうな制服姿とは打って変わっ

て、子供なりににも上品で物静か、優しげな魅力を引き出した彼女に俺は少しだけ見惚れてしまった。

「馬子にも衣装？」

「なにそれ？アンタの地方の諺？」

「なんでもないよ。ところでこの童話にある昔話って本当にあったことなの？」

図書館で少し読んだ本の前文が、恋愛要素も足されてより物語的に描かれている。

「さあ、あなたが間違いないんでしょ？アタシはそんな昔に生きてたわけじゃないし、この眼で確かめられるものしか信じてない主義だから」

「じゃあさ、ここに書いてある“魔法”と“万能の力”の違いって、今はどう考えられてるの？」

「この話題は前に少し触れたと思うけど、より詳しく言わせてもらうなら魔法は“通神の儀”を通して、その人の意思や本能を下地として魔力に指向性を持たせ、媒介となる魔道具を決めて魔力を固定化させることでようやく使えるものなの。そのせいで一人一人が使える魔法は融通が効かない場合が多いでしょ。」

魔法は指向性を強める程に力を増すのだけれど、その分使い道も限られてくるわけ。どれだけ万能に近い形で魔法を使えるかは先天的な才能の問題ね。でも後天的な努力と頭脳をフル回転させて融通の効かない魔法を一次元上にシフトさせる人も稀にいるらしいわ。

一方で童話に出てくる万能の力は“古代魔法”として研究が続けられてる。童話では限られた人が使える本当の意味で万能な力だけでなく、現代魔法科学では“誰もが自由に使える便利な技術”として応用性と汎用性を求めて…魔法学校のゲートなんかはその最たる成果なのよ…」

長い説明の後、フラメは何か考え込む表情になってテーブルに突っ伏した。

俺は俺で、自分の魔法について考えていた。

空気を自由に扱えるのは応用の幅が広いと思っていいのだろう。

だが空気をどうにか使って転移に応用出来るかと問われれば…少なくとも俺の頭では考えられない。

疑似的に空を飛んだり高速移動は出来ても、空間を自在に行き来するテレポルトみたいな事は無理なんじゃないかと思う。

とすると、ユメルと俺が使う魔法は根本から違うものなのだろうか？

それとも俺がまだ知らない魔法の抜け道があって…そう例えば学生カード“ローカルゲートホルダー”みたいに、俺から見れば第二の魔道具とも言えるアイテムを使って転移を…

「ユメル…アンタって、この世界の人間じゃないの？」

「…なんで？」

いきなりそんなことを？

「この世界の外側に、全く別の法則に支配された世界があるとか無いか研究者の間では言われることがあるわ。その童話に出てくる古代魔法使いも、もしかしたら違う次元の存在なんじゃないかって」

「…」

「アタシは単に、アンタが無知にしてはあまりにも常識がずれてるし、中身と体が入れ替わってるって言うてたから、その言葉を信じるなら可能性もあるかなって思っただけなんだ」

フラメは顔を上げた。

戸惑う俺を、彼女の鳶色の瞳は真っ直ぐ見つめてくる。

「前にも言ったけど、アタシは今のユメル好きだから、外見と違うとか関係ない、友達になれて良かったって思ってるから…もし本当に異世界の人だったら、これからも何かに困ったら力になりたいなつて。」

だから、ぶっちゃけると異世界とか関係なくユメル自身の事をもっと知りたい。アンタのこと色々聞かせて欲しい」

言葉も瞳も、その心も全くぶれない…なんて純粹な少女なんだろうと、話す度に驚かされる。

俺はこんな子の友達でいていいんだろうか？

判断するのは自分だけだって分かっている。過ちを恐れる心を怖がっている。

俺はフラメに嘘をつきたくない。

隠し事もしたくない。

向こうの俺の友達と合わせたって、彼女は数少ない親友の1人とと言える程大きな存在になっているんだから。

「ありがと…でも、入れ替わりの話をした時にちょっと言ったけど、今の私は本物のユメルに一部の記憶が抜き取られちゃってるんだ。」

だから、私自身話してても夢物語みたいだと思っし、説得力に欠けるかもしれない」

「それでも全然構わない！構わないよ！

：ユメルは自分のことほとんど全然喋ってくれないから、アタシのことホントは煩わしく思ってるのかもって…でも不良から助けてくれたし。なんだかよく分からなくなっちゃって

ごめんね。いきなりこんなこと言っちゃって」

そうしてまたうつむき加減になるフラメ。

泣いてるんだらうか？

俺が泣かせてしまったのだらうか？

俺に慰める資格なんてあるんだらうか？

「そんなことない！！私だってフラメちゃん大好きだよ！

ただ“こんな私”が、こんなに優しいフラメちゃんと仲良くしていいのかなって…ずっと思ってたから。

私も…自分の事聞いて欲しい」

言葉が自然に溢れてくる。

心とは揺さぶられるもの。

大人になったと思っつて、長らく動かなくなったものが動き出す瞬間。

「いいよ、全然いいよ。だから聞かせて、アンタのこと」

再び目が合う。

フラメは泣いてなかった。

泣く必要なんかなかった。

ただ俺を気にかけてくれた。

叫んだのはフラメではない。
階下から聞こえたとは思えない大音量での女性の声。
現在この豪邸でフラメ以外の女性は彼女の母親のみ。

「…またか」

俺とフラメは同時に言った後、顔を見合わせて笑ってしまった。
俺の場合はまた厄介事に巻き込まれるのかという“またか”
フラメの場合は、

「大方さつき誘拐された時に手下が出した身代金要求の手紙でも見つけたんですよ。手紙の内容によっては、アタシじゃなくて新たにお姉ちゃんが誘拐されたと思ったとか。お姉ちゃんに限ってそんなことある訳無いのに。」

そうでなかったらまた例の…」

「うああああー！ー！」

今度は男性の、フラメの父親の叫び声が聞こえた。
俺達も今度は笑わずに揃ってフラメの部屋を飛び出した。

14 インディソフィア家にて（後書き）

一応今回の話が主人公の心情のターニングポイントみたいな感じですが、色々と長ったらしく感じてしまったら申し訳ないです。

15 幽霊はいる？

「お父様！お母様！」

一階の台所に駆け付けた俺達の目に映ったのは、折り重なって倒れているフラメの両親の姿だった。

まな板の上には包丁と刻まれたキャベツ、テーブルに用意された空の皿、コンロに掛かった鍋がホワホワ湯気を立てているが火は止まっていた。

これといって争った跡は見つからない。

フラメは考え込むようにその場に留まってしまったので、俺は二人の下に駆け寄って状態を確認する。

「大丈夫、気を失ってるだけみたい」

「…やっぱり、またあの双子の魔霊の仕業だわ」

「双子のマレイ？」

幽霊みたいなモノか？

ココでは神様みたいな偶像は崇拜されない

ガーゴイルみたいな生物が珍しい

エルフとかドワーフのように、ファンタジーにありがちなヒト以外の種族も今のところ見かけない

世界の根幹を成す魔法は一見すると俺の世界の科学に準拠しているように見えて、根本的な原理は何も分かっていない。まあ俺は深いこと考えずに好き勝手に使わせてもらっているし、今なら30階建てのビル屋上から飛び降りても無傷で生還出来ると自身を持って言

えるくらい信頼、依存している。

今度は霊ときたか

この世界ではどういった存在なのだろう？

「双子の魔霊“シィとスウ”。この家が訳ありで、お姉ちゃんがタダ同然に値切って買った理由…その大きな原因の一つよ」

「魔霊って“本当に”いるの？人に悪戯出来ちゃうの？」

「そうね、魔法が無いアンタの世界じゃどうか知らないけど…」

さっき読んだ童話に書いてあったように古代魔法が失われ、代わりに公平とは言えないまでも平等に魔法が行き渡ったこの新世界“エリ又エ”では、副次的現象的に魔法の残滓が意志を持つ実体の無い存在、所謂“魔霊”となつて人々に様々な影響を与えるわ。

男女の不良と一緒にアンタがぶっ飛ばした…気持ちがいいくらい地平線の彼方までぶっ飛ばしてくれたアタシの魔道具」

「…意外と根に持ってたんだ。ごめん」

素直に謝る俺に、ふふんと鼻をならしてほくそ笑むフラメ。

「まあユメルが持つてるぼろい栞が届けてくれたからチャラでいいわ。で、その時アタシにもちよつと声が聞こえたの。その栞も実体はあるけれど広義には魔霊と言えるわね。持ち主の手を離れても自活出来る程の強さを持った、魔法によつて生み出された新たな意志」

「それじゃあ、死んだ人が枕元に立ったりとかは？」

「ゾンビのこと？^{アンデット}不死者なんかはまた別の領域で考えられているけ

ど、入れ物が有るか無いか、それが人かどうかの違いだから、案外的外れでもないんじゃない？」

俺が思ってるのとはちょっと認識がずれているかもしれない。

「なんて言ったらいいのかな…死んだ人の意志がそのまま残るっていうのは？新たな意志とかじゃなくて」

「うん、ユメルの言いたいことはわかるわ。

高名な魔法使いは生前の自分の意識をメッセージみたく何かに残したりはするけど、そっちは靈魂とか魂、“幽霊”と呼んで区別してるわ」

幽霊と魔霊は分類がわかれているらしい。

違いは意志が新たな存在であるかどうか。

純粋な魔法から生まれたモノであるか。

だったら人は？もし命の生まれる過程に魔法が絡んだら？
難しい事は取り敢えず置いておこう。

- - - - -

俺達はフラメの両親を近くの部屋のベッドに運んで、そのまま作戦会議を始めた。

「で、今回ののは」

「間違いなく“魔霊”よ。お父様お母様に訊いたところシィとスウは姿、性格ともに5〜6歳くらいの男の子と女の子。

アンタの琴もそうだと思うけど、魔霊は基本的に自活出来ると言

つても、術者が継続的に魔力を与えるなりして育てない限りは成長しないから。

幼少から強力な魔法使いが、幼くして意識だけを残して死んでしまった…なんて可能性も無いとは言い切れないけれど、そんな凄い人だったらつまらない悪戯はしないと思うわ」

「なんでフラメのお父さんとお母さんを気絶なんてさせたの？」

「アイツ等のいつもの手口なの。アタシやお姉ちゃんは極端に魔力が大きいから、魔霊が使う程度の魔法じゃ気絶なんてしないんだけど、お父様とお母様は普通の人の範疇だから狙われやすいの」

…俺は気絶するどころか栞に殺されかけましたが何か？

「しかも決まってアタシやお姉ちゃんが家に居る時、それでいてお父様お母様とは別の部屋に居るところを嘲笑うかのように狙ってくるのよ…そのおかげで大事にもなってないんだけどね」

両親の顔を窺いながら悔しそうな、苦い顔で話すフラメ。

気絶させられた二人はまだ気がつきそうにない。

「前の住人も、その前の人も魔霊の悪戯のせいでこの家に来て1ヶ月もたずに去っていったらしいわ。あの双子はふざけているのかしら？それともこの家を守っているつもりなのかしら？」

「何にしても退治するか、ここから追い出す方法は無いの？」

「魔霊に物理攻撃は効かないわ。全部すり抜け素通りで家が壊れちゃう。魔法にしたってアタシのは炎、お姉ちゃんは氷、ユメルは風？どちらにせよ全部物理攻撃の範疇ね。」

「何度も引き合いに出すようで悪いけど、アンタの稗みたいに依り代がハッキリしてればどうにでも出来るわ。でももし依り代があつても、この家それ自体がそうだとしたら全部燃やさなきゃいけないし…」

二人で考え込むが、良い案は浮かんで来ない。

「フラメの両親にこれ以上危害は加わえられない？」

「…今まではそうね。気を失ったり、びっくりして腰を抜かしたりした後に追い打ちをかけるようなことは無かつたわ」

「じゃあ、少しここを離れてフラメちゃん家を探索してみてもいい？まだ来たばかりの私だけなら、双子が接触してくるかもしれない」

「そうね…アタシは行っても双子が姿を見せた事は無いから待つてるわ。」

「アンタなら魔力も相当高そうだから簡単にやられはしないでしょうけど…一人で平気？恐くない？」

俺を一人で行かせることに不安な顔だ。

「いや、心配そうな顔の影に底意地の悪い笑みが覗いている。」

「別に魔霊なんて（見た事無いけど）怖くないよ…この屋敷には魔霊以外にも何かあるの？」

「いえ、大したものはないわ…どうせユメルには見つけれないだろうし。」

もしアタシの家族の物以外で何か掘り出し物があったら、一言アタシに言ってくれさえすれば後で持ち帰って貰っても構わないわ」

なんか引つかかる言い方だなあ。
双子以外に何が待ち構えているのか非常に気になる。

「まあ…そこまで言うなら遠慮なく」

物漁りを開始させていただきますか。

台所は屋敷の玄関から正面の扉を入ったところであり、そこから向かって右側、玄関から見て左側の廊下の一番最初の部屋にフラメ達がいる。

俺はそのまま屋敷一階の左半分から探索を開始した。
扉を風潰しに開けては部屋を覗いてみる。

最初のうちは掃除が行き届いた普通の部屋だったが、6番目くらいからは蜘蛛の巣とホコリにまみれた家具、調度品、骨董品がゴテゴテと置かれ、ジメジメと湿気った空気の部屋が次々と姿を表した。結局屋敷一階左側には全部で10の部屋があったが、フラメ一家によって片づけられていたのはちょうど半分。

まだ屋敷の反対側や、正面にある台所の隣の部屋、それに2階もあるが、取り敢えずもう少しだけ掃除されてない部屋を調べてみることにする。

「うへえ…物に触る気も起きないや」

こんな時こそ魔法の出番だろう。

窓の蝶番をこじ開けて窓を全開にする。

屋敷の外は広い空地みたいになっていた。

広大な庭は玄関前と同じように雑草で埋め尽くされ、夕日によってその全てが金色にたなびいている。

「もう直ぐ夜になっちゃう…暗くなる前にどうにかしたいな」

俺は幽霊を特別恐がるような性格ではないし、もう心霊写真みてキヤアキヤア言えるような歳でもないが、ホラー映画は昼より夜、暗い場所で見ただ方が何倍も雰囲気が出るのは万人に共通する。

魔法で風を上手に流して物を倒さず壊さず、蜘蛛の巣やホコリ等余分な塵だけをバツサバツサと外に吹き飛ばしていく。

俺が腕を指揮者のように振って風を操り部屋を綺麗にしていると、

「僕たちの家を荒さないで！」

「オツペ様の思い出の品を壊さないで！」

案の定、双子が俺を追い出すべくその姿を現した。

16 双子の奮闘

双子の幽霊：いや魔霊は、俺が昔大好きだった洋画のゴーストと似たような姿をしていた。

輪郭がはつきりした人間の子供、半透明で足はあるけど地面からは浮いている。

幼いせいか服装以外では双子の判別が出来ないが、男の子は白い半袖ワイシャツに黒いズボン、サスペンダーとどこぞのお坊ちゃんのような格好。

一方女の子の方は多段フリルでボリユーム感のある白いドレス姿。どこぞの城のパーティに列席する大富豪の子息達のようにだ。

「初めまして！フラメちゃんの両親に代わってこの屋敷のお掃除係を任せられましたユメルと申します！」

相手の礼装に対して俺も居住まいを正し自己紹介。

学校の制服はスカートでは無いけど、あるつもりのそれを軽くつまんでお辞儀した。

「嘘つけ！こっそり聞いてたんだぞ。僕たちを追い出そうとしたって無駄だからな」

「いや（目的は違うけど）ちゃんと掃除してるし、出て行けなんて言わないよ…けど」

バレバレのようなので、俺は風を操る掃除のタクトを再び振り直す作業に戻りながら魔霊との対話、交渉を開始する。

「なんで君たちは、フラメのお父さんとお母さんをあんな目に合わ

せるの?」

うん、この壺はいい味出してる!中に八チミツが入ってる的な意味で。

…こつちの世界に来てから物漁りの癖がつきそつだ。

「決まってるじゃん!」

「この家の魔を薄めないためよ!私たちがこつちで強く存在し続けられるように」

「シイそれは内緒!だって」

「ごめんスウ」

「ふーんそれで?」

分厚いホコリの下には面白そうなモノがたくさんあって、会話のキャッチボールを忘れかけている自分を自覚しながらも、物珍しさを求めて俺の目と手は珍奇な品物の虜だ。

「ここは今から約200年前天に召された偉大なる魔法使い“オツペンハイム”様の御屋敷!」

この和っぽいダンスは…桐ダンスだと!?古臭くて懐かしい香りは田舎のおばあちゃん家を思い出させる。

「力の無い者が踏み荒らすことは断じてまかりならぬ聖域!」

“すつごい飛ぶよ！この箒！！”

昔小学校でチャンバラごっこして遊んでたあの竹箒に似ていて、
これまた懐かしい。

見た目は悪くないのに変な名前がついてて台無しだ。

「オツペ様無きこの屋敷を、真の後継者が現れるまで死守するのが
僕たちの使命！」

“水がワインになる盃”

今この体にはあまり有り難くないな。

あつちの俺も酒は苦手で付き合い以外じゃほとんど飲まなかった。
そもそも俺はまだ二十歳になるかどうか…いやなんでもない。

「後継者足る者はその力を以って“証”となるものを示せ！！」

“失敗作！だがある意味究極の媚薬！飲んだ人が最初に見た人を
殺したくなる程愛してしまう薬”

最近流行ってるヤンデレになれる薬？

リアルで近くにそんな人いたら嫌だなあ。

「見事証明した者にはこの屋敷の全てと永遠の命の術を…」

あの…僕達の話聞いてる？」

「うん、聞いてる聞いてる（聞いてない）」

あらかた片付いたら隣の部屋、また隣の部屋へと移動しては掃除
と物漁りと会話の一方受信を続ける俺。

双子は自分達の使命を果たそうとすべく、必死になって俺に語

りかける。

「氷の女王と炎の姫は見事その力を示された。後継者では無いがここに滞在する資格のある者達だ」

「ホントは二人がケンカしてるのを見て恐くなっただけなんですが」

「（シィそれは内緒って言ったじゃん！僕達の威厳が台無しだよ！）

」

「（そうだっけ？ごめんスウ）

しかし！二人の両親にその資格は無いと判断したまで。

貴女はその力で何を示す？」

“絶対に勝てないと思った敵へ最後の手段！何が起こるか分からない！！一億の魔法を詰め込み圧縮したパ　プンテ玉！！！”
どうでもいいけどビツクリマーク多い。

見ていて面白いけども、あまり使ってみたくない代物ばかりだ。

」

」

“容量ほぼ無限大！好きな時に望む物を取り出せる四次元ポ　ツ
トー！”

どこかで聞いたことのある代物だ。

こんなものあるなら最初から屋敷の物全部この袋に入れとけばいいのに。

持ち物が少なすぎる今の俺には必要ないけど、便利そうだから貰

っておこっか。

「シィ、もういいよ。この人僕達の話全然聞いてくれない」

「でもスウ、オツペ様も研究に熱中されてる時はこんな感じだったわ。もしかしたらこの人こそ私たちが待ち続けていた…」

ふう…

これで屋敷の1階半分はだいたい探索したかな。

宝探しに夢中になり過ぎた。そろそろ明りが無いと行動しにくい時間帯だ。

「そんな訳無い！結局この人も僕達のことなんてどうでもいいんだ！そうやって無視するなら…こつちから試してやる！」

そう言っただ双子の男の子の方が、透明で華奢な子供の腕で俺に殴りかかってきた。

一息ついた俺はそれに気付いたが、大した脅威を感じないかったので好きにさせてみることにした。

「やあ！とお！てい！」

双子の半透明な手は俺の体に触れられずにすり抜ける。

しかし体に重なった部分から、僅かではあるが魔力を吸い取られる感覚を覚える。

「えい！えい！えい！えい！」

双子の少女も仕方なくといった表情で加勢してくる。

「たあ！たあ！たあ！たあ！」

子供の貧弱な連続パンチが俺を猛追する。

閉め忘れた蛇口のように俺の体から魔力が抜けてゆく。

この攻撃をあと100万回くらい食らったら気絶…するだろうか？
フラメの両親はこんなのにやられたのか？

こんなんじゃない気絶はおるか悲鳴すら上がらないと思うんだけど。

何かで急にビツクリさせられた後にこの攻撃喰らったら、シヨックで倒れないとも限らないか。

「はあ…はあ、どうだ！参ったか」

「ふう…ふう。謝るなら今のうちよ」

「御屋敷の反対側も掃除（と言う名の物漁り）しちやおっか」

「まるで堪えてない!？」

屋敷の1階反対側でも俺と双子の攻防？は続いた。

探索を終えた左半分と同じように、廊下の半分を過ぎた辺りから
空気が淀んで埃だらけ、ガラクタだらけの部屋になる。

俺は掃除の為に指揮を振り続けながら、試しに風の刃を発生させ
双子へ当ててみた。

何も無かったかのようにすり抜けて壁を傷つける。

「ああ！オツペ様の御屋敷が…よくもやったな！」

双子の攻撃は苛烈を極めるが、明らかに攻撃している自分たちの方が疲れている。

俺から奪った魔力をそのまま吸収出来る訳ではないようだ。

そしてやはりフラメの言った通り魔霊に実体は無い。

このまま地道に掃除を続けながら双子の依り代を探すか…この屋敷そのものに摂りついた地縛霊でないことを願いながら？

「…お互いに手の打ちようが無いね」

「もう諦めて帰って下さい」

「そつだそつだ！オツペ様の屋敷をこれ以上いじくるな！」

「…あつ！…リセットボール！」

「何！？」「ビックリさせないでよ！」

俺のとても少ない持ち物の中に最初から打開策はあった。

魔霊といえども子供らしく恐がりなのかもしれない…肩を寄せ合ってビクビク震える双子に少しだけ申し訳無く思いながら、俺はポケットから胡桃くらいの大きさの黒い球体を取り出して、魔力を込めながらギュっつと握りしめた。

目に見えない空間が俺を中心としながら円心上にゆっくり広がって…それが触れた先から双子の半透明なシルエツトが消えてゆく。

「シィ…僕達消えちゃうの？」

「スウ…大丈夫よ。また直ぐに復活出来るわ。だって私たちの本体は大浴場に…」

「シイっ！！それを言っちゃ」

（恐らく）あらゆる魔法を無効化する空間に呑み込まれ、双子の魔霊は俺の視界から完全に消え去った。

「さて…なんだか嫌な予感がするけど、大浴場へ行ってみますか」

17 晩餐とお風呂と秘密の場所

お風呂場へ行くならちゃんと許可を取った方がいいと思い、俺は現状報告も兼ねてフラメの両親が介抱されている部屋まで戻ったのだが誰もいない。

「フラメちゃんの両親気が付いたのかな?…この音は台所か」

微かだがコトコトと食欲そそる音を立てて食材を煮込む鍋の音。トントんとテンポ良くリズムを刻む包丁。

風の魔法に慣れてきたせいもあるのか、俺の聴覚（+嗅覚）はそれを逃さない。

美味しそうな音と香りに釣られるようにして俺の足はスルスルとそこへ向かっていった。

「…それでユメルが指をこんな感じにバアンってやったら、獣みたいに素早しこくて男か女か分からない不良の親玉が、ズキーンとすっ飛んじやって」

「まあまあ、凄いのねえ…フラメちゃん向こうじゃガキ大将で威張ってばかりだったから少し心配していたけれど、（強さ的な意味で）良い感じのお友達が出来てよかったわ」

厨房（今更だが広さ、仕様の凄さに台所とはとても呼べなかった）ではフラメと彼女の母が、仲良く話しながらも無駄無く動き回っていた。

「あの、お忙しそうなところ失礼します」

「あっユメル。ごめん、お母様たち気が付いたからさっさと夕飯の支度しようってなってます」

小皿にサラダを均等に盛り付けていくフラメ。

母の方は鍋に入ったシチューみたいなスープの味見をしている。

「さつきはみつともないところを見せちゃってごめんなさいねユメルちゃん。もうちょっとで準備出来るから。」

フラメちゃん、案内してあげて」

「はい、お母様」

ユメルにつられて厨房からエントランスへ出て、直ぐ右隣の扉からダイニングへ向かった。

煌びやかな装飾品の数々にも目が奪われるが、中央には貴族達が序列順に座るような長テーブルが中央に置かれ存在感をアピールしている。

いつの間に帰って来ていたのか、インディソフィア家執事のセバスさんが食卓の準備をしていた。

「これはこれはユメル様、先刻は大変お世話になりました」

「いえ、セバスさんもお無事で何よりです。執事服もお似合いですよ」

セバスさんはホッと笑ってタキシードの襟を正した。

「今後はこちら一本でいかせてもらうよう奥様にはお願いしました。前から仰っておられた通り、やはりフラメージュ様に護衛は不要だと苦笑されておりました」

ボデイガードは正式に廃業したようだ。

「何よそれ、どういう意味？」

フラメはちよつと膨れ面だったがそれ以上深くは突っ込まず、俺と一緒に席についた。

「そつだ、お屋敷を探索してたらこんなもの見つけたんだけど、使わせて貰っていい？」

オレはポケットから四次元ポケット（形は白くて半楕円形のポケット…ではなく、薄汚れた赤い巾着）をフラメにみせた。

「あゝ…ユメル、ソレちゃんと使ってみた？」

「ううん、まだだけど？」

「そこらの石ころでも入れてみなさい」

俺は試しにポケットの黒い球体を入れてみた。

「取り出そうと手を突っ込んでも望みの物が出てくることはまず無いわ」

「…それを先に言ってよ」

さよならリセットボール…

一応巾着の中に手を入れて、何かを掴んで出してみた。

…刃渡り10センチ程の両刃の短剣が現れた。

「手を切らなくてよかったよ…これは？」

「ありがとう！！それアタシがヴェニスで使ってた宝物なの！」

フラメに短剣を渡すと、懐かしそうにそれを抱きしめる。

「とまあそんな感じで、目当ての物が取り出せないから元の場所に捨てておいたの。欲しいならあげるわ」

…ありがたく貰っておきます。

夕食は長々としたテーブルの端っこを使い、執事だけどセバスさんも一緒になって家族団欒といった感じで進んだ。

「ユメルはね、あの魔法学校の校長先生の子なんだよ」

「それはそれは。さぞかし優秀な魔法使いになるんだろうね」

フラメは両親やセバスさんに、俺の事を友達を自慢するかのよう
に喋ってくれる。

それはとっても嬉し恥ずかしなんだけど、

「しかもね、本当のユメルは体と魂が」

「フラメちゃんのお母様、このシチュー？凄く美味しいですね。一体何が入ってるんですか？」

あんまり複雑な事情は伏せておいてくれると助かる。

「フフツ、インディソフィア家秘伝のタレと愛情がたっぷり」と

「(タレ?)」

「ヴェニスってどんなところなのですか？」

あんまり俺の事ばかり話されても気不味いのでこちらから話題を振ってみる。

「そうだねえ：これと言って特色の無い小さな村だけど、近くの森に大きくて綺麗な湖があって、よく皆でピクニックに行ったね」

これはフラメ父の談。

「そこでよく熊が出てね。ミリユーちゃんがいた頃は氷漬けにして非常食にしたり、フラメちゃんが魔法を使うようになってからは燻製にして非常食にしたり」

フラメ母によると熊は非常食料として重宝される存在らしい。

「熊って危険じゃないんですか？」

「僕達みたいな普通の人にはね。」

「ただ僕達の子供は、ミリユーとフラメは異常に魔力が強く生まれてきたから…それこそ熊程度なら食料にしちゃうくらい」

「でも、二人ともとても聞き分け良く育ってくれて…王都に来ても悪いことに力を使ったりはしてないみたいでよかったわ」

「最近のお姉ちゃんはグレイゾーンを突っ走ってるけどね」

.....

おいしくて楽しくてほんのちよっぴりスリリングな夕食が終わり、再びフラメの部屋でのんびりとくつろいでいた俺だが、ふと自分の現状を思い出した。

「魔霊もちゃんとどうにかしなくちゃいけないけど…帰りはどうし

よう

というかどこに帰るんだ俺？

とりあえず学校か？親馬鹿な校長のところか？

「今日は泊まっていきなさいよ。校長にはセバスさんから連絡してもらおうようにしておくから」

食後の紅茶に身を傾け、手元に戻ってきた短剣をいじりながら、フラメがそう言ってくれた。

「でも、いきなりお邪魔して泊まりだなんて悪いよ」

「セバスさんとアタシを助けてくれた。魔霊も追い払ってくれた。でもそんな事関係なくアタシの友達なんだから、細かいこと気にしないでいいの」

嬉しそうに胸を張って威張る彼女を見ると、こっちも嬉しくなってくる。

「ありがとう。じゃあお言葉に甘えちゃおっかな」

「そうしなさい！」

でも…考えてみればこの家に友達を招待するなんて初めてだった。何も準備してない！」

短剣と紅茶をテーブルに置きっぱなしにしたまま、フラメは直ぐに行動を開始した。

部屋から飛び出して数十秒後、大量の衣服を抱えて戻ってくる。

「お父様お母様に許可は取って、セバスさんにも学校へ連絡をお願いしたわ。

部屋はアンタも掃除してくれたしたくさん余ってるからどうにでもなる。

パジャマとか部屋着はアタシのじゃちよつと小さいと思って、お姉ちゃんが昔着てたのを何着か持って来たからこれ着なさい。

その他細かいことはお母様にお願ひしたから…お風呂に入ります

よ！」

「あの、まだ魔霊の話が」

お風呂と言う単語に危険な二オイを感じた俺だが問答無用とばかりに手を引かれて成す術無くフラメに従ってしまう。

「わ 広い」

大浴場は地下にあった。

エントランスから厨房の右隣がダイニング、左隣の扉が地下への階段となっていて、降りた先は二手に分かれ男女別の浴場の入り口へと続いていた。

「聡明なユメルは既に気づいているでしょうけど、この屋敷最大の魅力は広さでも謎のマジックアイテムの数々でもなくもちろん安い価格になった原因の魔霊でもなく『温泉』なのよ！」

「いや気付く訳無いでしょ……ここ温泉なの？天然の？地下からくみ上げた？」

「なんだか異様にテンションが高いフラメにちょっと引きながら話を訊いてみる。」

「天然でない温泉がドコにあるのよ？見なさい！飲料用（海外ではこつちが主流らしい）なんて小さいこと言わずに浴びる程、浸かって鼻歌歌えて泳げる程大量に湧いてるんだから！しかもココの浴場、原理はわかんないけど適温調整！掃除要らず！」

「はあ、そりゃ凄い」

「ユメル：アンタテンション低いわね。何かあった？お風呂嫌いか」

「いえ…そんなことはありませんむしろ大好きです」

こうして素っ裸をタオル一枚で隠した状態でなければ…

俺はフラメと共にもちろん女湯を（のれんはないけど）くぐった。くぐらされた。

フラメは俺にもじもじ恥ずかしがる間すら与えずスポポーン言う間に脱衣させ、自らもちゃっちゃと裸になり風呂場の扉を開いた。テンションの差は明らかだろう。

掛け湯も程々にして湯につかる俺とフラメ。

全体の作りとしては露天でない露天風呂？

窓も無く完全な地下なので外は見えない。お湯や空気の循環はどうなってるんだろう？

岩をうまく組んで湯が溜められている。

フラメの言うとおりどこかで調整されているのか人が浸かるのに丁度いい温度、癖の無い透明な湯だ。

自分の体も、もちろんフラメの方もなるべく（例えそれがまだ1歳にして未だ二次性徴の兆しをみせない、煽情的というには程遠い身体だとしても）見ないようにして、代わりに魔霊の本体となる依り代を必死に探そうとする俺。

「ここって地下なんだよね？湯気が凄くてあんまり遠くまで見えなけれど明るい…どこか屋敷の外とは繋がってるの？」

「さあ、明りも魔法によるものらしいけどアタシにはよくわかんない」

流石は温泉といったところか。

俺もフラメも落ち着きを取り戻し、ゆったり風呂に浸かりながら何も無い空間を眺める。

互いに言葉は無いがそれが自然（本当にオレ達は子供か？）

素人目の俺にも、この世界に不思議というか違和感が尽きない。

魔法は確かに存在するようだが、それが生活や大衆文化にほとんど貢献していない。

科学技術もそこまで進んでいるようには見えないのに、生活水準は俺がいた世界とあまり変わらない。

こんな風に（ほとんどが役に立ちそうにない物ばかりだけど）魔法を技術に転換しているオツペンハイムと言う人は本当に偉大な、でも世間にはあまり評価されなかった魔法使いなのかもしれない。

「さっきの話の続きなんだけど、この大浴場に何か特別な場所とか物って無い？」

「そうね…端から端まで泳いでみたこともあるけど…今浸かってる

大きなお風呂以外に、秘密のサウナがあったくらいかな」

サウナ！？

チャポチャポ音を立てながらお湯をかき分けて歩き出すフラメ。

「件の双子の魔霊くだんの事なんだけど、ココに二人の依り代があるらしいんだ」

彼女の後姿を追って俺も湯の道を突き進む。

「ああそうね…やっぱりアレなんでしょうね。壊すしかないのかな？…アタシが調べた限りじゃ魔力を感じなかったし、サウナ好きだったんだけど」

子供のうちからサウナ好きな子っているもんなんだ。

身体的にも精神的にもお風呂すら我慢出来ない（してはいけない）子が多いっていうのに。

「ほらアレよ。アタシは魔霊の方を見た事無いけれど、まんまその双子なんでしょ？」

フラメが風呂でも付けたままの指輪から炎を呼び出して、一時的に湯気を追い払う。

周囲が熱くなったので俺は体を湯船に沈めた。

…なんて力技だよ。

でも確実に晴れた視界の先には

「ああ、確かにあの魔霊の双子だ」

風呂場の石像にしては珍しく服を着たままの子供が二人、手から大量の蒸気を噴き出していた。

「多分ココの像にはまだお父様やお母様は気付いてないと思う。魔霊を何度も目撃してるのにコレを見て何も思わないはず無いもの。

ちなみに、ここら辺を境目にして向こうが男子風呂ね」

∴ 実質混浴でしたか。

18 ユメルと校長

「で…どうしょっか」

「どうするも何も、壊してみるしかないんじゃない？」

フラメが自慢の炎で消し飛ばした湯けむりもすっかり元通りになり、視界は完全に閉ざされてしまっている。

双子の魔霊そっくりさな石像は既に目視出来なくなっているが、俺達の脳裏には両の掌から高温の蒸気噴射を続ける双子が目焼き付いていた。

フラメは魔力を感じないと言ったが、俺にも石像それ自体からは何の気配も感じられない。

この場所に対する圧倒的なまでの違和感は拭いきれないが、一体何をどうすればいいのかさっぱりわからない。

ただ壊してしまうのも気が引ける。双子はフラメの両親を怖がらせたり気絶させたりはしたが、それ以上のことはしていないというし、何の反応も無い石像を壊したところでやっぱり何も起こらなかつたら全く意味が無い。

「何か仕掛けがあるのかもしれない」

「どんな仕掛けがあるのよ？」

「…」

「…」

お手上げだ…思考が働かない…。

「ねえ…ちょっとユメル!? のぼせそうなら早く言ってよね」

「うん、大丈夫…じゃないや。一度上がるっ」

- - - - -

脱衣場まで戻り体を拭いて、フラメの姉のものだという服を借りた。

頭の中で双子の石像の謎が先行しているためか、女性の服を着るのに少し手間取っただけで抵抗は無かった。

俺はこっちに来て最大の壁を1つ乗り越えたようだ。

のぼせ気味だったせいもあるが、自分やフラメの裸を直視しても何の感情も湧いてこなかった。

ブラジャーなんて付ける意味があるのか分からない程のまな板だったが、『今後に影響するのよ』とフラメに無理矢理人生初体験。

あと借りた服が薄めるめの空色で上下セットでフリフリがたくさんについてこれまた人生初のスカート。

パツと見た感じ普通の女の子でも恥ずかしがってあんまり着ないだろうと思えるくらいがつっぴりアイドル系な服だと思ったが何も考えない…無心に徹した。

「似合うじゃない! お姉ちゃんは凄く嫌がって1回しか着なかったやつだからユメルにあげるわ」

「…ありがとう」

絶対フラメに遊ばれてる。

もうどうにでもなれだ。

万が一あの校長なんかに見られたらどうなるか…

.....

「おおおおおユメルちゃんそそその格好最っつっつっつ高！
！」

悪い予想が当たったようだ。

エントランスではユメルの父親、親馬鹿校長がフラメの両親から
接待を受けていた。

もちろん俺を^{ユメル}心配してここまで訪問に来たのだろう。

俺達に気がつくどダッシュで駆け寄り、まだ体が火照り気味で自
由の効かない俺を全力で抱きしめた。

「ごうちよ…おとつさ…パパ…ゴメンナサイ無理無理死ぬ死ぬ死ん
じゃう！」

「わしなんか5度の飯も喉を通らぬくらい死にそうだったわ！校内
の不良共に絡まれるわ外なら犯罪者扱いされてもおかしくないレベ
ルの少年に目を付けられるわ拳句の果ては外でも有名なチンピラに
誘拐されるわ…」

確かに普通の親なら卒倒モノだろう。

今倒れそうなのは俺の方だが。

校長は親馬鹿爆発な調子を少しだけ落とすと、俺にだけ聞こえる声で囁いた。

「ユメル” だってここまで目立って事を起こしたことは無かった。むしろ今まで自分が公に出るのを控えておったくらいじゃ…後で二人だけにして貰おう。話さねばならぬこと、渡さねばならぬ物がある」

「校長先生、そのくらいにして下さい。ほとんどユメルを巻き込んだのはアタシですし…」

フラメが珍しく殊勝な態度で校長に近づいてから小声で言う。

「アタシもユメルの秘密を知ってますから…その話混ぜて下さいね」

「むづ…ミリユードには世話になつとるからのう。お主もいずれは大物になるんじゃないやろつて、ここいらで巻き込んだ方が都合が良いかもしれん」

校長はフラメの両親に二言三言で話をつけてくると、俺達を空き部屋の1つに誘った。

ちなみにそのフラメの父母からは

「今度家に来る時はその服を着て来るように」

「もつと可愛いフリフリな服もたくさんあるから、今度着せて上げるわね」

もつココに来ることは多分無いだろう。

そう思わないと、自分の中の何かが終わってしまいそうだ。

.....

「まず最初にコレを」

校長が俺にくれたのは、その昔英国紳士が使っていたような片眼鏡。シルクハットと共に貴族階級や怪盗ルパン等のシンボルを思わせるようなモノクルだった。

「これは…？もしかして“ユメル”の魔道具ですか？」

「嘘！？アンタ今まで魔道具無しで魔法使ってたの？」

フラメの顔が驚愕…それと微かな畏怖を交えた表情に変わる。

「確かに魔道具の一種じゃが少し違う。このモノクルはお前さんの魔法をより制限、制御する為の補助装置のようなものじゃ。

不良との決闘でドームを全壊させる程の大嵐を起こして気絶したと聞いたからの。

“ユメル”がウチに来て直ぐの頃、5〜6歳のとき少しだけ使っていたんじゃが、また必要かと思ってな。もっと早く渡しておけばよかったのかもしれん」

校長の話にフラメは納得しかけ、しかしやっぱり腑に落ちない様子で俺に訊いてきた。

「敢えて今まで訊かなかったけど、アンタの魔道具って何？あの栞は違ったし、お風呂に入る時も何も持たなかったから気を抜いてるのかと思ってた…」

「よくわかんない…私が魔法を使うときは、常に自分の眼を意識してた」

初めは集中するのに目を閉じたりしたけど、今は大分自由が効くようになった。

このモノクルも今となっては不要かもしれない。似合わないだろうし。

「ワシにも詳しくはわからん。実のところ“ユメル”は、今は亡き知人から託された養子だったんじゃが…家に来た時にはもう魔法が使えておった。制御が効かぬ程の魔力を溢れさせておった。

お前さんが言うとおりユメル自身の眼が魔道具なのかもしれないしあるいは…」

校長はそこで言葉を止めた。

「魔法は“通神の儀”…二人の“万能なる者”が死んで今の世界が創られたとされる始まりの場所、ナオラ大聖堂“エリ又エの聖域”で誓いの祈りを捧げる事によって魔道具に固定化、確立され、個人が自身の創造領域の範囲内でのみそれを行使用することを許されるようになる」

フラメが辞書を一字一句暗記して空読みするかのように暗唱を始める。

「魔法を固定化させる為に何らかの道具を魔道具として媒介にする

必要がある。必然的に魔道具に対する依存度は高くなる為、より身近な物を選んだ方が悪影響は少ないが、そこには必ず“意志有るモノ”が宿る。

もし既に命ある存在を媒介にした場合、新たに生まれた意志との摩擦により既存の生命と共に消失、あるいは変質し、魔法の精度が大幅に落ちる、もしくは完全に使用不可能な状態に陥る」

フラメは大きく一息取って俺に話を続ける。

「先人達の経験則、魔道を志す者の常識よ。

魔道具は自らの命と等しく大切な物。“大抵の人が一生に一つだけ”持てる無二の相棒。そりゃ自分の体そのものを魔道具化出来ればリスクは大幅に軽減されるけど、それに成功した人は…

アンタは一体何者なの？アタシだって大概：だから、ユメルのことを今更恐がったり嫌いになったりする程のことではないのだけど」

彼女は命に等しく大切な魔道具を俺の為に手放したのか。大事な物だということはわかっていたけど…

フラメは俺に関する不確定な事実に対し驚いているが、俺を想ってくれる気持ちが変わらないことに安堵する。

一体あと何回この感情のやりとりを繰り返すんだろう？

彼女と友達であり続ける限り何度でも？

今だってまだ秘密を1つ、俺の魂というか、精神は男だつてことを隠したままだ。

たとえ何度赦しあえたとしても、全てを分かりあえる時は永遠に…

「込み入った話は後じゃ。それよりユメルよ、お前さんが今使えておる魔法は風や空気に類するもの“だけ”なのか？」

「はい、そうですが」

やはり“ユメル”は他の系統に分類されるような魔法を使っていた…？

「そうか、わかった。この件に関しては以上じゃが、もうひとつ“ユメル”の過去について話しておかねばならん」

随分とワザとらしくはぐらかされた気がする。

保健室の時もそうだったが、必要な事だけを話し、決して全てを暴露しようとはしない校長に俺は少しだけ不信を抱いた。

「この話は保健室で少しだけ触れたが、ユメルは過去にも2度、お前さん以外の人物と入れ替わりを起こしてある。その人物が…その、なんというか…やんごとなき御身分の方々での」

なんとなく校長が言いたいことがわかる気がする。

「相手国の主要人物にはこちらの国王を通して謝罪とそれなりの駄賃を払っておるが、お前さん達があんまり外で騒ぎ立てると、ワシ等や相手国の転覆を企むテロリストに目を付けられる恐れがある」

なんと国家レベルの問題ですか…

「どうしてですか？入れ替わった人達も今は元通りなんでしょ？」

当然のようなフレームの質問に校長は首を振って応える。

「確かに入れ替わった王女様方はこれまで通り過ごしておられる。しかもこの事実を知る者は上層部のごく一部の者だけじゃ…」

しかし人の口に戸は立てられん。下手を打てば上層部そのものがクーデターを起こさんと制限らぬ。それほどのことをユメルは向こうでしてかしおったんじゃよ」

大きく溜め息を吐く校長は、初めて会った時より二十は老けて見えた。

「今でもユメルは入れ替わった者達と繋がりを持っていると考えられてしまうのが妥当じゃ。事実として本人はまた何処かの誰かと入れ替わってしまい、こうしてここにお前さんがおる訳だし…」

先ほどのチンピラ共はミリユードの妹にしか目がいつてなかったようじゃが…」

ちらりとフラメを一瞥する校長。親馬鹿以外の面は結構実直な性格かもしれない。

フラメは俺を巻き込んだことでバツが悪そうに、しかし研究所副所長の妹としてしか見られていない視線に対して、フンツと反抗的な態度で応戦する。

校長はそんな彼女をまるで意に介さず俺に向き直る。

「今度はお前さんが王女の人質代わりに狙われるやもしれん。

兎にも角にも学校内では程々に、外ならばくれぐれも揉め事を起こさぬようにな」

話は全て終わったと言う顔で、校長は部屋の扉を開いた。

「そうそう一応ライトからの報告じゃが、ハック・ディノフィンガ―君ともう一人の黒い少年、名前をなんと叫びたかの？確かゼス君も一命を取り留めたとのことじゃ」

校長の締め言葉の言葉を待つてましたとばかりに、またしてもフラメ母の悲鳴が屋敷中に響き渡った。

当人には悪いが俺はまたかと思つてしまふ。
双子も同じ人ばかり狙つて良く飽きないな。

「…あんのちびクソ魔霊！今度という今度は灰にしてやる！！」

いきり立つフラメとは対称的に、校長はのほほんとした雰囲気に戻った。

「そういえばココは巷で有名であつたオツペンハイムの屋敷じゃつたな。最近とんと噂話を聞かなくなつたのはインディソフィア家が買い取つたせいか。」

どれ、ユメルちゃんが厄介事に首を突っ込んで大事にせぬ内に、ワシも協力しようかの」

「別に私がトラブルメイカーな訳じゃなくて…」

何を言つても言い訳にしかないな。

19 校長のネゴシエーション

「今度は逃げないぞ！」

「たとえば…ファイアドラゴンを呼び出せる化物が相手でも」

俺達が再び向かった厨房では、双子が倒れたフラメの母に乗っかるように浮いていた。

双子の魔霊の男の子の方、スウはなんとか威勢よさを保っているが、女の子のシィはガクガク震えて今にも泣きだしそうだ。

「良い根性してるじゃない！でもアタシの前に姿を現したのが運の尽き。どうせ家の中だからあんまり大きなドラゴンを召喚出来ないだとか“ただの炎”ならダメージを受けないなんてタカを括ってるんでしょうけど…」

フラメが指輪を頭上に掲げ、もう片方の腕を添えて目を閉じる。
指輪から放射状に光が溢れだす。

「皆目を閉じてなさい。直視すると網膜が焼き付いて失明する…太陽の比じゃないから」

彼女から発せられる尋常でない威圧感に、双子だけでなく俺も戦慄する。

「ほう、超々高温のエネルギー体を持って、位相の違う存在であるうと構わず焼き尽くすか。流石はミリューの妹。いや、このままいけば彼女を凌駕しかねん才能じゃが…」

ただ一人悠然とした態度を崩さない校長が無造作な足取りでフレームに近寄り、触れなくとも近づくだけで物が蒸発させんばかりに輝く彼女のルビーに手を添えた。

直ぐにジュツと肉の焦げた臭いと黒い煙が鼻と目を突くが、校長の腕はその存在を消失させる事無く、反対に指輪の光と同調するよう強く発光してゆく。

「っ！！何すんの！？アタシの指輪に触れる者はたとえ校長だろうと灰にするわよ！」

気が立っている猫のように鋭い目つきで睨み付けるフラメをもともせず、校長の言葉が全員の耳に響く。

「あそこに具現化しておる魔霊を消滅させたところで本体をどうにかせん限り意味は無い。お主もそれは分かっておろう？ここはワシに任せておけ」

「アタシのお母様が何度もこんな目に逢ってるのに、何もしないで見てるって言うの？」

当前といった顔で猛るフラメ。

予想通りといった表情の校長。

「それはお主の都合じゃろつて。

ワシはよく知らんが、お主の母親はそこらのイタズラ小僧と変わらぬの魔霊の行動に対して、今まで恨み言なんぞこぼしたか？

しかもそれほど大切に想う母を盾にした双子を前にして、その魔法を放った結果どうなるか分からん程お主は馬鹿ではあるまい」

位相空間にまで届く魔法を近距離で放てば母親もタダでは済まな

い事など、彼女自身重々承知しているだろう。しかし面と向かつて他人に言われた正論に素直に従うことの出来る子供などそういない。だがフラメはそこらの子供ともまた違うことは俺もわかっている。あっさり魔法を解除したフラメは、これまたあっさりした口調で校長に軽く噛み付く。

「じゃあアンタに何が出来るの？」

「ワシは皆を納得いく結末まで導くナビゲーターに過ぎん。行動するのはお主等じゃ」

フラメの脅しとそれを宥める校長の関係が絶妙に効いている。

彼女の攻撃を止めたという事実が、双子が僅かばかりでも校長を頼るきつかけとして機能しているようだ。

やる気満々のスウ、怖がっていたシイが幾分落ち着きを取り戻して校長と対話を望むようになった。

「なんだよじいさん…良い感じな言葉を並べて僕達を追い出そうっていうんじゃないよな？」

「貴方様ならうまく折り合いをつけて下さると言っのですか？」

フラメと校長は半分本気だったろうが、もう半分は狙ってこの状況を作ろうとしたのだらうと俺には思えた。

フラメ自身はまだ優秀な姉の妹でしかないが、そうやってはつきりモノを言う実直な性格の校長が、同じ口で確かに姉を評価してくれているし、フラメの将来も予見している。

上っ面ほど険悪な仲ではなさそうだ。

思惑通り校長の交渉が始まる。

「いやいや、オツペンハイム様もその研究成果もワシが若かりし頃からよく存じておるし、今でも尊敬しておるよ」

「ホントに!？」

「オツペ様を覚えていて下さる方がまだこの世に残っていたなんて」

シィは感激のあまり、別の意味で泣きだしてしまった。

「オツペンハイム様が言っておった『世界中の全ての人が平等を超えて公平な形で魔法を行使出来る社会』良い言葉じゃ。

なればこそ、お前さん方がいつまでもココに留まっておっては新たに生まれる命の足枷にしかならん。公平な社会を乱す原因になり得る。

実際この屋敷は“恐怖(?)の魔霊スポット”として長年あまりよくない噂が広まり近寄り難くなっておる」

「でも…後継者を見つけるまで僕達はこの場所を守らないといけないんです」

ついに敬語を用いるようになった血気盛んな男の子のスウが、それでも譲れない一線を引いた。

「なら最適の人材がおる」

そう言って校長は、俺の両肩を支えて引き合いに出した。

「私…ですか?でも彼らは資格がどうとか」

「ミリユードの妹はこの通り、双子との関係がギクシヤクしてお互いに認め合えんじやろう。ワシは後継者というには少し歳を取り過ぎてしまった。うまく事を収めるにはお前さんしかおらんのだじゃ。勿論資質は備えておるから安心せい。ワシが言うんじやから間違いない。」

この屋敷の最深部、恐らくオツペ様の遺言の場所まで到達出来ればそれで証明されるんじやろ？」

前半は俺に小声で、後半は少し大きめの声でダメ押しの確認をするように双子へと語りかける校長。

伊達に校長やっていない、いや年の功というべきか。双方の首を縦に振らせる納得の交渉術。

「まあ…そのとおりです」

魔霊達も同意せざるをえない。

「僕達（私たち）の猛攻を掻い潜り」

今猛攻って言った？

「千にも及ぶ超有能なマジックアイテムの数々に魅了され魂を抜かれることなく」

超有能？四次元巾着は一応貰っちゃったけど魂は抜かれてないと思っし、実質役に立つ物は皆無というか……。

「オツペ様の魂まで到達出来た者には」

「この屋敷の全てと、世界最強の魔道具を受け継ぐ資格がある」

世界最強も大層大味な意味なんだろうと容易に想像がつく。
文言は終わったが双子の言葉は少しだけ続いた。

「入り口は見つけられちゃったから後ほんの少しです…私達の為に
も是非辿り着いてください」

「場所はシィが教えたようなもんだけどね…」

そう言い残して、双子の魔霊は自らその姿を消した。

「後はお前さん次第じゃ。さっき渡したモノクルが役に立つかもし
れん」

「結局全部責任を押し付けられた気がする」

“一応最強”の魔道具とやりに興味が無いことも無いが、フラメ
やその両親の為に途中で挫折する事は許されない。

「何、ユメルちゃんなら大丈夫じゃよ。なんたってワシの可愛い
人娘なん」

「校長！探しましたよ！」

校長の言葉に割り込むように突然現われたライトさん。

俺とフラメは別々に驚きを露にする。

校長は渋い顔をしてそっぽを向いている。

「一度も入った事無い人様の家にまで転移してくるなんて、凄いや
ど無茶苦茶だし非常識よ！」

「可愛いお嬢さん方のいるところなら、ダンリブの処刑場だろうと
エリ又エの聖地だろうと俺は飛んでゆくのださ」

「今回はじじいのいるところでしょうが…」

もういいわ、アタシはお母さんを連れて行くから。ユメル、全部
終わったらアタシの部屋に来なさい」

校長が話している間静かにしていたフラメだが、家族の問題だっ
たのに自分が介入出来なくなり、色々と面倒臭く嫌になったのだろ
う。

母親をおんぶするように抱えて寝室まで行ってしまった。

いやじゃいやじゃユメルちゃんと一緒にお泊りしたいんじゃ仕事
なんか後でどうにでもなるじゃろ・・・などと嘆きを残して、校長
はライトさんに連れ去られるように転移しその姿を消した。

静かになった厨房に取り残される俺。

…行くか温泉、リベンジだ。

19 校長のネゴシエーション（後書き）

双子の魔霊の話はこれで終わりにしたかったんですが、少し長くなりそうだったので分割しました。

20 長くて短くなった遺言

二度目の地下温泉へ一人で向かった俺。

今回は裸足にこそなったが、フリフリが邪魔で恥ずかしい服は着たまま（フリフリだろうとなんだだろうと裸になるよりはマシだ）風の結界でお湯と湯気を全部吹き飛ばして足場を作りながら歩いた。

目的地の双子像まではほんの数分で辿り着いた。

先ほどの双子とのやりとりの後でも、石像や湯船に変わった様子は無い。

「やっぱり…特におかしなところは見つけれないんだよなあ」

校長の言葉通りモノクルを掛けてみようとポケットを弄る。

フリフリなスカートの癖に妙にポケットがたくさんくっ付いていて機能性高いのがまた癪に触る。

何番目かのポケットを探つてようやく発見したモノクルは、チェーンなどが一切付属しておらず、円形のレンズにちよつとした取っ掛かりがあるだけのシンプルな構造で、顔の造形が深い大人の外人くらいでないと常時装着は難しそうだ。

風の魔法ですつと目線に固定するという力技もあるが、今回は虫眼鏡を使う時のように片手でモノクルを持って石像を眺めた。

「おおおお…って何にも視えないじゃん！むしろ真つ暗闇だし！」

透明なはずのレンズを通して見ると、どういう仕組みだか視界が閉ざされてしまう。

もしかして普段目に映らないものだけが見えるようになるのか…そう思って念入りに温泉や石像を見渡しても、暗闇からは何の反

応も期待できない。

「なんだよこれ壊れてるんじゃない？」

体の熱が奪われるかの如く俺の魔力がレンズに吸収、凝縮されていくような感覚に寒気を覚えた。

急いでモノクルを目から離してみたら、透明だったはずのレンズに漆黒の淀みが発生していた。

淀みはレンズの傾きに従って蕩けるように流れ出し、風の結界によって湯が飛ばされ剥き出しになっている地面へボタリと落ちた。

擬音語で表現するなら“ゾワツ”という薄気味悪いものだったであろう、黒い淀みとなった魔力の塊が急激に拡散した。

一瞬の沈黙を伴った後、大浴場の隅々にまで俺の魔力を浸透させられたお湯が最初は小刻みに、次第に大きな揺れを伴い、大小様々な大きさの雫となって空中に浮かびあがっていく。

雨天の空がそのまま時を止めてしまったかのように、3次元的な雨模様を描き出した水滴は、今度は俺から50メートル程離れた所で1分程の時間をかけて一箇所に寄り集まり、巨大な水球を作りあげた。

「…新種の宝石みたい」

かつて美術の成績を常に“アヒル”と評価され続けてきた俺でも感嘆の声を上げたくなくなるくらい（まあ創る事と観る事は違うのだろうが）、神秘的な美さを放つ完璧な球となったお湯の塊は、直径で30メートルは下らないだろう、その全てがH2Oという巨大質量だ。

大浴場の反対側まで見通せそうなくらい澄んだお湯が、フレームも

知らない浴室の謎の明かりを浴びて七色に輝く。

空間が歪んでいるのか、地面が不自然に凹んで水球に場所を譲っている。そうでもしないと、大浴場といえどあの大きさの球体には狭すぎるのだろうか。

俺は“美”そのものを体現したかのような佇まいの水球に見入っていると、何処から混じったのか、水の反射や屈折のせいもあって確かではないが、出来あがった水球の中心に異物が浮かんでいるのを見つけた。

「あれは…シィとスウ、双子の魔霊の」

振り返ってみると、いつの間にか2体の石像は地面から綺麗にもげてその身を水球へと移していた。

意図的に取り込まれたのか…むしろ石造自身が核となってお湯を取り込んだのか？

「我が後継の資格に辿り着きし者よ。最後の試練を見事乗り越えてみせよ」

男性がエコーを掛けまくったような声が聞こえたので水球へ振り返り直ると、石像が大量の気泡を発生させて、透けるほど透明だった水球を白く濁らせていた。

「アレを壊せばいいの？」

「左様なり。」

私が創り上げた最強の魔装“パーフェクトエレメンタルスフィア”を打ち破った者には、私自身の魔道具と共にソレを与える」

故オツペンハイム本人のものだと思われる朗々とした音声を聞き流しながら、俺は両手を握り、その中で空気をギリギリまで圧縮して溜めこんでいた。

『ちなみにこの場では水しか吸収していないが、環境に制限されずありとあらゆる物質を取り込むことで無限の可能性を持ち合わせ、半永久機関として無限のエネルギーを生み出しつつ、無限の攻撃手段を持って局地戦においては最強の存在規定魔法“エリヌエ”を超え得る無敵の存在となるだろう』

最強とか無限とか使い過ぎてとてつもなく胡散臭い。

『その気になれば、かつて世界を二分したとされる“万能の人”が用いた古代魔法を再現することも決して不可能ではないことを補足しておく。

……ちなみに現世最強とされる攻撃魔法が今の新世界の名前と同じことについての考察とし』

「……話長いよ」

ものの数秒で今の自分の限界まで魔力と空気を正露丸くらいの大きさまで圧縮し切った俺。

長々と講釈をたれるオツペンハイムに少々呆れながら、それが途中でも構うことなく両手の魔法を放った。

極限まで圧縮された2つの風の小球は何百倍、何千倍もの大きさを誇る水球に対して、俺という名のエアガンで打ち出されて飛んでいった。

そして吸い込まれるように食い込み、お湯を引き裂いて水球に大

穴を開けつつ中へ中へと侵入する。

『つまりこの世界は…であるからして…の人間が作…で…か…』

風球が水球の中心に近づいた分だけ、オツペンハイムの声が掠れ、薄れてゆく。

「ここまでしても全力で喋り続けるのか…攻撃はして来ないのかな？」

たっぷり一分はこの状態が続いただろうか。

ゆったりとした速度で、しかし着実に風球が水球の中心部、双子の石像に辿り着くまで、オツペンハイムが話を止めることは無く、また何らかの攻撃が俺に届くことも無かった。

「…弾ける」

もうほとんどヤル気を失ってダレている俺の眩きに応え、二つの風球はそれぞれが二体の石像に触れた状態から破裂した。

水球内での大爆発は、俺の耳になんの刺激も与えなかった。

これは流石というべきか、水球は大爆発の直後も一瞬とはいえその球体を保持していたことで、外部へ爆発音が漏れずに済んだのだろう。

水球は少しづつではあるが確実にその形を崩し、粉々になった石像と共に湯船へと帰っていく。

「これで…終わり？」

呆気無いにも程があるけど、数々のユニークなマジックアイテムや、あの双子の大した健闘っぷりを見てきた後なので、こんなものかと思う事にした。

好意的に解釈するならば、オツペンハイムという人は魔法を純粹な攻撃用途として使うことを忌み嫌ったのだろう。

その結果が常人には理解し難い成果を生み出したとしても仕方ない。

それでも、もう少し魔法が日常生活に利用されているような世の中だったなら…

どちらにせよ、天才が考える事なんて俺には理解できない。理解できないのだから、天才なんてものに出会ったことは一度も無いと言っておしまいだ…。

“僕達を解放してくれてありがとう”

“貴方の神がその手を離しませんように祈っています”

.....

「……それで、オツペンハイムの魔道具は？」

何事も無かったかのようにフレームの部屋に戻って来た俺を、彼女は半分は俺が無事でホッとした様子、もう半分は例の“最強の魔道具”への興味関心で迎えた。

「それがね…ちょっとやり過ぎちゃったみたいで」

俺は恭しくポケットをまさぐり、ソレを掴んだ両手を突き出した。右の掌にはビー玉くらいの透明な球…であったと思われるガラスの欠片がいくつかのっている。

左手には、平和な日本で暮らしていて現物を見たことも無い俺が想像する“拳銃”のような武器が、銃身から真っ二つに裂けて無残な姿を晒していた。

「大浴場が入口でもあり器にもなっていて、流れるお湯がオツペの魂の在処そのものだったんだ。

お湯を吹き飛ばしたり蒸発させるんじゃないくて、魔力をお湯全体に親和させる事が鍵だったみたい。

そして双子の石像には、魔道具と最強の兵器（笑）が隠されてたんだ」

「そう…アタシ達が石像に隠された魔道具を見つけられなかったのは、双子の魔霊そのものが結界にでもなっていたのかしら？それとも長年放置されてきたせいで、魔力の残滓さえ全く残っていなかったか」

「どちらにしろ、ちょっとした戦いになった時に私が張り切り過ぎて」

石像もろとも修復不可能なまでに破壊し尽くしてしまった訳だが

…。

「そりゃあ残念だけど、アンタの魔法で壊れるくらいだから大した最強じゃなかったんじゃない？」

「…そういうことにしておいてもらえると助かります」

正直双子の魔霊にも悪い事をしてしまったと思う。

ここに姿を見せないってことは、最初の予測通りあの石像か魔道具が依り代だったのだろう。

俺がくしゃくしゃにしてポケットに捻じ込んでいる菜と同じような存在だったのだから、形は違えど1つ（双子だから正確には二つ）の命をこの手で奪ってしまったことになる。

蚊を一匹潰すより人間一人を殺す感覚に近いものを再認識したことで、俺は今更ながら殺人という名の罪悪感が重くのしかかって来るのを感じた。

「フラメ様。お母様が目を覚ましましたよ」

「せっかくだから皆でお風呂に入り直そうってさ」

双子の魔霊が俺達を呼ぶために壁をすり抜けてきた。

…アレ？

「ええそうね。」

ユメル。“アタシ達”の為にここまで頑張ってくれてありがとう。お陰で一応コイツ等とは和解できたし、お母様も子供がいつぺんに3人も増えたみたいで嬉しいって言ってるわ。もちろんアンタを含めてね。

これからはいつでも家に遊びに来ていいからね。魔霊と家族全員で歓迎するわ」

…結果オーライと思うことにしよう。

この後俺にはフラメの家族（+魔霊のシィとスウ）と一緒に三日目の温泉に入るといふ、本当の地獄が待ち構えていた。

さらにフリフリの服とはまた別に程々透け透けピンクのネグリジエを着せられ、フラメと同じベッドに入り遅くまで女の子同士の会話を堪能させられて…。

おかげでこの体での日常生活にはすっかり馴染んでしまった訳だが。

…俺はこれでよかったんだろうか？

朝目が覚めたら全てが夢でした、なんてことになったら逆に困るんだろうな。

入れ替わりという形で異世界に迷い込んだ今日この日は、俺にとって忘れたくても忘れられない、人生で一番長い1日となった。

20 長くて短くなった遺言（後書き）

一 区切りです。

幕間：妹から見た舞台裏

“最近のお兄ちゃんはなんか変だ”

まず大学の講義に遅刻、欠席したり、代筆を頼むといったことが全く無くなった。

お兄ちゃんの通っている大学へは自宅から電車を介して最低でも1時間は掛かる。

でも毎朝朝食の支度をしてきているお母さんからすれば今まで以上に『遅刻しないはずは無い』時間まで家に居座ってるらしい。

例えばお兄ちゃんが取ってる講義が午前9時に始まる1限からの日だったら、私が自転車で10分の高校（もちろん近いから選んだ）へ行く為に家を出る8時15分頃にのっそり起きて「行ってらっしゃい」と一声掛けてくれる。その後は優雅に朝食を楽しみつつ、5分になってようやく「行ってきます！」の音が聞けるくらいだと言う。

そして帰りは遅い。皆が寝静まって日付が代わるかどうか、静かに玄関のドアを開ける残業パパ状態。一般的なサラリーマンしてるお父さんも含め、お兄ちゃんの帰宅に気がつく人はいない。

健全？な大学生なら多少の夜遊びはありだろうけど、土日も含めてこの1ヶ月それが毎日続いている。

お兄ちゃんは大学入学後、自宅近くのスーパーにパートタイマーで勤める母親の紹介で週3日程バイトをしている。

昔は時間が合えばお母さんと仲良く廃棄同然の品を抱えて帰ることもあったのに、最近の仕事が終わると何処へと姿を消してしまう。仕事振りは依然と変わらないが『どうやったらこの品出しをこれほどの短時間で終わらせてしまうのか？』と店長が不思議に思う場

面が度々あるようだ。

お兄ちゃんは相変わらず大学のサークル等には所属していない。同じ大学に通っていて、幼稚園時代からの幼馴染（男）に訊いたところ、ちよつと前までは月一で呑み（年齢詐称気味）に行ったり合コンごっこをしたが、ここ最近は一緒の講義を受けてても、気が付くといつの間にか行方を眩ましているようだ。

一番驚いたのは、何でもそこそこ器用貧乏、良くも悪くも良い人で終わりそうなお兄ちゃんが突然“目立つ”ようになったことだ。全く面識の無い相手も含め、学内で異性に告白逆ナンされること十数回（何故か学外ではその手の噂を全く聞かない）。

教師に対し鋭い指摘、質問を浴びせて教室を白けさせつつも、皆の冷たい（一部は熱烈かつ畏敬の念を含んだ）視線に全く動じず、高慢を超えて冗談皮肉本気交じりに天才と揶揄され、今では教師の方から頼まれて分かり難い講義内容では注釈を加えながら解説者になっている、と思えばいつの間にか姿が見えなくなっていたり。

ここまでが、私が独自のルートを使って調べあげた情報の全てだ。

.....

「アレは絶対お兄ちゃんじゃない…きつと別の誰かに体に乗っ取られてるんだよ」

時刻は放課後、学生が帰宅や遊びに駅前を闊歩するある種のゴ-

ルデンタイム。

首都近辺なら1キロも歩けば1軒は見つかるであろう某ハンバーガーショップで、田中^{たなか}利恵は長い長い一息で話を終え、中身のほとんど無くなったシェイクの残りカスをズズズと聞く人によっては不快効果音を立てて啜る。

「利恵はSFとかファンタジー小説に浸かり過ぎだよ。」

確かに最近の利樹^{としき}さんは、ちよろつと見かけた感じ芸能人みたいにキラキラしてて存在感増し増しオーラ放ってたけど…彼女でも出来たんじゃない？

利恵も見習ってもうちよつとラブコメとか女の子的な本を読めばいいと思う」

向かいの席に座って利恵の“お兄ちゃんの体に乗っ取られた”話を冗談半分ながらも真摯に聞いているのは、同じ高校に通い小学校からの親友である友美^{ともみ}。こちらはSサイズのフライドポテトを小さな口でちびちび齧っている。

「恋人が出来たくらいでいきなり天才になれるものなの？」

「利恵が前に言ってたじゃん『ウチのお兄ちゃんは努力すれば必ず天才になれる逸材なのに勿体無い！』って。」

努力して成れるのは秀才までだよって、アタシはその時突っ込みたかったんだけどね。」

恋すればそんなくらい自分磨きに拍車がかかる人もいるものよ」

「そんなものかなあ…？」

利恵は今まで恋愛という感情に心動かされた事が無かったので、恋をすると何がそんなに変われるものなのかわからない。反論が出

来ない。

友美が畳掛けるようにポテトを消化しながら言う。

「利恵は心がお子様なんだよ。今アンタの目の前に“白馬に乗った王子様”がやってきても、馬ごと蹴飛ばしそうな面してるもの。」

「今でも私服なら堂々とハッピーセット頼めるお子様ランチ体型、“童顔すっぴん美少女”（要するにロリ）の称号を持つアンタに言っても意味無いけどね」

利恵が笑う友人を冗談交じりに睨みつけてやると、友美はゴメンと掌を合わせつつも笑いを大きくした。

確かに利恵は同じ年の友美と比べて頭半分以上小さい。具体的に言うとなんて身長は150センチにかなり届いておらず、胸も…

「私のことはどうでもいいの。そんなことより」

「そんなことよりこの辺で起きてる『美少女連続殺人事件』やばくない？死体が発見された数だけでも既に10件を超えたらしいわよ。もう一ヶ月も経つのに犯人も捕まってるみたいだし、どっかの雑誌では犯人は魔物だとか怪物だとかで、それっぽい黒い影の写真相も載ってるよ」

その話は最近ニュースですつと取り上げられていたので利恵もそこそこ知っていた。

彼女達が住んでいるのは首都近辺とはいえ、話題性の少ないこの街ではそういった危険な香りのするニュースは（本当に不謹慎な事に）喜ばれ、駅前などでは特にその関連の取材をしているマスコミを度々見かけられるようになった。

「正確には連続変死体遺棄事件よ。」

被害者全員が外傷全く無いのに内出血による圧迫死。凶器はもちろん不明。

化物でなかったとしたら、超能力でも使ったのかしら？」

「ちなみに殺されたのは小学校中高学年から中学1年生の少女達。そんなうら若い子の血管が、外傷残らない程弱い衝撃で圧迫死する量の内出血するなんて考えられないから恐らく殺人。襲われた形跡も無いが死体は全て屋外の人目に付かない場所に捨ててあった。利恵も気をつけないとね」

そう、狙われるのは幼い少女。それも被害者の写真としてテレビ画面に映されるその顔は、まだ子供の癖に全員に美を付けても文句が出ない粒ぞろい。

「なんで私が気をつけなきゃいけないのよ？もう直ぐ友美と同じ18歳。受検勉強真つ盛りなはずだけど…そんなに私小さいんだったら、明日から友美に勉強教えてあげられないな」

「マジでゴメン！アンタがいないと恐くて模試すら受けられないよ」
今度は本気で手を合わせて利恵を拝み倒し謝りつつ、それでも笑いを堪えきれない友美に、二つの意味で不謹慎だよと咎める利恵。

「でも…そういうばさ、アンタが『お兄ちゃんが変わった』って言い始めた時期と被らない？その殺人事件」

「……」

「気になるなら、直接訊いてみればいいじゃない」

「…なんて訊くのよ？」貴方はドコの誰ですか？もしかして今噂の連続殺人犯ですか？」つてど直球に？」

友美とはハンバーガーショップを出て直ぐ別れ、独り自宅への帰路を歩く利恵。

「またも笑いながら、でも本気で「送っていかうか？」と心配されたが、少し一人で考えたいからと断った。

それに小さい頃兄と一緒に遊びに通った廃寺で我流の護身術を教えている変なおじさんから無茶苦茶な教えを受けたせいもあって、大の男数人程度は一人で裁ける自信があった。

「そつえば、あの頃もだつたつけ」

利恵が他人の前で、兄の利樹を持ち上げる理由。

なんでも呑み込みが早かった利樹は、「なんちゃって護身術」の体得に置いても抜きん出た才能を見せた。

1週間で師匠のおじさん（名前は終ぞ教えてくれなかった）を完膚無きまでに負かしてしまった兄。

その後も利恵が一人で身を守る（と思われるくらい）まで優しく手ほどきをしてくれた。

何事も器用にこなし、けれど何に対しても情熱が薄い兄。

学校のテストや運動でも目立つことはなく“平凡”の二文字に嵌まっていた兄。

それをなんとなく口惜しそうに見守っていた自分をふと思い出した。

“友美の言うとおり、大多数の他人から見ればホンの僅かな努力で秀才になれる力をお兄ちゃんもっているのに…”

利恵が思考の渦から脱却してみると、一定の間隔を保ったまま自分の後をつけてくる気配に気が付く。

“ ストーカー？それとも例の…”

しかし彼女の歩調は乱れない。否、乱さないように気を使って歩く。

気付かれる尾行なんて尾行じゃない。大した相手でもないだろう。そう判断してしばらく何も気づかない振りをしてながら歩き続けたが、中々向こうからのアクションが無い。

“ もう直ぐ家に着いちゃう…面倒事はなるべく外で片づけたいな”

終わりの無い中途半端な尾行に痺れを切らしていたが、丁度良く人気の無い路地裏が見えたので利恵自ら入り込み、十分に距離を取ってから振り返り相手の出方を待った。

尾行者も利恵が待ち構えていることに気付いたようで、戸惑うような一瞬の間を空けて姿を表した。

「お嬢さん……魔法って信じる？」

初対面の挨拶にしては突飛な質問だ。

薄暗い場所で黒いシルエツトからは、中肉中背の男だという程度の推測しか出来ない。

「この世に今現在人間が理解出来ない事象、解明出来ない現象が確かにあることは認めます」

利恵がほとんど間を置かずに応答したのは彼女にとって予定調和だったからか。読書のジャンルがフィクションに偏っている彼女には答えやすい問いだったのかもしれない。

人気の無い1本道に立ちほだかる一人分の影は利樹と同じ背格好で、黒の帽子、サングラス、マスク、手袋、全身を覆うようなマント。

声色を意図的に変えていて兄かどうかの判別は出来ない。

「私も貴方に訊きたい事があります」

「ほう…怖気づかず我が問いに応え、且つ試すか」

「貴方はドコの誰ですか？もしかして連続殺人犯ですか？」

凶器になりそうな物は持っていないが、こちらの問いに対しケタと不快な笑いで返答する不審人物。

利恵はかつて教わった通り全身の余分な力を抜き、頭だけを高速で回転させる。

メディアでは顔写真等は取り上げられていないし、そもそも目撃証言がほとんど無い（化物の画像は除く）から断定は出来ないが、コイツが連続殺人犯だとしたら…

「前半の問い、我が名乗ったところでお嬢さんに理解する術は無いが」

「…」

利恵は肩に掛けていたスクールバッグを静かに地面に置いて、重心を左右均等に落ち着けた。

「恐らく後半は…当たりだ!!」

不審者は片手を突き出しながら何かを叫んだ。

利恵が嫌な予感から逃げるように片足に重心を傾け軽く脇へ避けると、数秒前彼女の内臓があつた空間が微かに震え、歪んだ。

「カマイタチ？あれで小さな子供達を中身だけ傷つけたの？」

少女にあつさり攻撃を避けられたことで驚きを隠せない男。

「…その通り。お嬢さんやりますな。こんな平和ボケした世界にいて私の超狭範囲魔法を紙一重で躲すだけでなく、初見で原理を把握するとは」

再びカマイタチを放とうというのか、腕を胸に引き寄せるようにして構える男を利恵は冷めた目で見つめる。

魔法なんて大仰な単語を呟いていたが大した技ではない。相手の目線と腕さえ見逃さなければ、発生に1秒以上かかるカマイタチなんて誰にだって避けられる。

アレで被害者の内部だけを引き裂いていたのだから、男の腕から直線的に飛んでくる攻撃ではなく、あくまで一定の狭い空間のみに影響が有ると思つていい。

それでも、自ら誘いこんでしまった狭い路地裏では無傷で避け続けるのは疲れる…。

“護身術の真髄は、常に後手であるということ”

利恵は不審者目掛けて突進する。

いたいけな少女が、何の迷いも無く一直線に向かってくる。

“4手で決められれば上出来だ”

「お嬢さん…恐くないのか？」

全く予想できなかった光景。

急な攻勢に入った利恵を見て慌てた様子の男。

“最低限身を守るのは当然。逃げるにせよ戦うにせよ、先手の動作を一見で読み、次の手の呼吸を乱し一瞬の隙を突く”

中途半端な体勢のままカマイタチを放とうとする男に対し、利恵は更に加速して前進、拳の届く間合いまで一気に距離を詰める。

“勝つ為に余計な動作は要らない。技は一つ、決めるのは一発だけでいい”

突進の勢いを殺さず腕を介し、心臓マッサージする時のように両の掌を重ね、それを男の鳩尾へ叩きこむ。

“掌底一線”

彼女の運動エネルギー全てが乗った一撃が掌の半分程、表面積約10平方センチ中、コンマ1秒に満たない時間で一部の無駄も無く伝わった結果、男はその場でうめき声を上げる事無くバツタリと倒れた。

利恵は仰向けで痙攣する男のサングラスとマスクを剥ぎ取った。

「…これ誰？」

- - - - -

今日は珍しくお兄ちゃんの帰りが早かった。

夕食と一緒に食べるくらいに。

今日の事も含めて、まるで私の事を待ってるみたい…。

すっかり就寝の準備を済ませて、ちょっとだけ気合を入れ直してから、目的の部屋のドアを叩く。

「お兄ちゃんいる？」

「利恵か？開いてるよ」

遠慮無くドアを開け、そういえば久しぶりだなあと思いながらお兄ちゃんの部屋に入る。

「う…猫を抱えてくるのは止めてくれ」

小学校入学の時に買って貰った勉強机の椅子每こちらを振り返って猫を凝視し、体を硬くするお兄ちゃん。

「どうして？シヤムオンはお兄ちゃんが拾って名前を付けたんだよ。今更嫌いになった？」

怒ったように怯えた顔から苦い顔に変わるお兄ちゃん。

きつかけは掴んだとばかりにしたり顔をしたら私は、抱いていた家猫のシャムオンを放した。

愛くるしい我が家の一員は空気を読んだつもりか、一度だけ私に体を擦りつけてから静かに部屋を出て行った。

「…今日お前が遭遇した不審者の件も含めて、俺の方からも話をしようと思っただとところだ」

「へえ、見てたんだ…それで貴方は一体誰なの？まさか恋患いしてそこまで変わったなんて言わないよね？」

お兄ちゃん表情からは、猫が嫌で仕方ないという感情以外は読みとれない。

「利恵は感が良いから、今の俺に薄々疑問を感じてた事は気付いてたんだが…正直なところ、話すに値するか迷ってた」

「なんで？」

「巻き込んでしまおうと思ったから」

「連続殺人に？」

「それだけじゃない…どちらにしろ巻き込んでしまった訳だし、今日この目で利恵の実力を確かめて大丈夫だと確信した」

勿論危なかったら助けに入るつもりだったと、苦笑いするお兄ちゃんからは確かな違和感がある。

…一緒に習ったよね？なんちゃって護身術。

私にとってさっきのお兄ちゃんの言い方は、まるで自分の記憶が

単なる情報でしかないと言ってるように聞こえた。

「中身はお兄ちゃんじゃないのに優しいんだね」

私がそう言うと、彼は自重するように笑みを消して無表情になった。

そしてパチンと指をならすと、何も無いはずの空間から私が数時間前に気絶させた不審者が出現、音を立てて床に倒れ伏した。

「……本物の利樹を助けに行く気はあるかい？」

「結局ソイツは誰なの？お兄ちゃんが危ない目にあってるの!？」

彼がさも当然のように魔法？を使った事にも驚いたけど、それ以上に私の本当のお兄ちゃんが何やら良くない状況にあることが気にかかった。

「コイツにちよつと訊いて分かったんだが、この連続殺人犯は俺：いや私を狙ったものだったらしい。だがあつちからこつちへ渡る際に狂ってしまったようで、本来の目的からずれて暴走したようだ」

分からない事が多すぎて私が？マークを浮かべているのに気付いた彼が、またも苦笑する。

「ごめんごめん、根本的な事を言ってなかったね。」

簡単に説明するなら、私はこの世界とは違う世界“エリヌエ”と呼ばれている所から、君のお兄さんである利樹と意識だけを交換してここにいるんだ。

そっちは魔法：こつちの世界だと超能力と定義されているものに近いか、儀礼的な制約がほとんど無いから。そんな別の力が物理

法則に食い込んでいて、このカマイタチ野郎みたいに全ての人間が何かしら特殊な力を持っている」

「…正にファンタジーね」

正直なところ、そういったお話が大好きな私でも敷居が高いと思っただ。

まだお兄ちゃんの気が狂ったと思う方が現実味がある。

「利恵、君の選択肢は大きく分けて二つある。

こつちの世界では、これからも私を狙って刺客が送られてくるだろう。こうして接触した以上、今後は君が積極的に迎え撃たなければならぬ。無意味な犠牲者を増やさない為にも…」

「…もう一つは？」

「君が向こうの世界に渡ってホントのお兄さんを守りつつ、刺客を放つ元凶をどうにかする」

多少腕に自信があるとはいえ、受検を控えた普通の女子高生の私がそんなことを？」

「ギエス…私の使い魔とも定期連絡が取れなくなっている今、向こうもそれなりに面倒な状況に陥ってるはず。

こうして私の精神が狙われたんだ。あちらの私の体に入った利樹も無事に済んではないだろう」

「…貴方はどうすの？」

「君が選択しなかった方の役割を果たすだけさ。」

コイツの魔法を辿れば、今度は意識だけじゃなく身体ごとエリ又エリに行けるだろう…こんな風に精神を病まないという保証は無いが」

そう言っつて連続殺人犯を蹴飛ばす彼。

僅かにうめき声を上げる男。

「ああ、こんなはずじゃなかったのになあ」

じゃあどんなはずだったんだらうか？

心底面倒臭そうに言っつ彼が、なんだかとても儂げだった。

「急ぐことは無い、コイツをもつと調べなきゃいけないから、結論は明日の夕方頃出してくれればいい」

そう言っつて部屋を追い出された私は、自分の部屋に籠つて眠れない夜を過ごしていた。

急ぐなどは言っつたけど、重大な決断の割に時間は一日分も残されていない。

理解し難いことだらけだが、どうやらこのまま平和な女子高生生活を送ることは困難なようだ。

お兄ちゃんの事はそこそこ慕っている。

私は魔法の世界に憧れている。

理由は他に要らないだらうか？

21 学校生活開始(前書き)

作者のちよつとした言い訳要素が入ってますがご勘弁を

21 学校生活開始

「それじゃ行ってくるけど、双子はお父様お母様に悪さしちゃうからね。むしろセバスさんに替わる用心棒として頑張りなさい」

「まかしといて！」

「お父様とお母様には指一本触れさせませんから」

そういう双子も魔霊だから人には触れられないと言ってしまうのは上げ足取りか。

フラメの両親に寄り添うように浮かんでいる双子は、2000年も縛られていた使命から昨日ようやく解放されたばかりだということに、もう本当の家族みたいだった。

「昨日は色々とお世話になりました。行ってきます」

俺は心をこめて深々とお辞儀する。本当に色々と……(女の子の×的な意味で)余計な事まで面倒を見てくれてありがとうと若干の皮肉も込めて。

「いいえこちらこそ、ユメルちゃんにはとても助けられたわ」

「毎日泊っていつてくれてもいいんだからね」

「遠慮します！！」

時刻は朝の8時くらい(フラメの家に据え置かれていた時計は俺のよく知る12進法だった。一秒の長さが同じかどうかは分からない

いが)。

気持ちの良い朝の陽射しを浴びながら、俺とフラメはインディソ
ファイア家を出て魔法学校へ向かった。

- - - - -

「しっかし、アンタにくっ付いてると常に何かあるわねえ。どんだけ巻き込まれ体質なのよ」

その巻き込まれ体質のせいで何度か拝見する事になっているが、これが彼女の戦闘スタイルなのだろう。フラメは命の次に大切な魔道具である指輪へと片手を添え、今にも敵に向かって走り出しそうな体勢で楽しそうに笑う。

「私だって巻き込まれたくてこうなってるんじゃないよ。それに今回ばかりはフラメちゃん家…のお姉さんの問題じゃない?」

俺は半身を引いて相手の出方を窺いつつ、自分のトラブルメイカー体質について本気で頭を悩ませていた。

二人仲良く並んで歩き出してからまだ数分しか経っていない。

俺達の目前には、かつて(といってもまだ昨日)俺とフラメを攫ったチンピラ達の生き残り(誰も死んでないけど)であるヒョロ長の青年が待ちかまえていた。

「グダグダ御託並べて余裕ぶってるつもりか? こっちはこれがあ

るんだぞ」

ヒョロ長が見せびらかすようにつまんでいる胡桃大の大きさの黒い球体は、俺が一度まんまと嵌められた後借用して有効活用し、今は四次元巾着の中で眠っている“リセットボール”。

「不味いよフラメちゃん、あれ使われると魔法が無効化されちゃうんだ」

「その通りだ。だから今度こそ大人しく捕まれ！行方不明の姉御に替わりもう一度お前たちを人質にして、サツに捕まったジムとテリ―を解放するんだ！」

フラメの姉に復讐するという目的は二次で、俺達を誘拐するという手段だけが残ってしまったているようだ。

この世界の警察がどれほどのものなのか分からないが、フラメや俺に構って回りくどい事をするくらいなら直接留置所に乗りこむか、お金を工面して二人を釈放してもらえばいいのと思う。

「魔法を無効化？そんな便利なものがあるのね。そのマジックアイテムの出来にもよるけど、それさえ有ればお姉ちゃんに一泡吹かせられるかも…。取り敢えず今は戦略的撤退よ」

今更気付いたどうでもいいことだけど、魔道具とマジックアイテムってほとんど意味同じだね…。俺の語彙力とユメルが残してくれた言語野に丁度良い言いまわしが無かったのかもしれない。

フラメは物欲しそうにリセットボールを眺めていたが、今は手段が無いと判断したのかあっさり踵を返して細い横道へと入りこんでしまった。

「フラメちゃんケンカっ早いけど逃げ足も速いんだね…」

置いてかれた事に気付いた俺は、彼女を追いかける為に急いで自分の周囲に風を発生させ、滑り込むようにフラメの入った横道へと続いた。

「待て！逃げるな！戦え！」

必死の形相で追いかけてくるヒョロ長。

だが魔法のブーストが掛かった脚力に、あくまで一般人の範疇であるチンピラが追いつけるはずも無い。獣並に素早かった彼らの姉御なら分らないが…

俺はフラメに追いつき並走しつつ彼女にも魔法を付与。障害物競争アスリート並の速さでフラメの指示する通りに入り組んだ路地を駆けまわり、あっという間にチンピラを巻くことに成功した。

「アタシん家の近くに待ち伏せてたのが運の尽きね。ここらの裏道は全て網羅してるんだから」

「でも、フラメちゃんが戦わずに逃げるなんて…調子でも悪いの？」

俺は相変わらず無い胸を張り威風堂々な彼女をちよつとだけ心配した。

まだ丸一日足らずの付き合いだが、俺が見てきた彼女の性格から

すると撤退なんて珍しい事だと思ってしまう。

「ユメル何か勘違いしてない？アタシは確かにちよつとだけ喧嘩っ早いし負けず嫌いかもしれないけど、自分ではそこそこ合理的に判断して生きてるつもりよ（∴お姉ちゃんと喧嘩したことないアタシには分かるまい）」

校長から、あんまりアタシを目立たせるなつて言われてるし、それに学校の授業を入学早々2日連続で休むなんて考えられない！」

次なるトラブルを回避するため、風の助けを借りつつ裏道を速攻で抜けて研究所まで行き、ゲートをくぐって学校へと辿り着いた俺達。

回り道ながら結果的には大幅に短縮された通学時間のせいか、最初の授業（ホームルーム等は無いらしい）の教室にはまだ生徒が数人程しかいなかった。彼らは俺達が転移してきても特に反応を見せず、黙々と本を読んだり魔道具らしき小物に手を添えてブツブツと呟いていた。緊張しているのだろうか？

「後で校長に学生証ローカルゲートホルダー貰つておきなさいよ。アタシは別に構わないけど、校内で常に一緒じゃないといけないのはお互いに不便でしょ？」

「そうだね。校長がわざわざフレームちゃん家まで来た時にお願いしておけばよかった」

フレームの（違法？）改造学生証の力を借りて一緒に教室まで転移した俺は、最後列の席に二人並んで腰を降ろした。

今回の教室は特に語る事も無い、普通の講義を受ける部屋のようにだ。新品同様の木製机と椅子が几帳面に並べられていて、中学や高校の授業風景を思い出す。相変わらず記憶が曖昧で、教えを受けた教師や時々つるんでいた友達の顔には不自然にモザイクがかかって

いるけど。

「ところでフラメちゃん、授業には何も必要無いの？筆記用具とか」
昨日少しだけ先生の話を聞いていた時は、真面目にノートへ書き込みをしている生徒は少数派だった。

「魔法つてのは個人で仕様が全く違うの。“通神の儀”を通して得られるものは、この世界に自分だけの内なる力を具現させる為の通路と蛇口のようなもの。」

だから授業を受けると言っても、先生は好き勝手に喋って魔法を披露したり実験させたりするだけ。先生の言葉と実演を頼りにして自分だけの蛇口の捻り方、魔法の構築をより複雑で多彩にするための感覚を、頭と体と魔道具に直接刷り込んでいかなければならないわ。

単純に知識を詰め込めば成長出来る訳ではないから、ノートを取っててもあまり意味は無いと考える人が大半なんじゃない？

アタシは単純にあの程度の内容なら暗記出来るし、する必要も無い事ばかりだと思ってるから」

じゃあフラメはなんで学校に来てるんだ？姉に誘われたから？

しかもそんな授業じゃ参考文献程度の役にしか立たないじゃないか。

等々思った俺だが、考えてみれば大学の、いや中学高校あたりから授業なんて結果的に似たようなものだった気がする。

ただ詰め込むだけの知識は受検という関門を乗り越えてしまえば、それ以上披露する場も無く腐り忘れ去られる。

大学で専門の知識を持って学生を指導する教授でも、自分以外の者が書いた論文など半分も理解出来ていない。

教えを請う学生の大半は学問というよりは、社会における学生という立場そのもの、モラトリアムを重要視し人生で最も充実した時間を多種多様な形で浪費する。例に漏れず俺自身もそうだったし、それが一概に悪いとは決めつけられないが。

少し陰鬱な考えに浸っていた俺を現実に復帰させるが如く、先生らしき初老の男が教卓に転移し、簡単な自己紹介をすると直ぐに授業を開始した。

まだ教室の机は3分の1も埋まっていない。

「この授業は“魔法創作”。諸君らにはこのタイトルからどんな授業内容か想像を膨らませる者も多かるうが、大した事はしない。使える魔法によつては頭を悩ませるかもしれないが」

セリスと名乗った白髪の教師の授業を通して、俺は意外な事実を知る事になった。

魔法創作の授業は、決まった目標に対して如何に自分の魔法を活用していくかというものだった。

例題として、大河が氾濫して架かっていた唯一の橋が壊れてしまった。とても泳いで渡れる様子ではない。しかし急ぎ対岸へ行かなければならない用事があるとす。そこで貴方なら自分の魔法をどのように活用して乗り越えるか。

もちろん俺なら風の魔法を利用して対岸まで容易に飛んで行ける。やろうと思えば氾濫の原因である雨を降らす雲をより強い風で吹き飛ばしたり、巨大な空気の壁でダムを造って川の流れを堰き止めてしまう事も出来るだろう。荷馬車等の質量を連れていようと関係無い。

だがその程度の魔力を持つこの体は、やはりというか相当なチー

トスベックだった。

俺が間近に見てきた魔法はフラメの炎竜や不良学生達が結束して作り出した大津波、ライトさんは転移を少しだけ、セバスさんの火炎弾：彼らの使う魔法が普通レベルだと思えばそれが判断基準にもなっていたが、改めなければならぬようだ。

生徒達は例題に対して自分なりの答えを発表をした。いわく『魔法で木を切り倒して橋を架け直します』とか『魔法で大きな石をたくさん運び込んで川を埋めます』『その日は諦めて魔法で境界を張って近くで野宿します』『テレパスで対岸にいる人に連絡を取り後日伺います』

やっている事自体は無難だが実行不可能な方法が多い。

テレパスはよくわからないが、生徒たちの能力の多くはせいぜい木を切る程度の刃（手段は人によって様々）を作り出したり、ちょっとしたサイコキネシスの如く軽い物を移動させる、といった程度のものであった。

フムフムと真面目に聞きながら時折アドバイスをするセリス先生の顔を窺う限り、どうもそれくらいの答えが普通らしい。

フラメは「ドラゴンに運搬させます」と言っただけ、教室にサイズを合わせたミニチュアドラゴン（触れても燃やされないのだろうか？）を召喚したら、教室が驚きと溜息に包まれた。

- - - - -

「才能のある魔法使いだって最初はあんなものよ。まだまだお子様だし。前にも言ったけどアタシや：アンタも規格外なだけ」

相変わらず自分の事は棚に上げるフラメ…俺もか。

「こつちの世界って、もつと魔法に依存した社会だと思ってた…」

次の授業教室に早々移動した俺は、彼女に質問の嵐をぶつけた。

「授業を受ける生徒が異常に少なかったのは、学生証を利用した転移魔法に成功する人が少ないこと（あれを使いこなせるようになる事も魔法教育の一環らしい）、またこの学校にはやんごとなき身分の生徒が多いらしく様々な理由で欠席も多い。」

魔法は使い続ける事で精度が上がってゆき、キャパシティも体の成長に伴って増加するので、あの授業だけを見てこの学校の先生や生徒、特に先輩をあまり見下したりしない事（見下していたのはフラメの方だが）等々口酸っぱく教えられた。

「前から思ってたけど、ユメルには歴史の個人授業が必要ね。放課後図書館にでも寄って勉強会するわよ」

「図書館は…あの出来事が懐かしい思い出に変わるまで行きたくないなあ」

倒れ伏した少年から流れ出る血、血、血。

それ以上は思い出したくもない。

「じゃあまたウチに来る？」

「それもしばらく遠慮しておきます」

フラメとその母親によって俺の脳汁がピンク色に侵されてしまい

そつで怖い。

「アタシも外を歩き回つて色々案内してあげたいところだけど…校長の言つてた事もあるし、リセットボールだつたっけ？あれ持ったチンピラが懲りずにアタシ達を探してるかもしれないから、しばらくは大人しくしてましよう」

彼女の言う事はもつともだと思つう。

魔王を倒して世界を救うなどと言つたわかりやすい目的など持たず、それでも物語の主人公みたく面倒な出来事に巻き込まれ、結局は異世界に来て勉強漬けの日々を送るのか…また得意の睡眠学習が再開されそつだ。

しかしフラメの頭の回転の速さと行動力を俺は舐めていた。

「そつだ！今度はアンタの…ユメルの家に行つてみましようよ！」

「え、でも私は場所知らないよ」

どちらにしろ今日はそこに帰らないといけないだろうし、ユメルの魔法について何か分かるかもしれない。興味が無い訳でもないが…

「不便だつて理由で“今から”学生証貰いに校長室まで直談判に行つて、ついでに聴きだせばいいじゃない（授業思つた以上につまらなしい）」

「…フラメちゃん本音が漏れてるよ」

百歩譲つて俺は巻き込まれ體質かもしれない。

だが彼女は、フラメは間違ひなく巻き込み體質だ。

この後も次々と起こる難？事件を間の当たりにして、俺はそう確
信した。

22 厄災の火種

「校長室だけは、アタシがどれだけ学生証を改造しても転移出来なかったの…きつと特別な結界が張ってあるんだと思う」

前に保健室の地図で確認した時は、校長室は最上階に描かれていた。

取り敢えずそれを信じて俺達は最上階の一室に転移し、長い廊下を移動しながら校長室を目指していた。

最上階は何故か窓が一つもついていなくて薄暗い。殺風景。

「そついえばこの学校って、職員室や事務室が無いんだね」

校内転移の魔法が組み込まれてるとは言え、学生証の発行をお願いするのにわざわざ校長室まで出向かなければいけないなんて。

「教鞭をとっている人はほとんどが臨時教員、本職は研究所勤務だつてお姉ちゃん言ってたから、先生方は向こうに一室構えているはずよ。だから普段は自室で研究なんかしてて授業の時だけ学校に向いてるんだと思う。事務室は…今のところ必要無いんじゃない？」

小、中学校よりは大学に近いのか。

でも校内の雑務は…ライトさんとか保健室のリード先生とか？他にもいるんだろうか。

「ところで、フラメちゃんさつきから分かれ道で左ばかり選んでるんだけど…ワザとやってる？」

石畳のような造りである他、これといった特徴の無い廊下で俺が立ち止まり、足音が1つ減った。

「何言ってるの？学校の廊下に分かれ道なんてあるわけな…あれ？」

少し先行していたフラメは、Y字路の丁度接点に立っていた。何かの間違ひではないかという気持ちで目を擦っている。

俺に言われるまで分かれ道があったことさえ気づいていなかったようだ。

「昨日一人で歩いてたらこんな風に枝分かれした廊下もあったから、この学校では普通のことなのかと」

「そんなはずないわ！アタシも外観を見た事は無いけど、改造学生証でいける限りの場所を探索した感じや日の当たり方から考えて、校舎の造りは縦長の直方体だと思って…」

憤慨した態度で言葉を切り、突然走り出したフラメ。無意識なのか選択したのはまたも左側の通路。

一人取り残された俺は彼女が戻ってくるのをただ待つしかなかった。

「まさかこのアタシが結界に気づく事すら出来ないなんて…」

ものの数秒も経たない内に俺の背後からフラメの声がした。意気消沈といった様子で俺にしなだれかかってくる。

「フラメちゃん大丈夫？」

今は小さな俺の体が、もっと小さくて今にも萎れてしまいそうな彼女をそっと抱きとめる。

「アンタが教えてくれなかったら、そこに居なかったら…アタシは走り続けるミイラになってたわ。」

今アタシが戻ってくるまでどれだけ待ってた？」

「多分1分も経ってないと思うよ」

「やっぱり…空間だけじゃなくて時間も歪んでるのね。校長…あのクソじじい中々やるじゃない」

どうやら校長室に行く為には迷路みたいな結界を突破しなければならぬらしい。

心身共に疲れた様子のフラメに代わり、俺が色々思考錯誤してみた。

まずY字路の中心に目印となる傷をつけてる。

その後二人で右側の通路へ進んでみたら、数分で元の位置に戻ってきてしまった。

「さっきよりマシね。アタシがどれだけ走ったか聞きたい？」

次に二人で左右に分かれて道を進んでみたら、全く同じタイミングで元の場所へ帰還。

傷を付けた向きから一応来た道は分かるのだが、3方向のどこへ行っても結局元の場所へ戻ってしまう。

他にもフラメに再び転移の魔法を使って貰ったり、風の流れを辿って道を探ろうとしてみたが、結果的に俺の策は全て徒労に終わっ

た。

「本当の迷子になっちゃったね」

「いつから結界に入り込んでいたのかしら…廊下に出た瞬間？最上階に転移した直後？校長室に向かおうとしたから？」

「もうこうなったら仕方ない。ライトさんに助けを求めよう」

俺は提案したが、フラメに即却下された。

「アタシ達授業サボってきたのよ。説教受けて教室に戻されるか、また謹慎くらうのがオチだわ。校長室まで案内してくれることは絶対に無い。だったら」

フラメ自身の体と指輪が赤く光ってお互いに呼応する。

「まさかフラメちゃん…それは確かに合理的かもしれないけど」

「ユメル、アタシのこと分かってきたじゃない。もし全部壊れちゃった時の為にアンタも協力しなさい」

この人壊す気満々だ。

コール“ファイアドラゴン”

指輪からにゅるりと出てきたのは、迷い廊下どころかこの学校を

覆い尽くそうという大きさの赤竜…の口先。それだけで通路の一端がすっぽり埋まってしまおう程だ。

「遠慮は要らないわ。学校を壊す勢いでやりなさい！」

少しは遠慮しようよと俺が突っ込む間も無く、赤竜の口に巨大な火の玉が形成されてどンドン大きくなり、石造りの廊下や壁、天井を呑み込んでゆく。

「あつはつはつは！！このアタシをコケにしてくれた報いよ！」

「フラメちゃん落ち着いて！冗談じゃなく学校が壊れちゃうよ！」

俺と分かれていた数秒間、彼女に一体何があったのだろうか？

風で守ってはいたが、一面炎に呑まれた景色は俺の心を容易く折ってしまう程強烈な印象だった。

高らかに笑うフラメの横顔を最後、際限無く大きくなる火の玉に呑み込まれ俺の意識はぱったり閉じた。

- - - - -

「全く…ワシの結界を燃やしつくすだけでなく、あと少しで校内にまで被害を与えようとは」

気が付くと俺は来客用の椅子に座らされていた。

目の前のテーブルには高級そうなカップに紅茶が湯気を立てている。

「あの結界はワシが先客との会話が終わるまで解けぬはずの迷路じや…それなのにお前さん方ときたら、迷路を解かずして壊そうとするなぞ人間のする事ではないぞ。猿にも劣る」

あのう…俺はちゃんと解こうとしましたよ？途中で諦めたけど。

「そこまで言う事ないじゃない！そもそもユメルに学生証を持たせないなんて、校長どころか親失格よ！」

立ち上がり、校長とフラメの声がする方へ行ってみると案の定、二人が口論を繰り広げていた。

その隣で小さくまとまるように静かにしているのは、上級生の男子達。

どこかで見覚えがあるような気がする。

「それまでずっと家に引きこもっておったユメルが突然『学校に行きたい』と言いおったから急いで手続きだけ済ませたんじゃ。このローカルゲートホルダーは作成に骨が折れるんじゃぞ。それに本来のユメルにはこんなもの必要…」

「そこよそこ！アンタまだなんか隠してるんでしょ。ユメルはどうやって魔法使ってるの？魔法具は？風以外の魔法が使えるんだったら、ユメルの魔法の本質は一体なんなの？」

「それは後じゃ。まだ先客との話が終わっとらん」

話しを濁した校長は怒り狂うフラメを無視して上級生達へと向き直り、厳しい表情で言った。

「ハック・ディノフィンガー、ゼス・トラッド両名の退学はもう決

定したことじゃ。本人達から申し開きも無いのに取り消しはありえん」

まるでフラメに怒りをすべて持って行かれてしまったように、青年たちの土気は低く、校長の物静かな圧力に屈してしまっている。

それでもそのうちの一人、あれは確か俺がテリメンとあだ名をつけた現在の不良グルプのリーダーだ、が一步前に出て苦しそうに言った。

「僕達にはあの人が必要なんです。せめて理由を教えてください！おかしいですよ！今まで僕達を散々野放しにしてきたのに今更…しかもアニキだけ退学だなんて…あの人はもう“ヒステリックブルー”を抜けたんですよ」

ヒステリックブルーとは…不良学生のグループ名だろうか。俺はちよっと笑うのを堪えなければならなかった。

テリメンの必死の弁明に校長はピクリとも眉を動かさずゆっくり息を吐いて、そして吸った。

「ワシのユメルちゃんが危ない目にあつたからじゃ…！！」

「…」

「今まで誰が何しようと、多少の怪我人が出るくらいなら大仰にみておつたが、ワシの娘があ奴等学校指定危険物同士の争いに巻き込まれるのは許さん！」

なんと、俺がアニキ達と関わつたせいでこの直談判が行われているとは…

個人的には校長の親馬鹿力ミングアウトっぷりに笑うところなん

だけど、誰もが押し黙っているので我慢するしかない。

じゃあ俺達がこうしてココに居るのは偶然なのだろうか？

いや、そもそもの原因は…そしてこの場に俺が居合わせる事になったのも

「じじ…いえ校長先生。ユメルを連れて彼らと決闘したのはアタシです。アニキ…ディノフィンガー君と彼女を合わせた原因もアタシにあります」

フラメが自らの行いを告白し、ヒステリックブルーの面々は騒然とする。

校長は洗面を変えずに黙って聞いている。

「いや、決闘を仕掛けたのは俺達の方からだ。成り行きとはいえユメルさんを攫うような形で連れてきたのは僕達だし…」

テリメンは一体何がしたいのかさっぱり分からないが、フラメー人が罪を被るように喋らせておくのは男として、紳士として失格だと思っただろう。

「そのことだったら、以前アタシのお姉ちゃんがアンタ達のリーダーに何をしたのか知らないけど、ちよっかい出したのが悪いんだわ。姉妹の尻拭いをしたいわけじゃないけど…この問題はアタシ達が解決します」

「アタシ…達？」

俺が首をかしげる間にも校長が鋭く突っ込む。

「ほづ、ならばどつすると言つのかね？ミリユードの妹よ」

正面から向き合った二人。

やっと対等に話す間柄になったつもりなのか、フラメは胸（無）を張って答える。

「簡単な事よ。ユメルがあのだ二人を改心させるか…二人まとめてぶつ飛ばせる力がある事を見せつけてやればいいんです」

「ちよつ待つてよ…それ私一人に丸投げって意味じゃ」

「このワシに、ユメルちゃんは今以上危険な目に遭うと分かっているのを、ただ指をくわえて見ていると？」

俺が文句を言おうとしたら、校長の深い胆力ある声にかき消された。

まあ庇ってくれるならいいんだけど。

「その通り。いえちよつと違います。校長先生には決闘の立会人になつてもらいます」

フラメの話が、二人を改心させる前に叩き潰すの前提になつてるんですが…

「アタシも一緒に立ち合いますし、校長先生ならいざとなつたら問題児二人相手にしても、ユメル一人くらい守りきれますよね？」

してやつたりとニヤつくフラメ。

校長の渋い顔に苦味と冷や汗が見え隠れし始めた。

「しかしの、二人の退学の件はお前さんに無関係な話。しかもお前さんの口から出た解決策では、自身は何もせんと言つとるようなもの」

そう、フラメにデメリットは無いがメリットも無い。友達である俺の為になるとはつきり言えるような良い考えでもない。

「そつだよフラメちゃん。アニキの事は残念だけど…今は私の学生証だけどうにかしてもらつてさつさと（ユメルの部屋に）行こうよ」

俺はフラメの服の袖を軽く引つ張つて暴走を止めようとするが、彼女は頑固な石像のみたいに動かない。

「何を勘違いしているんですか校長？もしユメルが負けそうになったら…アタシが、問題児かつ今のところ校内最強（？）の二人を消し炭にして、学校一番になってお終いです。そうなれば悪さをする生徒も減るでしょう」

不良達を軽く睨むフラメ。

前回の決闘で既に戦意喪失しているテリメン達にはオーバーキルだ。怯えて後ずさる姿が少し可哀そうに見えた。

「ほう、そこまで言うんじやったら…いいだろう。ただし念の為にリユードにも来てもらうぞ？」

校長が仕返しとばかりにフラメの案に注文を加える。

姉の名を聞いてピクつと眉を潜めるフラメ。

不良グループには、その名前を聞いただけで気を失いそうなくらい顔を青くしてる人がいた。

「日程を調整して後日決闘場所と共に連絡する。ドームは誰かさんが壊してしまって、まだ復旧したらんからの」

俺を優しい目で見た一瞬後にはフラメを敵しい顔で睨む校長。表情を意識的に変えてゆけるところなんかが凄く偉い人っぽい。

…ただよ。

22 厄災の火種（後書き）

もう、フラメちゃんが主人公でいいんじゃないかなあ…

23 召喚獣

「よかつたじゃない！うまくやればユメル愛しのアニキ様も退学にならないし、おまけで校内最強の称号を手に入れられるのよ」

フラメは俺の背中をバシバシ叩いて一応元気づけてくれるようだが、自分が厄災の原因であると把握してこの態度。11歳にして立派な確信犯（意味違う）やるなんて彼女は将来どんな人になっているのか不安だ。

「愛し？のアニキはともかく、最強の称号なんて欲しく無いよ」

「ユメルが頑張らなくても最強の称号はアタシが貰っておくから。大丈夫よ！自身持ちなさい！アンタなら病み上がりのモヤシっ子二人くらい土下座して謝らせる間もなくぶっ飛ばせるんだから」

テリメンをはじめとする不良学生グループ“ヒステリックブルー”の面々が様々な想いを込めた視線を向ける中、俺とフラメは校長室に何故かあったゲート（プライベートルしい）を使って、ユメルと校長の自宅へ転移してきた。

当初の予定も兼ねているが、決闘に備えてユメルの部屋を漁ることで、俺が使っている魔法に関して少しでも役に立つものを見つけようというわけ。

当然ながら俺は決闘に乗り気でない。

下手するとアニキとおまけ（多分アニキを傷つけた黒ずくめの少年）が、フラメによって灰にされてしまうから全力で挑まなければ

いけないのだが。

一応今回も誰かを助けるためのケンカとはいえ、俺は昔から争いが嫌いな性質だ。

…昔から嫌いだった？その割にはこっちに来てから随分はつちやけてた気がする。

それに見世物みたいな決闘で本気にはなるのは難しい。

…目立つのが嫌だから？こっちに来てから目立ち過ぎると注意されたくらいなのに。

過去に嫌な思い出でもあったのか、ユメルに盗られたはずの記憶の残滓が要らぬ問いと考察の渦を巻いている。

とても物漁りをする気分にはなれなかったので、家の間取りを前もって校長に訊いておき（一応は自分の家であり部屋なのだからおかしな話だが）、転移先になっていた玄関から2階のユメルの部屋へ直行した。

俺とユメルに関する情報が得られたらいいなと少し期待しつつ、万が一ピンクのフリフリ的少女趣味な部屋だったら、フラメの家にまた厄介になるのとどっちがマシか真剣に悩みながら扉を開けた。

「うわー…アタシの部屋も大概だと思ってたけど、ユメルって読書中毒なのかしら？」

「ここまでビッシリ本で埋まってる、書齋っていうより小さな図書館だね」

俺達を出迎えたのは三方を本、本、本、に囲まれ、申し訳程度に洋服ダンスとシングルベッドが窓側に置かれてなお12畳程のスペースを残している部屋だった。フラメの部屋程ではないが十分に広

い。少女趣味では無いから全然文句は無いが、人形や化粧棚等は見当たらず、年頃の女子の部屋としてはかなり殺風景だと思われる。

「本棚がスライドして…奥にも本棚があつてそれもスライドして…どこまで続くのかしら」

本そのものではなく、横滑りする収納スペースを楽しそうに動かして奥へ奥へと進むフラメ。

こつこつところは年相応だから憎めない。

「あんまり他人の部屋で遊んじゃ駄目だよ。本が崩れてきたら危ないし」

「本の百冊や二百冊襲つてきても灰にしてやるわ。それにユメルの部屋なんだから一応今のアンタの部屋でもあるってことでしょ？構わないわよね？」

案外こつこつところに隠し部屋があるのよとか言いつつ、フラメは返事を聞かずにズンズン本棚の奥へ潜って彼女の気配が遠ざかる。他人の物はもっと大事に扱いますよ。あと実際本に襲われたら結構恐かつたんだぞ。

「まあ、いいけどさ。でもさつさと用事を済ませて…」

それからどうしようか。

授業はまたサボってしまったし、フラメもそうだろうがあんな微妙な講義を受ける気にはなれない。

でも校長にあまり目立つことをするな、外出を控えろって言われているし。

…今までフラメに巻き込まれる形で災難が続いたけど、彼女がい

ないと俺って暇なんだな。

せつかく風の魔法にも慣れてきたんだから世界を見て廻りたいな。そこらに溢れ返るファンタジーらしく、冒険者ギルドで依頼を受けて魔物討伐して賞金もらったり…

「フラメちゃんに影響され過ぎだ。もっと平和的解決を図っていないか」

そもそもこの世界って人以外にエルフとかドワーフ、魔物って存在するのかな？ガーゴイルが珍しいって言われてたし、結構生活も安定してるみたいだから、冒険者的な職業も廃れてるんじゃないか。

選択することが辛くなる程大量の本棚から、それでも適当に1冊選び出し流して読みながら（勇者が魔王をやつつける勧善懲悪ファンタジー）どうでもいい思考を続けていた俺だが、フラメは一向に帰ってくる予定が無い。

この本棚の壁は一体何重になってるんだ？まさか別の空間と繋がってたりしないだろうか。

「フラメちゃんどこまで行っちゃったの？私の声聞こえる？」

「…」

異空間云々はともかく、声が届かないところまで続いているのか？人の家で大声で叫ぶのも気が引けたので俺も彼女の後を追っていくと、それほど歩く事も無く（それでも本棚の列は二桁を越えたが）、本が尽きてむき出しになっている壁の前でフラメは立ちつくしていた。

「フレームちゃん何かあった？まさか閉所恐怖症で声も出なかったか？」

「アタシ暗くて狭いのダメなの。悲鳴も上げられないくらい恐かった。ユメル来てくれてアリガト」

「……………アタシがそんな人間に見える？」

いえ全然。全く。これっぽっちも。暗くて狭かったら寂しいからって赤竜使って辺り一面広く明るく焦土にしてしまおうと思われます。

「多分この反応は…アタシのと同じ」

フレームが指輪をかざすと、いつもと違い優しい光が溢れ出して壁を照らす。

「古の力を用いてかつてこの世を支配した者よ。刹那の時の邂逅を幸運と罵るか…それとも運命に抗うか…望むなら我が呼びかけに答えたまえ。」

「ねえフレームちゃん…言ってるで恥ずかしくない？」

「うるさい！アンタだって初めて魔法使った時ドヤ顔でなんか叫んでたじゃない！」

「いやあれは自分に気合を入れたかったというかなんというか」

この世界に存在する魔法のほとんどは発動に特別な詠唱や発声、魔法陣等が必要無いようだ。よく言えば実用的（その割に有効活用されてない）、悪く言つと見栄えが悪い（フレームの赤竜ほどになれば話は別）。味気ない。

その割にさつきからフラメは俺が昔読んでたラノベ（記憶の中の本のタイトルは相変わらずモザイクがかかっている）のような言葉を紡ぎ続けている。その真剣な姿は決して笑いの種になるような光景でなく、むしろ教会で神聖な儀式を見学させて貰っているような気持ちになる…かなあ？

個人的にはそういう光景にこそ茶々を入れるのが俺の本分だった気もする。

「我は友を雇いしそなたの友人…眠りの意味を責めはしない…ただ我が次元に降り立ち望みを聞かせよ。わが名はフラメージユ。そなたの友ファイアドラゴンと契約せし者なり。

………ダメだわ。ファイアドラゴンの言とおりにしてるんだけど、ノイズばかりで何言ってるんだかさっぱり」

俺の言葉を断ちきり壁との会話に集中しているフラメだが、相手から返事が聞き取れなくて苦戦しているようだ。

「壁の中に何かいるの？」

「恐らく。誰かの魔道具に宿った意志が魔道具から分離された上で封じられてる」

「それってつまりこの部屋の主の…」

「まだ決まった訳じゃない。けど、コイツの封印を解ければユメルの魔法について何か分かるでしょうね。アンタもやってみる？魔道具の意志を告いだことの無いアンタでも、体が同じなんだからもしかしたら…」

フラメが手を引いて壁まで誘導してくれる。俺は半信半疑ながら

何の変化もないソコに掌をべったりくっつける。

『お……ユ……メル……さま』

「あ、なんか聞こえたよ」

「ホント！？やっぱりユメルは只者じゃないと思ってたけど、まさかアタシと同じ伝説使い（レジエンドテイマー）だったとはね」

『また…俺…を使…つてく…れるの…か？』

この声が、この壁の中もしくは向こう側に竜が？

なんだか凄そうな気配は感じるが、フラメが呼びだしていた赤竜のようなプレッシャーは無い。

「そ、現代魔法の究極形態の1つ、魔道具に宿った意志の実体を伴って具現化させること。通称“サモン・ウィル”。大抵の人はそこからへんにいる虫とか魚みたいに人間以外の現実に存在する生物になることが多いわ。たまに強い魔力を持つ人はおとぎ話に出てくる一角獣を出したり」

このファイアドラゴンとかね、とフラメが指輪からミニチュア赤竜を呼び出して小さくなった頭を優しく撫でる。どこか悲しそうな表情を湛えたまま愛おしそうに。

「ファイアドラゴンが言うには、ここには自分と同等以上の存在が強力な結界魔法で閉じ込められているそうよ。」

アタシが言うのもなんだけど、ドラゴンみたいな伝説級を扱える人なんて世界に五指と確認されていないのに、それを魔道具と分離させてしかも封印しちゃうなんて…一体どんなメリットがあるのかし

ら？」

「ともかく、どうやったら助けられるの？」

こうして壁に手を当てていると閉じ込められたドラゴンの感情が伝わってくるようだ。

なんだかとても可哀そうになって、俺は何か手立ては無いかとフラメの言葉を期待するが、彼女は難しそうに首を振る。

「こんな…自分の魔法に対するここまでの冒涇なんて聞いたこと無いわ。元に戻す可能性があるとしても、魔道具となった媒介が見つからない限りどうしようも…」

彼女も赤竜と同調しているのか、絞り出す言葉の端々から悲しそうな、怒ったような感情が漏れ出ている。

俺は考えた。今は諦めて手を放し別の解決法を探るか。安易にこの壁を壊したらドラゴンが解放されないものか。

「無駄よ。物理的に封じられてる訳じゃないし、下手に壊すと復活させることが難しくなるかもしれないわ」

焦る心を読んだかのように冷静なフラメ。それが出来そうならアタシがとつくにやっている、という顔だ。

他に手はないのか？

感情の高ぶりが抑えられない

俺はこっちに来て一体何を学んだ？

色んな人の話を聞いて、魔法を見て、自分で使って、決闘に巻き込まれたりそれに参加したり誘拐されてケンカしたりケンカしたり。

特にフラメに色んな事を教わった。俺の規格外っぷりも教えてもらった。

そう俺は何もかもがイレギュラー。

イレギュラーにはイレギュラーな解決策があるはず。

例えば俺が魔道具を使わないで魔法を行使しているのは……

「フラメちゃん。私の魔道具が自分の体そのものかもしれないって説は、まだ有効だよな？」

「有効も何も魔道具を持たないアンタが魔法をどこからぶっ放してるのか私には未ださっぱりだわ。前に言っただけど体そのものが魔道具になっていると仮定したらアンタの精神は……

止めなさい！！」

「なんで？」

良い方法、というよりそもそもこれしか正解はない気がするんだけど。

「ドラゴンを封印したワケも納得よ！今アンタは魔道具無しでもこうして正常に魔法を使っているんだからそれで満足しなさい！ドラゴンをその身に取り込むだなんて……」

分かってる…本当は何も分かって無いのかもしれないけど。

無知は決して罪なことでは、悪いことだけではない。

「確かにそれが本来のあり方だったのかもしれないけど…アタシが言った事覚えてる？体に意識が二つあるという事は」

「仲良くすれば問題ないんでしょ？」

「だから今までそれができた人なんて！！…友達が命を投げ出すような事をただ黙ってみてるアタシだと思う？」

フラメと指輪から身を切るような2つの殺気を感じる。でもその方向は全く逆のようだ。

冷静な態度から打って変わって激情：直ぐに困惑した顔になる彼女に変わって俺は静かに言った。

「フラメちゃんの魔道具は、私のこと応援してるみたいだよ？」

「そりゃ仲間が解放されるならそっちを指示するわよ！しかもかつて数体で世界を支配したと言われる強大なドラゴンの魂よ？！体を巡ってアンタの意識とケンカしたら残るのはどっちかなんて」

もう魔法による実力行使は諦め、必死に俺にすがりつき壁から引き離そうとするフラメ。

だが如何せん体格の差が大きい。同年代のはずだが俺よりふた回りは小さい彼女の力では俺を動かすことは出来ない…俺が動くとうとしない限り。

「ねえ、お願いだから今は止めて。ここのドラゴンだって今すぐどうにかしないと死んじゃう訳じゃないわ。でもアンタが今焦って失敗したら…アタシの友達が確実に一人減っちゃうのよ！！？」

「そうだよね…なんで私こんなに意固地になってるのかな？自分が死んじゃうかもしれないのにね」

「その手を放して！！もう思考と感情を操られかけてるんだわ」

初めて見るフラメの泣き顔もどこか遠い世界の出来事みたいだ。可笑しいな。こっちで一番大切な友達のことなのに、壁についた手が離れない、離せない。これだけ俺を必要としてくれる人なんて向こう側でもいたかどうか。

大切な友達に変わりは無い。今だって悩んでるから俺は黙って彼女の嗚咽を聞いている。

俺に何かを背負える覚悟と、力はあるだろうか？

「元はといえば、フラメちゃんがコレを見つけたんだよ？」

「うっ…でも」

「決闘の話だって、フラメちゃんが言い出したことなんだから」

「ぐすっ…だって、アンタがこんなに簡単に命を投げ出そうとするヤツだと思わなかったんだもの！普通の闘いならいくらでもアタシが守ってあげられると思ったんだもの！」

たった二日のことなのに、俺はフラメに振り回されっぱなしだ。

「だから、私もフラメちゃんを困らせてみたいなって」

「何冗談みたいなこと言ってるの！アタシは本気で！」

「大丈夫！俺も本気出せば大抵の事は何とかしてきたから」

『そう大丈夫…今のユメル様なら俺を…』

今だけは男に戻った気分でフレームの体をしっかりと抱きしめその
温もりを感じながら、俺は壁の意識と自分の魔力を同調させた。

24 割とやじでまよい繋ぎ(前書き)

自分でも思っくらいサブタイ酷い…

24 割とどうでもよい繋ぎ

「ユメル様には感謝しています…が、何故今更俺を受け入れる気になつたのです？」

俺の頭に封印されていた魂が語りかけてくる。

「何故って、君があそこに閉じ込められたままは嫌だつて叫んでたから」

ここは俺の夢の中みたいなものか。

壁の向こうの存在に同調した後、一時的に俺の意識は現実から切り離されているようだ。

「たったそれだけのことで命を繋ぐ為に封印した力に対し再び命を掛けると？…貴方は聖人にでもなるおつもりか。助けを求める声があればそれを全て聞き届けると言うのか？」

「何かのお話に“誰かを助けるのに理由は要らない”って名言があつてさ。もちろん助けられる力がある事が前提条件だけど、勝算はあつた。なんつて言うか…俺達似た者同士だし」

『似たモノ？』

相手が首をかしげる姿がぼんやり浮かんでくる。成程フレームの言つた通り竜のようなどっしりした影が見える。

「君も何となく気付いてたから声を掛けてくれたんでしょ？俺がユメルの体を借りてる別の存在だつてこと。だから主従関係じゃなく、

同居人としてうまくやっていけるかなって」

『同居人…しかし対等な立場だとすれば俺達の精神は余計に摩擦が』

「だから無理して相手に合わせてストレス感じる必要も無い。意見が割れたら…じゃんけんでもして決めようか」

自分でもなんという楽観主義と思うけど、相手はユメルに対して相当負荷を貯め込んでるようだからこれくらい言ってあげた方が安心するだろう。

『したらば早速だが1つ赦しを得たい』

「ん、もう？そんなに畏まっちゃってどうしたの？」

竜は自らの死刑宣告を行うかの如く、悔いの無い様にと大きく息を吸った。

「俺にユメル様の体を使って思うがままに下ネタ発言する権利をくれ」

「…」

ん？

「俺が体を借りてあんなことやこんなことを許してほし」

「何か言った？」

自分でもここまで凄味を効かせられるのかと驚いた。

俺にとっては命を掛けた真剣な話し合いの最中にコイツは一体何を言い出すのか。

竜は俺に若干の怯えを見せながらも、わかってないなといった表情で語り出した。

「だからギャップ萌えというやつだ！まだ真の女というものを知らぬ少女が破廉恥な語彙を連発する異世界を存分に」

「異世界はもう十分堪能してるから。しばらくいや俺の中で永遠に眠ってていいからね、名前も知らないドラゴンさん」

俺の脳みそで“ギャップ萌え”と変換された言語が、はたしてこの世界に存在するのか甚だ疑問だったが、取り敢えず竜は俺の目の前で自ら死刑宣告を行ったようなものだ。

俺は男だ。だが断じて下ネタボケ担当の人間ではない。

しかも今は女だ。誰が好き好んで卑猥な単語を連発すると思うのか。

『うわっ貴様！何をする！？さっき対等な立場だと言ったばかりでは…』

…伝説の竜でもずっと壁に閉じ込められてたら欲求不満になっちゃうのかな？

- - - - -

「ユメル！気が付いた？」

顔に涙の跡を残しつつ心配そうに俺を膝枕しながら見つめてくるフラメには悪いが、あまり話せることは多くない。

「シリアスな夢だと思ったら、説明に困るシユールな議会だったよ……」

俺が一般常識という圧倒的多数決の権力で竜を沈黙させた。

あいつを体から分離するだけでなく、こんな形で封印したワケも納得だ。

俺はユメルという女の子にとって最悪なことをしてしまったかもしれない。

「そう、よくわからないけど意識はアンタのままなのよね？思考が途切れたりしない？」

「それは大丈夫。ドラゴンの割に（思考が）対したことなかったよ。今私の体の中で永眠してる」

永眠？と不思議そうな顔をしているフラメの膝枕から逃れ、俺は一息ついた。

「これからどうしようか。授業に戻る？それとも決闘の特訓にでも付き合ってくれる？」

「えーせっかくサボったんだからもっとゆっくりしようよ。ユメルの部屋荒らし…はもういいけど（本しか無くて詰まんない）、お客に茶くらいは飲んでってもらうべきじゃない？」

客とは誰ぞ？ここが俺の部屋だとするならフラメのことが。

確かに家に来てもらったのだから（正確には押しかけたのだが）お茶とお菓子くらい出すべきだか…どこに何があるかもわからない
“自分の家”で？

フラメとしては多分俺の体調を気遣って言ってくれてるんだろうからそれに甘えてもいいのだけど、彼女のペースに乗っかって何も起こらない、なんてこと間違いなく無い。俺は彼女とたった一日の付き合いで納得している…理解は出来ないが。

「そうだ！アニキ（と黒ずくめの少年）のお見舞いに行つてこよう」

「ちょっと！自分の体も不安定なのにまた他人の心配？それとも決闘相手に宣戦布告を兼ねた挑発でもする気？」

食い下がるうとするフラメにそれ以上反論の機会を与えず、俺は（膝枕で少し痺れたのだろう）足をさすりながら立ち上がる彼女を確認すると直ぐに学校へ戻るゲートへ歩みを進めた。

「話し合いで解決出来ればそれが一番私の為にもなるでしょ？」

「そりゃそうだけど…アンタが慕うアニキはともかく、もう片方のまっくる黒子みたいなヤツは使う魔法だけでなく精神的にも普通じゃないから気をつけなさいってじじい…校長が言ってたわ。例えば相手が大怪我してるからって、何日か後にちゃんと立ち合いのある決闘があるんだから、それまではむやみに近づかない方が賢明だわ」

「へえ、フラメちゃんにしては弱気だね？決闘にお姉さんも関わることからって怖気づいた？」

「こつこつという軽口が叩けるようになったのは心に余裕が出来たからかもしれない。」

「なんでここでお姉ちゃんが出てくるのよ！？まあ…アンタも少しは言うようになったわね。その方が張り合いあるかもしれないけど悔しい気もする。」

「アタシは性根が腐っていたり、心が病んでるような輩は生理的に受け付けられないよ（まだ会話したこともないけど）」

「真つ直ぐな性格の彼女らしい言い草だ。気の合う合わないが極端なんだろう。俺は割と気に入られてる…と良いな。」

「じゃあお茶は出せないけどココでくつろいでてよ。私1人で行ってくるから」

搬送先の病院は校長かライトさんに訊けばわかるかな。

俺は後ろを振り返らない。信じてると言うよりお互いを暗黙に確認する感じ。

「全く…さっきドラゴンを取り込んだばかりなのに無茶しちゃってフラメはブツブツ文句を言いながら俺の後をついてきてくれた。」

「別に、アンタを心配してるわけじゃないんだからね。アタシだって戦つかもしれないんだから。そう、ただの偵察なんだから」

- - - - -

「おお、もう帰ったか。して、何か収穫はあったか？」

「はい！校長の部屋で凄くえっちな本を見つけました」

「どん引きでした。メリー先生って校長の奥さんですよ？校長には勿体無いくらい若い奥さんがいるのに、あんな本を隠してるなんて……」

「……」

短い沈黙の間に校長の額からツウと冷や汗が垂れる。

あれ？軽いジョークだったはずが意外と凶星？

「いやいや……冗談はいかんよ。それで、そんなに急いでどこに行くというんじゃない？」

「アニキ……デイノフィンガー君とゼス？という少年のお見舞いに」

「アタシもついてるから心配しないで下さい」

一度決めたら迷わない。フォローしてくれるフラメに感謝しながら俺は話を切り出す。

「もしかしたら話し合いだけで済んじゃうかもしれないですし。決

闘なんて相手は望んでないかもしれませんが。もう今後悪さはしないと誓ってくれば学校に残れるんですから」

校長はひとしきり唸ったものの了承してくれた。

「あんまり意味は無いと思うがの。魔で縛るならともかく口約束なんて力の前には……じゃが無駄足ということも無かるう。少しでも相手の情報を得ることは戦局の打開に多いに役立つしの」

校長がパンツと手を叩くとライトさんが目の前に転移してきた。

この人は単なる涉外とか警備より、フラメの姉と並んで校長の片棒を担いでそうだから油断できない。

「やあ、ユメルちゃんは私が嫌いかい？ちよつと顔を合わせても直ぐ離れていく。もつと頼ってくれていいんだよ。私は女性全般にフエミニストで忙しいが、君の為なら一肌と言わずいくらでも脱いじやおっ」

まずは一肌目という感じで変なツバの帽子を取ってお辞儀するライトさん。

こんな風にキザで渋くてそれを三枚目的に押し出すから、誰とでも仲良くなれそうで余計に怪しい。

「ユメルにはアタシがついてますから」

俺の腕を引っ張って抱き込む形をとるフラメ。それはちよつと恥ずかしいです。

「おやおやお姫様がもう一人。貴方も守ってもらう側の人間だと思っうのは私だけかなフラメちゃん？」

「フーン！アンタもどうせアタシのことを“お姉ちゃんのおマケ”程度にしか見てないんでしょうけど…後で痛い目みせてやるから覚悟しておきなさい」

睨みつつ指輪を光らせるフラメを、そこいらのガキ大将を相手にするみたいに余裕の笑みで躲すライトさん。

「本題に入るぞ？ライトよ、この子らを先の問題児達が入院しとる病院に連れて行ってくれんかの」

「よろしいのですか？デイノ君はともかく黒い少年の方は…」

「構わん。行けば自ら判断して行動するじやろ。その子らを見た目と使う魔法だけで測ってはいかん」

校長の説明だけで納得がいったのか、ライトさんは俺達に向き直って準備はいいかと訊いてきた。

「では“セントナオラ病院”へ案内しましょう」

案内と言っても転移の魔法で一瞬だから地理とか位置情報なんてこの学校と同じようにさっぱりだったが。

24 割とやうでもよい緊き(後書き)

自分でも思つくらいサブタイ酷い…

25 三角関係？

転移魔法のように利便性が高すぎる技術が安易に存在する世界では、代償としてその他の情報伝達、移動手段の衰退、枯渴が見られる…と、どこそのファンタジーだかSF小説に書かれていた。

例えば“道”というものの存在意義が非常に薄れるから道路が舗装されない、橋も掛からない、行き当たりばったりな露店が姿を消す、郵便や宅配便が不要になる。

考えればキリが無いし、そもそもの価値観が違い過ぎるから、そのような世界を描ききる作者は本当に良く頭が回ると思う。

「アニキ！お見舞いに来たよ！」

「君は…確か昨日図書館まで一緒だった下級生の…ユメルちゃんだっけ？授業はどうしたんだい？」

俺が迷い込んだ世界では、フラメ曰く転移の魔法を使いこなすのは相当難しいらしい。ついさつきライトさんが俺達をアニキがいる病室の前まで一瞬で運んでくれたが（当人は仕事があるからと言ってさっさと帰ってしまった…帰りはどうすればいいんだろう）、こんな芸当が出来る人間は世界で指折り数えられてしまおうと言う。

ライトさんの口からはユメルも転移魔法が使えたと聞いたのだが、現在彼女の体を借りている俺にはそのきっかけがまるで掴めない。そもそも個人で使える魔法が全然違うのに（俺の場合は風っぽい何か）転移みたいに一般的な大系を踏む魔法、所謂“コモンマジック”はどうやって伝授されているのか。

まあ今は考えても仕様が無いことだ。いつか無意味に使いまくりたい魔法ではあるけど。

アニキことハック・デイノフィンガーは、俺が学校でたまたま出会い、図書館まで御一緒させてもらって、そこで一悶着あって重傷を負ってしまった…はずの上級生。ちなみに“ヒステリックブルー”とかいう不良グループの元頭、の割に礼儀正しく快活な好青年。

「授業はさも当然のようにサボりました。私のことなんかよりアニキの具合はどうですか？」

俺は椅子を持って来て、ベッドで横になるアニキの近くに腰掛けた。

「ああ、やっぱり図書館では迷惑かけちゃったのかな？もう大丈夫さ。何故か足の骨折まで治ってて前より調子が良いんだ」

黒ずくめの少年の熱烈アタック？を受けて、お腹に穴が空く大怪我をしたアニキだが、呪詛返しの際に足の怪我也も相手に映してしまっただのかもしれない。

「そつえばアニキと一緒に運ばれた黒い少年なんですけど…」

「ああ、ゼスのことか。目が覚めた時に医者が話してくれたんだが、アイツ結構重傷らしくて今は特別な病室に入れられてるらしい。俺は何もしてなかったはずなんだがなあ」

呑気なアニキの様子からして、退学や決闘の話はまだ聞かされてないようだ。

俺から話を進めて、どうにか事を丸く収める為に強力してもらえないだろうか。

「アニキ、実はそのゼス君とアニキと私とで決闘しなくちゃいけない

いらしくて」

「ん？君と？なんでまた」

俺は、さつきから借りてきた猫のように黙り込んでアニキを観察しているフラメの袖をひっぱって説明を促した。

なんとか口を開く彼女だったが、顔が不自然にこわばっている。

「初めまして？…ミリユードの…妹のフラメです」

なんだか様子がおかしい。具体的に言うならば爆発直前の火山みたいな静けさ。アニキが自分の姉の事を知っている、ということフラメは知っていたのか。

「やあ、久しぶりだねフラメちゃん」

「アンタ…お姉ちゃんの昔の…彼氏さん？」

「嘘！？だってアニキの足の怪我ってフラメちゃんのお姉さんが」

そうだよ、と軽く答えてくれるアニキ。フラメは自分の目が信じられないようで、まだ幼さを残しながらもイケメンな雰囲気漂う青年の顔をまじまじ見つめている。

「一年前は髪が逆立ってて金髪で、顔に青い稲妻みたいな化粧してて、名前も“ソニック”とか“トルネード”みたいな適当なあだ名で…」

「懐かしいな…一回だけミリユー先輩の実家に遊びに行った時だけ、よく覚えてたね。昔の格好のこと言われると凄く恥ずかしいや」

そう言っただけをかくアニキの髪は、俺が初めて会った時と同じでやや青っぽい輝きのあるさっぱりショートカットのストレート。顔に刺繍なんてあるわけもない。

「図書館でちらっと見た時は、この人どこかで見ても？って思ってたけど…まさかアンタが」

何かに耐えるように、でもつい身を乗り出しがちになって話すフラメは恋する乙女のように…でもないか。

「そう、君のお姉さんの元彼で不良達の元リーダーさ。ミリュウ先輩との別れ際に言われたよ」アナタは妹に灰も残さず焼き尽くされるといいわ』ってな。そうなる前に事故も重なって足折られたんだけど」

苦笑いするアニキに対して、フラメは悄然と怒りを湛えるように黙りこくる。

なんとも複雑な空気漂う中、俺はこの人間関係をどのように利用すれば万事うまくいくか考えていたのだが。

来客は俺達だけではなかった。

「はあいハツク君。お元気かしら？アナタの無様な恰好をながく眺めるためにリングをたくさん持って来たわ…あらフラメ奇遇ね。お姉ちゃんの前で目を付けるなんて良い趣味してるわ」

噂をすれば…とはこのことか。

俺とフラメとアニキ、三者三様の心意がこもった視線を真っ向に浴びながら凜と立つ女性はミリュウ・インディソフィア。フラメの実姉にして魔法研究所所長秘書と魔法学校校長の片腕を勤める白

衣のスーパービジネスウーマン。

「お姉ちゃんこそ別れた男に未練タラタラなんじゃない？どんだけリンゴを剥き続けるつもりよ」

「コレはついでよ。本当は校長先生からの伝言を伝えに来たの。“来週の午後2時、校長の家の庭で、ゼス君とそこにいる銀髪の校長の娘さんと貴方で1対1対1の決闘をして貰うわ。もし負けたり決闘を辞退したら退学：貴方の子分達も全員ね」

「最後のは嘘です！校長はそんな事一言も」

俺の言葉を手で遮ったアニキがミリユードを見据えて静かに問う。

「俺の処分すら今更って感じたが：なんで俺一人の行動次第でアイツ等までまとめて辞めさせられるんだ？」

「その方が面白いから私から校長に提案したの。フフツ、久々に貴方の本気が見られるかしら？フラメ、このリンゴちゃんと剥いて“あ〜ん”って食べさせてあげなさい。男は尽くす女に弱いんだから」

初めて会った時と同じく、自分の言いたい事だけ言ってさっさと帰ろうとするミリユード。

やっぱりこういう女の人は嫌いだ。

完全に空気と化していた俺だが、ここは一矢報いるべきと彼女の背に向けて話しかけた。

「フラメちゃんのお姉さん…ミリユード先輩！」

「何？貴方に話しかけられる用事は無いのだけど」

振り返る大人の女性から伝わる氷のように冷たい視線。俺は負けじと腹に力を込めて言う。

「今いくつですか？」

「…は？」

「年齢、歳、あなたの生きてきた時間です」

「意味はわかるわよ。赤の他人の歳なんか聞いてどうしたいのかってこと…一応、今16よ」

フラメが11歳だからまあそこそこなのところか（何が？）。

意味深に笑う俺に、初めて高慢さを控えて怪訝そうな顔になるミリュード。

「へえ、凄そうな役職の割に…あと見た目よりもずつつつつと若いんですね。私よりは幼いですけど」

「どついう意味かしら？校長の娘だからってあんまり出しゃばるよっなら…」

「お姉ちゃん！」「ミリュー先輩！」

病室内を飽和させるような絶対零度の魔力の高まりに俺も応じようとしたが、フラメとアニキの声にお互い思いとどまる。二人ともミリュードの方を呼びとめるってことは、それだけ俺より彼女に脅威を感じている、長年の付き合いだからこそ力をよく知っているってことなんだろうが、ちよっと悔しい。

「来週を楽しみにしてなさい。私も決闘を見届けなくちゃいけないんだから。なんならその時1対3で相手してあげても構わないわ」

絶対的強者の貫禄を醸しつつ、白衣を翻し病室を去るミリユードの後姿は孤高で寂しい。本人はそう思わないだろうが。

.....

「お姉ちゃんにケンカ売るなんてユメルには10年早い！」

「ここは病院だぞ！他の病人に被害が出たらどうするつもりだ」

「申し訳ございません」

なんで俺が怒られてるんだろう？口喧嘩を口だけで終わらせられないのは子供だけじゃないのかな？

ミリユードが出て行った後、開口一番から俺へ非難の嵐を浴びせるフラメとアニキ。一体どれほどのトラウマを植えつけられているのか測り知れない。

まあ、何はともあれ二人はミリユードに関して気が合うらしく、妹と元彼で仲良く俺に説教する様は中々お似合いだ。

「それで、最終的にはヒステリックブルーでよく話し合ってから判断するが…悪いなユメルちゃん、アイツ等を巻き込んでミリユード先

輩に刃向うくらいなら、俺は本気で決闘に望むから」

男が真顔で少女相手に“全力でふるぼっこするけどゴメンネ”って言うのはどうかと思うけど、魔法が序列を決める世界で歳はそれほど関係無いか。

「残念です。出来れば穏便に済ませたかったんですが」

「万が一お姉ちゃんも乱入するようなら、アタシも頑張るから。乱戦に持ち込めればアタシでもお姉ちゃんを…」

フラメはアニキと打ち解けたからか、それとも姉と会ったせいかわる気が増し増しな気がする。

「それじゃあ私はそろそろ…一応黒い少年、ゼス君にも会ってきますね」

「やっぱアタシはここで待ってるわ。ディノさんともう少し話したい事あるし」

もう何個目になるだろう、リンゴの皮を途中で途切れず綺麗に剥きながらフラメが言う。

ミリユードを通して急激に距離が縮まっている二人を残して俺は病室を出た。

「…!？」

二人が仲良くリンゴをつつきあっている桃色空間の扉を閉じた瞬間、俺は強烈な違和感に感覚が支配された。

本能のままに風の結界を張る俺を嘲笑つかの如く頭に声が響き渡る。

『こつちへおいで。アニキの次に愛しいユメルちゃん』

25 三角関係？（後書き）

おもしろいものがあるといふ自分の駄文から逃げたく…すみません
言い訳です

26 愛の形

『そう、こつちだ。早く僕の元において』

それが本当に自分の意志なのか判断がつかないまま、俺は頭に響く声がより近づく方へと足を進める。

こちらの世界では初めてみる病院、その廊下を戸惑いの無い確かな足取りでしかしぼんやりとした意識のまま最上階までの階段を登りきった。

そのまま真つ直ぐ進み続けて遂には屋上へ続く扉を開ける。鍵は掛かっておらず滑らかに回るドアノブの向こう側では白いベッドシートが綺麗に間隔を開けて干されはためいている。

入口から少し進んだところには、入院患者のような乳白色の洋服の上から黒いマントを羽織ってカラスのように黒い輝きを放つ黒髪黒眼の少年がいた。不自然な程に整った顔だけが異常に白く際立って目立つ。

「やあ、図書館で会って以来一日ぶりだね、ユメルちゃん」

初めて会った時の根暗そうな服装と顔色の割には気さくに話しかけてくる少年。

「なんで私の名前を？あとそのマント暑くないんですか？」

この場で10分も立ちつくしていたら、次の日に日焼けで大変な思いをすることになるであろう陽射しの強さだ。俺を呼ぶ為にとだけ待っていたのかわからないが少年の額に汗が浮かぶ様子は無い。暑そうにする様か思い浮かばない。

「僕の魔法は非常に限定的だけど、その範囲内ではとても優秀だね。君の名前や過去を知る事くらい簡単なんだよ。例えば…」

ユメル・バーティシア 11歳

約5年前に魔法学校を創立したばかりの初代にして現校長ガイン・バーティシアの養子となる。その経緯は不明だが学校の設立と何らかの関係があると周囲では噂される。

その後しばらく目立った動きが無い、それどころか君は人前にはとんど姿を見せる事無く現在まで校長ガインの元で育てられる。しかしその頃から徐々にガインが隣国であるリンドーラの国王やデリント連合国の首長、そしてこの国メリストの王と交流を持つようになり、魔法学校共々その権威を確立していく。

「そして現在、突然養父の魔法学校に入学。今まで静かに暮らしていたのが嘘のように学校内外の人々、事件と関わりを持つようになる」

「貴方は一体なんなんですか？貴方が気になっているのはアニキの方じゃないんですか？」

こいつは…俺より俺の事、つまりユメルの過去を詳しく知っているかもしれない。

「僕かい？名前はゼス・トラッド。君の唇が奏でる甘い響きでゼス君って呼んでよ。それから僕本体の魔法は、僕自身がその時点で一番強く意識している対象に様々な形で干渉する事が出来るものなんだ。他人の力を利用するのはその応用の1つでしかない。そして今は…」

「変態こつちに来ないでください」

「つまり僕が今一番気になっているのはユメルちゃん、君さ。僕の魔法を一瞬で把握し跳ね返したあの瞬間…僕の心は君の銀糸に染められ絡め捉えられてしまった」

リアルで言えば吐き気がするようなオペラ台詞を歌い上げて1人悶える真性の変態がいる。

図書館で黒づくめのこいつと出会った時の事は正直あまり覚えていないが、呪詛のような魔法を跳ね返したのはやはり俺だったのかでもそれじゃあ…

「ゼスく…黒い変態さんは、怪我とか大丈夫だったんですか？」

「ユメルちゃんは本当に可愛いな。いくら僕の名前を呼ぶのが恥ずかしいからってそんなアダ名で呼んでくれるのかい？お腹や…何故か折れてた足はもう完治したよ。怪我の瞬間は痛みで“自分の事”以外考えられなくなってたから、それに合わせて僕の魔法を応用すればほらこの通り」

そう言うっては怪しげな踊りではしゃぐ黒い変態、もといゼスとかいう黒い少年を俺は白い目で眺めていた。

こつこつ一見賢そうに見えて実質馬鹿な輩が相手なら、俺がそれっぽく振る舞えば味方になってもらえるかもしれないが、引き換えに何か大切なものを失う気がする。どうしたものか…

「ゼス君の目的はなんなんですか？私をここまで誘い出したのは」

「ああいいよ！！ようやくユメルちゃんが僕のことを名前で呼んでくれた！僕はこの瞬間を生涯忘れない！」

わかったよわかった。もうお前のペースに乗せられてやるからさっさと話を進める。

こんなやつと本気で決闘なんて出来るわけ…

「僕はね、一度好きになった人を…めっちゃくちゃに傷つけるのが趣味なんだ」

こいつ真性の変態な上にDSか!?

俺がまだ未熟だったせいかな図書館で見たときは分からなかったが、ゼスの左腕が黒く鈍く輝くのが分かった。腕輪かバンドか知らないが恐らく彼の魔道具だろう。

病室を出た時と同じあの違和感が体中を駆け巡る。これに風の結界は無意味だと分かっていた俺は、せめて違和感の中心になっているゼスから距離を取ろうと全力で後ろに飛んだ。

だが屋上出入口のドアはいつの間にか閉ざされ、俺は背中を強く打ち付けてしまった。

「ぐっ…なんで開かないの…んんんあああ」

急に耳鳴りがして、俺の意識と魔法を使う為の集中力を削ぎ落す。

「この病院程度の大きさなら、どこへ行っても僕の魔法から逃げることが出来ないよ。邪魔が入ると困るから屋上からも逃がさないけどね」

ゼスがゆっくりとこちらに歩いて来る。彼の足音だけが頭に響いて鳴り止まない。

彼との距離が縮まるにつれ違和感が増してゆく。吐き気が込み上げる。自分の意識を保てなくなる。

「昔のハック君はカッコよかったけど常に気を張っていて、僕ですら近寄る事が難しかった…だけど昨日、丸くなった彼をいたぶってみて分かったんだ」

品定めされるかのように髪の毛に触れられる。生理的嫌悪感より倦怠感が大きく、もうほとんど体の自由が効かない。

「触る…な、変態、動…け、お…れの…から…だ」

口だけはまだどうにか動かせるが、状況を覆す術が思いつかない。

「ハック君は昔の方が良い。僕がどうにも出来なくてハンカチを噛みしめるくらいツンツンしてた方が良い。だから彼が元通りになるまでは…ユメルちゃんまで遊んであげる」

今にも倒れそうな俺を掴んで壁にドアに押し付け強引に支えるぜ
ス。

意識が遠のき閉じそうになる瞳を無理矢理こじ開けられる。

「対象がユメルちゃんに限定される魔法だから、お友達にも気付いてもらえないねえ。助けが来なくて残念だねえ。」

さて、この純粹無垢な青い瞳を持つ少女でどうやって遊ぼうか…」

もう彼の黒い瞳しか目に映らない。

深淵なる漆黒からは逃れられない。

このまま俺は終わってしまうのか？

『僕のお姉ちゃんを虐めるな…!』

小さな子供の甲高いソプラノ声のおかげで、俺の意識が少しだけ戻ってくる。

俺のポケットから、かつてゼスが俺を足止めするためだけに利用したボロボロの栞が飛びだした。

「栞…ちゃん？」

図書館でないと力を発揮出来ないのか、それとも単に魔力が残っていないのか、栞はゼスの目の前で精一杯踊り狂い視界を攪乱するが、邪魔をされた当人は逆上することもなく、さして興味無さそうに子バエでも掴むみたいにあっさり片手で栞を捉えてしまった。

「何だこれは…以前見たような気もするが、まあどうでもいい」

小さく吐き捨て栞を破いてしまう。

ビリビリと断末魔の音を立てて屋上に散る栞。あそこまで小さくされてしまったら修復する事は…

何も出来ず壁に体重を預け、ただその光景を傍観させられた俺。怒りは湧いてこない。ただ無力感に苛まれるだけ。それさえ刈り取られかねない勢いで意識が遠のく。

「ねえ大丈夫？あの時僕の魔法を跳ね返したその力を、また魅せてはくれないのかい？」

御丁寧なことに小さく破り捨てた栞の残骸を病院のスリッパで踏み捻りながら俺の顔を覗き込むゼス。

俺は今出せる全力を持って相手を睨みつけたが、正直顔の筋肉をうまく動かせた自身は無い。

「残念だなあ。ユメルちゃんにはもっと別の意味でも期待してたの

に…じゃあ後はせいぜい泣き叫んで僕を楽しませてくれよ」

『いかん！それはいかんぞ！なんてつつたつてこの体で楽しむのは俺だからな！』

「ん？どこから聞こえる声だ？」

黒の少年は油断無く辺りを見回すが、緩やかな風の中で白いシート以外に動くものは無い。人の気配も無い。自分とユメル以外には…

「ここだここ。貴様の目の前だ！」

ゼスの目の前の少女が黄金の輝きに身を包んでいた。

もう意識が無いはずのユメルの口が滑らかに動き、先程までとは打って変わって少女に似つかわしくない口調で喋りだした。

「ユメル様本人よりずっと強情で純情乙女な魂だったな。だが俺様を永久に閉じ込めておけると思ったら大間違いだ…」

おい！その中途半端に変態なお前！ユメル様とコイツの魂に代わって俺様がお前の根性を根本から叩き直す！その後じっくり変態の紳士たる者の王道を教えてやる」

風が強くなり白いシートとゼスの黒マントがはためく。

雲がビデオの早回しのように病院の屋上にだけ集まって渦を巻いた。

「君は一体なんなんだ？ユメルちゃんじゃないのか？僕の魔法が効いていないのか？」

ゼスの腕に巻かれた魔道具の光がより強くなる。黒い光が直接ユメル体を覆ってゆく。

しかし少女は船乗りのように豪快に口を開け笑っている。

「残念だったな。お前の魔法はヒトの精神に働きかけるようだがその対象は著しく限定的だ。中で眠ってるコイツの魂ばかり揺さぶっても俺様は痛くも痒くもねえ。ちなみにちよいネタばれだが俺はヒトでもねえ」

局所的台風の前触れの強風に負けまいと盛大にツバを飛ばしながら大声で喋るユメル。

ある意味この状態も“彼”にとってはギャップ萌えの一部なのかもしれない。

だがゼスにとって今の彼女を見ることは、1人暮らして普段全く掃除していない女性の部屋を除いてしまった後味の悪さを噛みしめるようなものだった。

二つの意味で強大過ぎるプレッシャーを前に思わず後ずさったぜえ。

「僕の…僕のユメルちゃんを返せ！」

必死に腕の魔道具に集中するが、彼の黒い波動は黄金の輝きの前に儚く消え去るだけ。

「無駄無駄！今のお前は無力の塊。魔力をほとんど持たないそこから人間と同じだ。ここからは俺様の独壇場。謝ったって遅いからな」

27 激突する過去の王と無名の

「遅かったな。ユメル様最初の親友にして下僕様第一号よ」

「誰が下僕様よ！…アンタホントにユメル？なんで発光してるの？ホタル？」

常人ならば膨大なエネルギーの奔流を肉眼で観測するだけで意識を失ってしまうであろう、その圧倒的なまでの魔力放出を感じとったフラメとハックが屋上に駆け付けたところ、金色に輝く魔力の発生源であるユメルと、傍らに大の字で倒れているゼス（元黒い少年）の姿があった。

「そこで寝てるのは…あのゼスか？ほぼ真っ裸で色白だと印象が違うなあ」

「何呑気な事言ってるのよ！ユメル…それアンタがやったの？」

黒づくめだったゼス少年は今や身ぐるみ剥がされブリーフのようにな下着一枚。意識はあるようで、屈辱と羞恥心からか涙腺に水を貯めながらもさつきから懸命に足掻いているが、特に拘束の痕も無いのに彼の四肢は地面に硬く張りつき動かない。

「いかにも！俺様の感情表現コレクションNo.1“SがMに墮ちる瞬間”だ。本当はもっと過激な仕様にしたかったのだが…まだお互い子供だしな。後の楽しみにとっておこう」

輝くユメルが指を鳴らすとゼスの胸、腹、手足に火のついた蠟燭

が現れる。

照りつける陽光に蝟燭の熱が加わり少年の顔が激しく歪む。せめもの意地か、それともまともに声も上げられないほどの恐怖を味わったのか、彼の口からは僅かな呻きが漏れるだけ。

「どうしよう…ユメルがおかしくなっちゃった」

現実離れたその光景を、自分の友人が創り上げているという事実に茫然とするフラメ。

“ 奴はフラメ様の御学友では無い。表に出ている魂はむしろ我が同胞と言える存在…だが ”

普段は彼女の指輪の中で指示通りに動き、寡黙な態度を貫き通している赤竜が珍しくフラメに助言する。

「え？じゃあユメルは、家に封印されてた意識だけの魔道具に体を乗っ取られちゃってるの？」

赤竜は彼女の問いに答えず、代わりに直接ユメルの意識に呼びかけた。

“ 聞こえるか我が同胞よ。何故主に従わず己を押しだす？それほど魔力を常に放出し続けては主の肉体がもたないぞ ”

「ああ？…破天荒な下僕様一号に忠実に付き従うの騎士様は“ファイアドラゴン”か。眠っていた俺様に最初に声を掛けてくれたのもアンタだな？」

ユメルの体を包んでいた光が弱まりやがて消失した。性格に難が

ありそうだが、一応話を聞く気はあるようだと言われ、赤龍は思った。

“我を知る者か？だが此方はお前の事を知らん。それほどの力を持ちながら我ら“六龍”に数えられず、尚且つ奇怪な性癖のドラゴンなど…”

竜達の話に混ぜてもらえず、さてどうしたものかと痛々しい格好のゼス少年をしげしげ眺めるハツク。磔に蝋燭などという怪しげな遊びに加担しようとは思わないが、哀れな彼を助けようという気も全く起きないようだ。

一方フラメは理解不能な光景から目を閉じ背け、気持ちを落ち着かせて竜同士の会話と会話を出来るだけ雑音が少なく繋げようと集中する。友人を無事に救出する為の突破口になって欲しいと願いながら。

「人の世が始まる遙か以前から自然界を支配してきた竜族、その中でも特別力のあった“土水火風光闇”それぞれ6つの属性を統括した王達を総称して六龍と呼ばれた…だっけか？その属性の1つ、火を統べるファイアドラゴン様がこんなところに縮こまってるとはね。そういえば“虹”ってのはお国柄にもよるが、観測者によって分けられる色の数が違うらしいな」

“…何が言いたい？”

真面目な顔つきになったユメルが竜に説教するような調子で淡々と説く。

「この世のあらゆる存在は物質と精神と魂の3つで成り立つと言っ

た錬金術師。いやいや4つの元素から出来ていると唱えた哲学者。自然の理を陰陽五行道から説く怪しげな坊主。六芒星の元に世界を束ねんとする竜王。七の魔法数に導かれる賢者達。そして全にして一なる愛を謳う始まりの二人。

世界の分け方や属性の区別なんてのは、その時代を制した種族がその都度決めた便宜的な建前だ。それらは全て正しく、同時に不完全で過不足だらけの誤答に過ぎない」

ようすると、言葉を切った少女は目の前の赤竜だけではなく、まるでこの世界そのものを甚く嘲る様にケタケタと笑った。

「何千年と生きてきて、六竜なんてのは所詮井の中の蛙だって事にまだ気づかないのか？上には上がいるってことを教えてやるよ」

ユメルが片手を掲げると光が溢れ、世界が一変した。単なる転移とは比べ物にならない次元転移術は、自分達ではなく世界の方を動かしたような違和感を彼女たちに与えた。

- - - - -

時間の間隔など完全にマヒさせられて、青空に真っ白なシートがはたため病院の屋上から恐らく一瞬にして辿り着いた場所は、暗雲に包まれ活性化された火山の火口。

直ぐ傍でマグマが猛り、硫黄と熱気を帯びた空気が生物の体を肺から焼き尽くそうとフラメ達を取り巻く。

「なんてったってファイアドラゴン様だからなあ。火の中の方が本領発揮出来るだろ？」

“貴様！我が主の身体を全く顧みないその姿勢、万死に値する！！”

指輪からは赤竜が放つ白い浄化の炎がフラメとハックを包み込み、火山の炎から身を守っている。一番に焼かれてしまいそうな格好のゼスは幸いなことに転移の対象から外れたようだ。

ユメルの方はまたもや体から金色の光を放ち、猛毒ガスや高熱をものともしない。

「でも…でも、体はユメルなんだよ？どうやって闘えばいいの？」

単純な力では解決出来ない問題に直面したフラメはとても弱かった。年相応の少女が駄々をこねても、泣き叫んでも我儘を通せないのと同じ状態。

「どうやら決闘が随分前倒しになったようだな…フラメ！自分の命と無二の友人の安否どっちを取る？あのゼスがオモチャにされていたんだ。覚悟を決めないと一瞬でやられるぞ！」

ハックは次元転移の酩酊感にも動じず、ポケットから万能ナイフを取り出して刃を構えた。彼の着ている入院患者服からはパリパリと静電気のような音が鳴り出す。

「アタシは…自分もユメルも守りたい。どっちか選ぶなんてアタシには出来ない」

自分の命がかかるほど切迫した状況、それでも答えの出ないフラメに寡黙で従僕だった赤竜が最後通告をする。

“だが主よ、奴の力の底が見えない。全盛期の我に匹敵するやもし

れぬ。主が全力を出し切れないというならば……”

フラメの意志に反して世界が赤く輝き、小さな指輪にくつついた更に小さな宝石から原寸大の赤竜がうねり躍り出た。その姿は以前学校の演習場ドームで見せた時よりも遙かに大きく、限界まで伸ばした羽を含めれば近くでゴロゴロ唸り狂う火山二つ分はある。

竜の全身は一枚一枚が人間1人分もある鱗に覆われ、それぞれが炎に照らされまた自らも赤白く発光している。頭から生えている黒ずんだ2本の角は歳経た山羊のように長く伸びて楕円を描き、それより更に頑強な爪は鋭利さで敵を切り裂くより叩いて潰す方面に特化しているかのような分厚さを誇る。背中から尾まで全身を余すことなく赤銅に煌く刃が生え渡り、その堂々たる王者の貫録は観測者全てを圧倒する。

「流石にデカイな……だが下僕様1号は大分消耗しているようだが？先ほど俺様に言っていた言葉と矛盾してるようだが」

巨大な赤竜の影の下でフラメは膝をつき汗を垂らしていた。熱さによるものではない。過呼吸のような喘ぎが彼女の異常を物語っていた。本来ならば気を失ってもおかしくないはずだが、彼女持ち前の負けん気に加え、竜を相棒にすることで培われてきた耐魔力、精神力によりどうか意識を保っていた。

「無茶だファイアドラゴン！顕現するだけでこれじゃ戦いになっただらフラメが死ぬぞ！」

闘う姿勢を放棄して、今にも少女らしくなく前のめりに倒れそうなフラメを抱え、聞こえるかどうかもわからない巨体へと必死に訴えかけるハック。普段ならお姫様抱っこの形で持ち上げられるなどプライドが許さないであろうフラメも今は抗議の声すら上げられない

い。

“双方勘違いするな。限界ギリギリまで主から魔力を貰い受け、一時的に我と切り離したただけだ。”

あまり期待には答えられぬかもしれないが：ゆくぞ！名も無き狂気の竜よ！！”

「そうだな。俺様自ら案内しておいてなんだがここは少々暑苦しい。お互いの為にもさっさとケリをつけようじゃないか」

ユメルは超質量をもつともせず空に浮かぶ竜と対峙すべく地を蹴った。それが自然な事であるかのように少女の体は空を舞い、やがて視界の正面に赤き敵を補足する。

微動だにしなかった翼を大きく一回はためかせる赤竜。

一瞬でトップギアへと切り替わるその巨体からは想像も出来ないスピードで、豆粒にも等しい存在であるたった一人の少女へと全力の特攻を開始。

変態竜は結局最後までユメルの姿のまま真の姿を顕現させる事は無く、代わりに金色の光を竜に負けず劣らずの大きさまで急速に拡大、赤い彗星となった赤竜のダイレクトアタックを真っ向から受け止め呑み込もうと待ちつけた。

インパクトの瞬間を直視出来た者はいない。彼らに匹敵しその場に居合わせる事が出来る者など今の世界に存在しえない。

ふと、赤と金の光の接点から漆黒の空間が生まれそこから“視えない何か”が飛び出した。ぶつかり合った両者を含めそれに気付く者もまたいない。

せめぎ合う二つの巨大なエネルギーは火山の噴火を誘発させ、空中が震源となった地震と火山弾の噴射によって一帯は終末の世界を呈する。

衝撃の余波立つ事すらままならず、生気の薄いフラメをきつく抱きしめながら大地ごと転がるに任せていたハツクは、自分の意識はまだはつきりしているはずなのに視界が薄れてゆくのを感じた。

“少年よ、成り行きで致し方ないとは思うがこれも運命…我が主を頼むぞ”

- - - - -

戦いになっても途切れる事の無かった赤竜の加護が遂に途切れた時、少年は少女を抱えてどこか見覚えのある、懐かしい森の入口立っていた。

27 激突する過去の王と無名の（後書き）

主人公え……

幕間：ユメルの使い魔

魔法が世界を構成する一要素となつていゝ世界“エリ又エ”において所謂“使い魔”という概念は存在しない。そういったカテゴリに類するとすれば、意志の宿つた魔道具そのものが該当しないと言えなくもないが。

現在この世界ではヒトという唯一の例外を除き、伝説級の存在である竜や一角獣を始めとした魔を操る術を持つ生物はほとんどが絶滅したと考えられている。魔道具を媒介として顕現される存在はあくまで個人のイメージに基づくものであり、本物とはまた違つた概念であるとする説が主流である。

だがギエスはユメルの使い魔である。拾つてくれた彼女にそう定義付けられたから。

彼の容姿は実在する生物のどれとも似ていない。浅黒い肌の子供に尖つた耳と尻尾とコウモリのような翼、焦げ茶色の体毛を全身に生やしている。

一見すると醜悪な外見と色彩から、稀に目に映る人々によつて“悪魔の召使”（この世界の悪魔とは危険思想と強い力を持つ魔法使いの事を指す）だの“ガーゴイル”だのと呼ばれる事が多い。

おとぎ話の隅っこに登場するくらいならアリだろう。

ギエスは退屈していた。あちらの世界に精神だけ飛んでしまつた主人からの連絡が初回以降途絶え、こちらから応答願つても音信不通。

「異次元を繋ぐ通路つてのはこつちも不安定なものなんかねえ…」

彼の理解力や判断力、知能指数は人間と同程度であり、魔法もそこいらの人間より遙かに通じている。彼自身はそう思っているし、実際今まで彼に敵う人間は主人以外にいなかった。

だからこの世界にユメル（の中身）がいない今、彼が怠けてしまうのも無理は無い。

「俺あいつからあのじゃじゃ馬姫の命令を待たなきゃ動けない人間になっちまったんだ？いや人じゃねえけど」

独り寂しく突っ込む彼が主人から賜った任務は“ユメルの肉体の監視”だった。

入れ替わった人格がどんなものか把握し、危険が及ぶようなら守ってあげて欲しいというのが主人の命令の本筋だったが、今のところ彼は表面上の任務しかこなしていない。

ユメルが廊下を彷徨っていた時は昼寝していた。その後飛び起き慌てて主人のメッセージを伝えに行ったら、ちょっとばかり目立ってしまった。自業自得だがそのせいで監視しにくくなったから不貞腐れていた。

彼女が不良に絡まれた時は面白がって傍観していた。

菜と戦っていた時は久しぶりの読書に夢中になっていた。

外でもチンピラに絡まれた時は、主人が何故外出を控えて自分に小間使いばかりさせるのか少し分かった気がした。

インディソファイア家には不思議な結果が張り巡らされており、正面玄関以外からは近づけなかったので諦めて早寝した。

次の日またもチンピラの残党に待ち伏せに遭ったユメルを見て、主人の気苦労を察した。

授業で退屈そうユメルを見てざまあと思った。

主人の部屋でユメルが“ヤツ”を肉体に取り込んだ時は少し感心もした。

「御主人つて…表に顔を出すとイベント盛りだくさんだなあ。暇を
持て余した俺にも少し分けてくれねえかなあ」

だったら助けてあげればいいと思うが、必要以上に魔法を使うと監視がばれる恐れがある、という言い訳で傍観に徹する彼の心意気はどういったものか。

そして病院での出来事。

誰の助けも期待できない悪条件の下ユメルの意識が途切れ、流石に助けに入ろうかとギエスも重い腰を上げた時…“ヤツ”が目覚めた。

「やっぱり抑えきれなかった…今の主人とその友人達を過大評価し過ぎたか。さてどうしたもんかねえ？」

“ヤツ”が封印されたのは性格が破綻してるだけでは無いことを

彼は知っていた。もちろん性格が悪いから封印されたのだが。

今のユメルには到底扱えなさそうな魔法をポンポン放って他者を圧倒する様子から、本気の自分でも手に負える事態では無いと判断したギエス。

赤竜が相手をしてきている間、ギエスが助けを求めたのは自身の存在を知り主人の養父である校長ガイン…ではなく、あるうことかかつての主人の行いのせいで現在内政不安に陥ってしまったという隣国“リンドーラ”だった。

そこのお姫様が異形の彼に唯一親しく接してくれた存在だから、という理由ならまあ仕方ないだろうか。

「リリン様リリン様！お願いです助けて下さい！」

「まあギエス！見た目も中身も小粋で小悪魔な私の数少ない親友！貴方が私のところに顔を出すのはいつも何かある時だけ。もっと遊びにいらしていいのよ？」

かつて主人と入れ替わっていた人物の1人であり、リンドーラ王国の第一王女“リリン・リンドーラ”。

ギエスにとっても唯一友人と呼べる相手である王女に対し、彼は自分の外見が彼女に迷惑を掛けないようにと気を使ってあまり会わないようにしている。大切に想う人ほど疎遠になってしまうのは彼だけの不幸ではあるまい。

「申し訳ありません。リリン様にしか頼る宛ての無い私めをどうか御容赦ください。実は…」

リリン王女の前ではギエスの砕けた口調も改まる。

かいつまんでユメルの説明を受けた彼女は早速旅支度を始めた。

手慣れた動作は外出をあまりしない、させてもらえない王女という身分に違和感を感じる程だ。

「しかし、現在エリヌエでそこまで活発な火山帯を私は知りません」

簡素だが手の込んだ作りの部屋着をクローゼットに片づけ、代わりに頑丈な生地で作られた旅服を着込む王女。

時折あらわになる素肌に顔を背け赤くしながらギエヌは説明を続ける。

「ヤツは次元転移の術を心得ているようでして詳しい場所は分かりかねます…しかし私はユメル様の元に駆けつけられるようにと特殊な印を刻んでおりますので、移動に関しては御心配無く」

「わかりましたわ。貴方がそこへ連れて行って下されば、私の魔法で事を収められるはず」

ものの数分で支度を済ませたりリン王女に向かって跪き、ギエヌは剛毛で覆われた無骨な五指を差し出す。

それをなんのためらいもなく手にとった王女に、彼は変わらぬ忠誠と感謝を祈った。

「貴方様の神がその手を離しませんように」

「貴方のその手が私を離しませんように」

1 王女様

これはいつかの夢の続きなのか

光の中は複雑に入り組んだ迷宮だった。

狭い通路は松明など灯っていないが、どついうわけか視ることに不自由は無い。

俺は一度も歩いた事の無い迷路を勝手知ったる足取りで迷い無く進んでゆく。

途中出くわす魔物は肩に背負った両刃剣で片っ端から一刀の下に切り捨てた。遠距離からプレス攻撃をしてくる中型のドラゴン相手には、射程外から魔力で生成した光の矢を放ち急所を射抜く。物理攻撃の効かない不死者やゴーストへは癒しの光を浴びせて浄化する。

“ためらわないのね？”

“だってこれは夢なんだから？”

RPGでよくある光景だ。俺が主人公となって敵を屠る感覚をリアルに感じていることだけが特殊な仕様であると思えばいい。

異形の生き物を切った時の不快な感触と血飛沫。

有機炭素系化合物が燃える独特の臭気。

時折掠める敵の攻撃は仮想の痛み。

“本当にそれでいいの？”

“夢ならなんでもありだろ？”

“でも、あなたが目覚めた夢の中で同じ事が出来るかしら？”

返り血に染まって重くなった自分の服すら気に留める事無く俺は
進み続ける。

ゴールは無いと既に知っているはずの道程をただひたすら前へと

ふと足元に視線を移すと、人間の形をした魔物が倒れていること
に気付いた。

いや、コ…レ…ハ…ホ…ン…モ…ノ…ノ？

思考停止に陥りそうな脳髓を強引に働かせて“ソレ”を凝視する。
“ソレ”の中指にはどこか見覚えのあるルビーの指輪が

- - - - -

「うわああああっ！……………?」

「よつやくお目覚めですか。こんな良いお天気にも悪夢でも見ました?」

俺はキングサイズの豪華なベッドに寝かされていた。

朝日：いや昼時の太陽が大きな開き窓から鋭い陽射しを浴びせ、それを一身に受け止めるこれまた大きなカーテンが時折吹く風によつてたなびき日光を部屋に漏らす。

「今はゆっくり養生して下さい、と言うべきなのかしら？」

貴方はもう10日も眠っていたのだし、医者が診た限りでは体に異常も無いそうなので、もしよかったですら御一緒にお散歩しませんか?」

透き通るようなソプラノを奏でる声の主に従い、体をゆっくり起こしてみる。

久しぶりに動かす間接と骨の痛み、歯を食いしばったが、一応脳が送った信号の通りに動いてくれた。

「それともお食事にしましょうか? リンドーラの民族料理が舌にあえば良いのですが」

俺を見守ってくれていたのは一国の王女様と言っても通じるだろう1人の少女。

美の追求の為に際限無く努力を重ねたと思われる容姿、それを飾る金に糸目をつけない衣装もまた素晴らしいが、特に彼女が自然に放っている雰囲気というかオーラのようなモノは、他の追隨を許さないであろう…他の？

「いえそこまでは。あなたは一体…俺…いや私は…？」

自分の事をまるで思い出せないことに気付いた俺。

俺？

絹のように滑らかな薄い上掛けを剥いで自分の体を覗きこむ。

高級そうな真っ白い肌着も、そこから垣間見える色白できめ細かな素肌と体軀は女の子そのもの。

耳を覆って肩まで届きそうな銀髪に触れてみる。毛先をちゃんと整えればコスプレ用の作りモノだと勘違いしそうな代物だ…コスプレ？

「まあ慌てなくてもゆっくり説明して差し上げるわ。まずは立ち上がって歩いてみましょう。私の名前はリリン」

「えつと俺…私は…」

名前すら名乗れない自分に齒噛みしつつも、全てを理解しているかのように微笑む彼女の手引かれて私はベッドから立ち上がった。

.....

「ユメルさんと直接お話しするのは初めてですね。と言ってもギエスによれば中身が違うのかなんとか」

「はあ…えと、初めまして、リリンさん？」

私の名前はユメルというのか？話が進まないから取り敢えずそれで納得しておこうと思った。

あとギエス？記憶の片隅で見たか聞いたような覚えがある…人？

「呼び捨てで構いませんわ。私とユメルさんの仲ですもの」

「いや、リリンさんもさん付けてるじゃないですか」

「あらやだ。ではユメル、お互いに敬称は無しということ。改めまして、ようこそリンドーラの王宮へ」

私はリリンに手を引かれテラスへと案内されていた。手入れされた緑の風景はまるで絵画のようだ。

…とっても広い

ほかほか温かい陽気の中、本格的メイドさんの格好をした給仕がほんのり甘い香りのするお茶を入れてくれた。頂きますと断って一口啜ってみる。

…とっても美味しい

丸いテーブルの向かいにリリンが座ってゆったりと女神様みたいに微笑む。

…とつてもなんか幸せ

「少しは落ち着いた？体は無理してませんか？」

むしろ適度な散歩とお茶のおかげで大分調子が良くなった。

「はい、もう大丈夫です。何て言えばいいのか…記憶が曖昧なんですけど、リリンが助けて下さったんですよね？」

私も彼女には敵わないが、笑顔で返事を返す事が出来た。

王宮とか言ってたし、やっぱり彼女は身分の高い人なんだろうか？首を優しく縦に振る彼女の周りは静寂に包まれている。もっと付き人みたいなのがいてもよさそうだけど、私とリリン、それとさつきお茶を入れてくれたメイドさんが後ろに控えている以外にこの広いテラスに人の姿は無い。

「ここは離宮なの。複雑…でもないのだけれど、事情があつて基本的に私はココを離れる事が出来ません。身の回りの世話をしてくれるのも彼女“エレン”だけ」

心を読んだように応えてくれるリリン。彼女の視線を受けたメイドのエレンさんが私に向かって軽く会釈する。無表情は私への警戒か、それとも一級メイドたる者の矜持だろうか。

彼女達にも色々と事情がありそうだが、まずは自分の事をどうにかしないといけない。

「そうなんですか。ところで…実は私、記憶が曖昧どころか何も思い出せないんです」

「まあそれは大変」

ちつとも大変じゃなさそうに言うリリン。むしろ笑顔が増した気がする。

「ではしばらくココでのんびりしていくといいわ。それはもう何日でも。いつそココに永住なさい」

「…リリンは遊び相手がいなくて暇なんですか？」

「その言い方はちょっと直球過ぎて酷いわ」

「御機嫌麗しくない王女様は召使1人では遊び相手が足らず欲求不満の様子」

「なんだか卑猥な言い回しね」

本当に王女様だったのか。今更畏まっても仕様が無いんだけど。

「しばらく厄介になります」

「ええ是非そうなさい。絶対楽しいから」

貴方が楽しむんでしょう？という言葉は呑み込んで頭を下げる私と、笑顔満開で私を抱きしめるリリンだった。

.....

「なんか凄くデジャブな悪夢みたいな」

「何か言った？」

「いえなんでもありません」

私はリリンと一緒に風呂に入っていた。一応体は拭いて貰っていたようだが、10日も寝ていたなのでちゃんと綺麗にしておこうとの誘いを、私は断り切れなかった（何故断ろうとした？）

浴場は同時に20人は入れそうな、とても個人用とは思えない広さだった。もっとドデカイ場所が脳裏にチラついたけど、離宮とはいえこれほどの広さを超えるお風呂なんて私なんかじゃちょっと出会える訳無い、とデジャブの根源を切り捨てた。

リリンは普段メイドのエレンさんと一緒に入っているらしいが今は私と二人きり。

お風呂は確かに気持ち良い、心地良い、体が温まってリラックス
... かなんなんだけど。

人魚が担いだ壺から贅沢に注がれるお湯を眺めながら、私は自問自答していた。

「なんで服を脱ぐのを躊躇ったんだろう？なんでお風呂でドキドキしてるんだろう？なんで女の子同士なのにリリンを直視出来ないん

だろう？なんで自分の裸がこんなに恥ずかしいんだろう？」

「ユメル大丈夫？顔が赤いようだけど」

腰まである栗色の長髪を丁寧に洗っていたリリンが心配して声を掛けてくれた。

止めて！私の視線をあなたの素肌に向かわせないで！

「平気…少しのぼせてるだけです」

……ブクブクブクブク？

「ユメル！？少しじゃないわよ！早く上がりなさい！」

.....

「あつという間の出来事でしたとさ」

「お風呂でのぼせるのは恥ずかしい事じゃないわよ。そんなに急いで忘れる事も無いじゃない。それに……」

「それに？まだ私を苛め足りませんか？」

「ユメルの火照った顔も可愛かったし。思わず襲いたくなっちゃっ

た」

「申し訳有りませんごめんなさい勘弁して下さい」

これもまた悪夢の繰り返しなのかもしれない。

先ほどお茶会をしたテラスでリリンに介抱されながら涼んでいると、エレンさんが無言を貫いたまま冷たい紅茶を入れてくれた。ちよつと刺激の強い柑橘系の香りが意識を覚醒へと導いてくれる。

「ユメル、貴方もしかして男の子？」

…はい？

真面目な顔で唐突に可笑しな事を言うリリンに私は困った表情を作るしかない。

「お風呂一緒に入りましたよね？お互いばつちり見ましたよね？」

自分で言ってるってなんか恥ずかしくなるが事実だ。

「いえそう言う事では無くて。」

だって貴方の反応があまりにも初々しいから、もし人格の入れ替わりが起こり得るなら、性別の垣根くらい超えても不自然では無いのかなと思っただんです。

でもそれにしては物腰や衣服の着脱は結構手慣れている感じなんですよね。入れ替わってどのくらい経つのか訊きませんでしたけど…もしかしてオカマ？」

王女様のクセに発想がえぐいと言わざる負えない。

「記憶喪失なのでなんともし難いんですが、オカマでは無いと思います」

もしそうだったら逆に女の裸を見てもドキドキしないと思う。いや断じてオカマじゃないから分からないけれど。

「まあどちらにせよ体は女の子なのだから一緒にお風呂に入るくらい何の問題もありませんわよ。お互い体を取り換えっこした仲だもの。危険人物でもないですし。ね？エレン？」

心は狼かもしれませんが、なんて彼女の裸で赤面していた私に言える筈もないが、取り換えっことは？

笑顔でさらっと凄い事をいう王女様にエレンさんは無言で同意の意を…しかねた？

「その娘はエリヌ工全土の国家レベル機密情報裏ブラックリストに載せられている第一級危険人物です。同時に最重要保護指定も受けている異端児ですが…」

「エレンが喋った！！」

私だけでなくリリンも彼女の声を聴くのは初めてだったようだ。

随分仲が良さそうに見えるけど、そんなに長い事一緒ではないのか？

「リリン様の同意があれば今すぐにでもナオレイナ国へ送り返しますか？」

私はエレンさんの口から初めて出る音よりもその内容に驚いてい

た。

— 一体どんな生き方をしたら、まだ少女である私の短い人生でそこまでの地位が確立するのだろうか？

2 怪しげな雲行き

「うとうと、眠れないよう。なんか寂しいよう」

与えられた寝室が広い。ベッドがデカイ。必要以上にモフモフする。借りておいてなんだけど下着とパジャマも異様なくらいスベスベしで個人的に受け付けない。

「私って絶対高貴な身分じゃないな」

よくこんなところで10日も熟睡していられたと思う。

リンドーラの王女リリンと、メイドのエレンさん二人だけが暮らしているという離宮で、私は意識が戻ってから最初の夜を迎えていた。

お風呂上がり、エレンさんが用意してくれたのであるう夕食の席でリリンは散々粘っていた。彼女が私と一緒に部屋で寝る事を、彼女の世話係でもあるエレンさんが頑なに拒否したからだ。

「なんで私がユメルと一緒にダメなの？」

「…（首を横に振るエレンさん）」

「ユメルが寝ている間は交代で面倒を見てたじゃない」

最初に起きた時に気付くべきだったが、私はエレンさんだけでなくリリンの、一国の王女様の手厚い看護を頂戴していたようだ。

「…（それでも静かに首を振るエレンさん）」

「女の子同士襲ったり襲われたりなんて無いから大丈夫よ」

リリンの意味深な視線に寒気を感じて私は身震いする。

「…（そういう意味では無いと首を振るエレンさん）」

何故だろうちよつと安心した。

「まさか…私がエレンから離れて寂しいとか？」

「…（素早く大きく首を振るエレンさん）」

「そこはちよつとくらい迷つてよ！」

結局、冗談すら通じない無言の圧力に屈したりリリンは、エレンさんが作ったと思われる（良く言えば家庭的、悪く言えば大味な）魚介フルコースを半分も残して寝室へと引つ込んでしまった。

たまには王族の人間がやってきて夕食を共にするのもかもしれない。私は華美で天井の高い（あのシャンデリアが落ちてきたら人間5人は圧殺されるだろう）大きな部屋でエレンさんと二人きりにされて気まずくなり、でも無言で此方を見つめてくる当の料理人の目の前で食べ残しをする勇気もまた起きず、11歳少女の胃に相応の負担を掛けながら急いでメのパエリアを平らげた。

「ご馳走様でした。お部屋は、私が寝ていたところをお借りしていいんですよね？」

リリンの姿が無いところでも、変わらず無言で肯定の意を示すエレンさんを1人残し、私はいそいそとその場を退席させていただいた。

.....

「それにしても私が、賞金すら懸からないブラックリスト入りするような人物だったとはねえ」

ベッドに仰向け大の字になりながら自分の記憶を辿ってみる。何かを思い出そうとすると突然頭痛が…なんて事はないが、なんだが今の自分がちぐはぐな感じがして良い気分では無い。眠れない原因はベッドだけではないのかもしれない。

ふと掌を目の前にかざしてみる。何かが解放されたがっている。体に私以外の何か潜んでいるような、でも不思議な事に“ソレ”に対して悪い気はしない。

「違和感をもっと別の…私自身の感情とどうか意識の違い」

頭がごちゃごちゃしてきたので、そういえば歯磨いてないなとか日常的な事を考えていたら、持ち上げていた掌が勝手に動いて出入り口の方角を向いた。

それが合図だったかのように、僅かな音を立てて開く扉。

立っていたのは夜這いごっこ(ごっこだよね?)に来たリリン…では無くエレンさん。相変わらず無表情で無言のままだったが、メイド服の上から佩かれてうざったそうに存在を強調する“長刀”が、変化の無い彼女の代わりに殺気を大盤振る舞いしていた。

「あの…えと、どうかしました？子守唄でも歌いに来てくれたんで

すか？まさか添寝？」

私は敢えて刀の存在には触れないように、緊張を悟られないようにゆっくり起きあがりながら会話を切り出す。

彼女はこの離宮の警護も担当しているのかもしれない。きっとそうに違いない。

ここに来たのもただの見回りで……

「シッ！！」

私の儚い期待を裏切ったエレンさんは短い気合と共に刀を抜き放った。明らかな攻撃の兆し。

彼女の居合いは“神速”などと格好良い言い回しで語れるものではない。無かったかもしれない。私の肉眼が捉えられる速度を容易く上回っていた事だけは確かだが。

それにしたつていかに長刀といえど、部屋の外からこの広い部屋の奥に配置されたベッドまで優に5メートルはある。刀の間合いには程遠い、今のはただの抜刀動作の筈……だった。

しかし私の体は滑らかに動いた。

ベッドにうつ伏せになった私の数センチ上空を架空の斬撃は目論見通り素通りした。

同時に私の手がまたしても勝手に動き、エレンさん目掛けてカウンターで火の玉が発射される。

「嘘！？…うへえ」

刀の鎬をこちらに向けて火の玉から身を守るエレンさん。

彼女が刀に纏わりついた火炎を振り払っている隙に先程の斬撃の跡を辿ってみると、壁に大きな亀裂が入っていた。

簡単な想像から思いつくのはカマイタチだろうか。少なくともあの斬撃に一般的な間合いの概念は通用しないようだ。

「エレンさん！私何か悪いことしましたか！？だんまりしてないで喋ってくれないとウヒャー！！」

最初の一撃で仕留められると踏んでいたのに、それを回避するどころか反撃をしてくるのは予想外だったのだろう（私も自分の手から火の玉が出るなんて予想外だ）。彼女は僅かに驚きの表情を浮かべていた。

しかし私の声に耳や口を貸す気は無いらしく、すぐさま抜いた刀を両手で握り締めて右斜め上段から袈裟切りを放ってくる。

ベッドを掛け摺って斬撃の仮想ルートを避ける私へ、さらに連続して斜め切り上げ、追い打ちで真っ向から切り下ろし。

私の代わりにベッドが真っ二つになり、大量の羽毛が舞ってお互いの視界が閉ざされる。

「ちょちょちょっと本気で私を真っ二つにしたいんですか！？今なら土下座すれば許してあげなくもな…え？」

なんか自分らしくない、しかも圧倒的劣勢にそぐわない強気な台詞が私の口から出てきた。

あんな物騒な刀持って近づかれても困るけど、徒手空拳の間合いの外から一撃が必殺の威力のある連続攻撃をお見舞いされ続けたらどうしようもない。

いや、そもそも私じゃ大人のエレンさんが相手じゃ武器無しで取っ組みあっても体格差で負けちゃうんじゃないだろうか？

偶然飛び出た火の玉に期待するのも

「……………」

此方の思考の迷路などお構いなしに、無言の姿勢を保ったまま羽毛の雪に斬撃の雨を重ね続けるエレンさん。

私は天性の勘？で直撃を避け続けるが、腕や足、洋服には少しづつ赤い染みが増えてゆく。

「…」

「…」

微かな刀の風切り音、それによって切られた家具が崩れる音で世界を塗り替える。

私は説得を諦めた。生きる事を諦めたわけじゃない。

相手の口が塞がっているなら体に訊くまで！！

…自分らしい思考って一体なんだろう。

完全に体を成さなくなったベッドを置き去りにして、私は刀を振り回すエレンさんへ少しずつ近づいてゆく。

一歩づつ二人の距離が縮まるにつれ私の傷も深くなる。それでも歩みを止めずにかつ致命傷は確実に避け続ける。

今までこんな生き方してたのかなあ？だったらもう二度とごめん
だ。

たった数十秒が何時間にも感じられた。

大きく見開かれたエレンさんの瞳がすぐ近くにある。

刀はもう振られない。振れない距離まで近づいた私に膝蹴りや柄

打ちをする気は無いのだろうか？それともただ動揺で動けないのだけか。

「ごめんなさい」

私は一言断つてから（そんな余裕すらあつた自分に驚きつつ）、右手の平に左手を添えて組んだ腕を彼女が持つ刀へ。

一瞬風が湧いた気がする。

優しさに溢れた息吹が私の一動作を優しく見守ってくれる。

掌から伝わった力の流れは間近のエレンさんを置き去りにしたまま、掌底の対象となつた刀を真ん中から割って吹き飛ばした。

掌底は本来相手に怪我をさせず行動不能まで追い込む技で、圧倒的優位な立場や、よく訓練された人間が使うものだ。普通のパンチなどと比べリーチが短くなり、表面積が大きくなるため殺傷力、貫通力でも劣る。唯一のメリットは自分の拳を傷め難いことくらいだが…

いくら細くて薄い日本刀だったとはいえ、それを折る程の威力を發揮した自分の掌を不思議に見つめて立ち尽くす私が出た。

.....

気付けば美しい歌声が聞こえてくる。

心の優しさと悲しさ、音色の柔らかさと鋭さ、白と黒が混じらずに同居している。

まるで今の私みたいだなと思った。火と風となんか変な体術は私自身の力なのだろうか？

私の中には確実に何か潜んでいる。

でも記憶が戻った時今の私が消えてしまわないとか、せつかく助けてくれたリリンとエレンさんに正当防衛とはいえ迷惑かけちゃって申し訳ないとか、そんな気持ちも歌声がゆっくり薄めて流してゆく。

“ずっと待っていたの”

私を抱いてくれる女の子を”

…ん？

“ずっと願っていたの”

私の好みの女の子がある日突然空から降ってくるのを”

なんだか歌詞がおかし…

“そして願いは叶ったの”

これは私の夢なのかしら”

歌声は夢心地へ、相反して歌詞は現実に戻す逆ベクトルが同時に成立する矛盾を押しとおす膨大な魔力のうねり

乙女 “可愛くて儂げで時々男の子みたいにウブな反応してくれる理想のかつて肉体を共有しあつた特別な絆から永遠を誓い合う関係へ…”

私は目を覚ましていたけれど、その歌声（よりは歌詞の内容から）呆気にとられて口をパクパクさせる。

“押し付けられた契約から逃れる唯一の術

私だけの愛しい愛しいユ・メ・

「それはきつと夢ですから！！きつと何もかもが間違いですから！
」

「…あらユメル、もう目が覚めたの？」

エレンさんが持っていた刀の半分を拾い上げたリリン。

指先で刃をちよいちよい突くと真っ黒な影が刀身から飛び出し、
空気に混じって消えてしまった。

「魔力をぶつけると消えるみたい。あの黒いのがエレンを操っていた
たようね」

訊きたい事はいっぱいあったが何から口にすればいいか迷っていた
私に、リリンは突然頭を下げた。

「ごめんなさい。私の世話係が大変な迷惑を掛けてしまいました。
本当にどう償えばいいか」

「いえ、よくわかりませんが操られていたなら仕方が無いですし、
大した怪我也…あれ？」

そんなに長い間気絶していたのだろうか？いやそんな問題では無
い。

私についていた無数の切り傷は跡形もなく消えていた。洋服にも
ほつれ一つ見当たらない。散々荒らされていた羽毛や木片、瓦礫だ

らけだった部屋も完全に元通りになっている。

「…ホントの魔法みたいだ」

「そう、私の操る魔法の1つ。でもこんなことでは私とエレンの罪は償い切れないわ…だから！」

絨毯の床から起きあがりかけた私を押し倒す勢いでリリンが抱きついてくる。

「まってリリン！予想は出来ないけど嫌な予感しかしないから！！」

「ユメル！私を貴方のお嫁さんにして下さい！」

「なんでそんなにいきなり唐突に！？私も含めて誰も話についていけないから！私たち女の子同士だしそもそもまだそんな歳でも無いし」

リリンは私よりは年上に見えるが、しかしそれにしても…王族とはどこの世界でも焦って相手を決めるものなんだろうか？

「かりそめでも構わない！でも本当に愛してくれたら凄く嬉しい！」

何故かいきなり口づけを迫る彼女をどうにか押し返そうとする私。

無事に正気に戻っても休む間もなく私たちの下に駆け付けてくれたエレンさん。彼女の助けが入るまでに、部屋は再びホコリに塗れることとなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5020u/>

異世界に迷い込んだと思ったら少女になってた

2011年9月4日17時31分発行